上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅵ

推定 上野国府

～平成28年度調査報告～

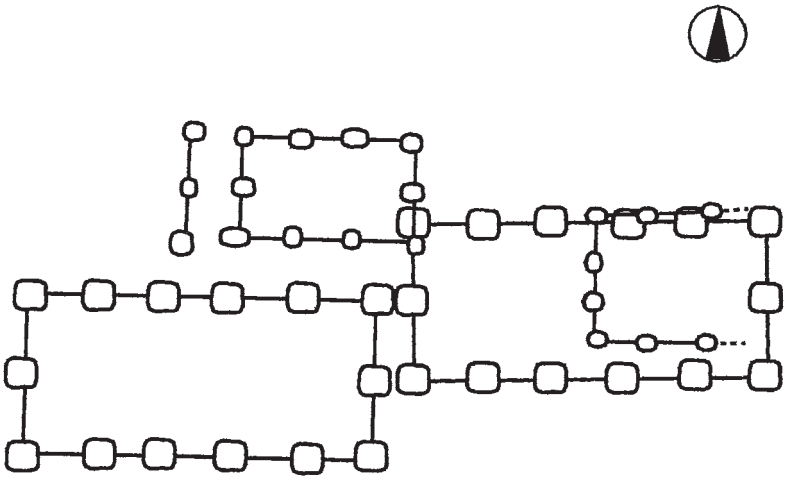
2018.3

前橋市教育委員会

上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅵ
推定 上野国府
～平成28年度調査報告～
前橋市教育委員会

推定上野国府

～平成28年度調査報告～



元総社小学校校庭の掘立柱建物群（平成28年度現在）

２０１８.３

前橋市教育委員会

1　元総社小学校校庭（48トレンチ）より榛名山を望む（南東から）

2　48トレンチ全景（南から）

３　４号掘立柱建物跡（手前側の模造柱）と１号掘立柱建物跡（奥の模造柱）（東から）

４　45ａトレンチ１号道路遺構全景（北東から）

５　１号道路遺構南側溝の土層堆積

６　45ｂトレンチ２号道路遺構南側溝（南東から）

はじめに

前橋市の総社・元総社地区周辺は、宝塔山古墳や蛇穴山古墳をはじめ山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺などの諸施設が立ち並ぶ古墳時代から律令期にかけての上野国の中枢地域と考えられ、上野国府もその一角にあったと推定されています。

国府とは、律令制の下に各国ごとに置かれた国司の役所で、特に上野国府は平安時代の中頃に起きた平将門の乱の舞台となるなど、記録にも度々その名前が登場します。しかしながら、その中心施設の国庁の位置や、国府域の範囲など、その内容については、詳しいことが分かっていません。

この問題を解決し、後世にわたり保存・活用するための基礎的な資料を得るために文化庁、群馬県教育委員会の指導を受けつつ、「上野国府等調査委員会」において毎回検討を繰り返しながら、平成23年度から継続的な確認調査を行っております。平成27年度で第１期の５ヵ年計画が終了となりましたが、さらなる調査が必要なことから、５ヵ年計画を延長し、確認調査を続ける運びとなりました。

今回、上梓する報告書は、その第２期の１ヵ年目の調査内容をまとめたものです。本年度の調査では、平成27年度調査で再調査した掘立柱建物跡の東側で同規模の掘立柱建物跡を新たに確認したほか、鳥羽町内で古代の幹線道路である東山道駅路と考えられる道路跡を確認することができ、これまでの調査結果に新たな要素を盛り込むような第２期の幕開けにふさわしい成果を挙げることができました。

最後に、本事業の推進にあたり、国・県・市の関係各位のご理解とご協力に対して深く感謝する次第です。また、地元の元総社地区各自治会をはじめ土地所有者の皆さんからも惜しみない協力をいただくことができましたことを、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成30年３月

前橋市教育委員会

教育長　塩　﨑　政　江

例　　言

1　本報告書は、上野国府等範囲内容確認調査計画に基づき、第２次５ヵ年の調査計画（平成28～32年度）の１年次調査として、平成28年度に実施した発掘調査の報告書である。

2　遺跡は群馬県前橋市鳥羽町543番地１号ほかに所在する。

3　発掘調査は、上野国府等調査委員会の指導のもと前橋市教育委員会が実施した。調査の要項は以下のとおりである。

①発　掘　調　査　期　間　　平成28年５月27日～平成28年12月20日

②整理・報告書作成期間　　平成28年12月21日～平成29年３月31日

③調査組織（平成28年度）

上野国府等調査委員会

⑴　委 員 会

委　員　長　松島榮治（元前橋市文化財調査委員）

副 委 員 長　須田　勉（元国士舘大学文学部教授）

委　　員　林部　均（国立歴史民俗博物館教授）、梅澤重昭（元前橋市文化財調査委員）、井上唯雄（前橋市文化財調査委員）、前沢和之（館林市史編さんセンター専門指導員・跡見学園女子大学兼任講師）、右島和夫（群馬県文化財保護審議会委員）

幹　　事　小林　正（群馬県教育委員会文化材保護課文化財活用係副主幹）、新井　仁（同埋蔵文化財係指導主事）、関谷　仁（前橋市教育委員会事務局教育次長）、小島純一（同文化財保護課長）、前原　豊（同文化財保護課専門員）

顧　　問　佐藤博之（前橋市教育委員会教育長）

指　　導　文化庁文化財部記念物課文化財調査官、羽鳥尚久（群馬県教育委員会文化課保護課長）

⑵　調査部会

幹　　事　松田　猛（高崎市立多胡小学校長）、田中広明（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査部主幹兼調査第二課長）、出浦　崇（伊勢崎市教育部文化財保護課係長代理）

⑶　事 務 局（担当課　前橋市教育委員会文化財保護課）

課長(幹事)　小島純一　　文化財保護課専門員　前原　豊

係　　長　梅澤克典

係　　員　神宮　聡、並木史一、藤坂和延、高山　剛、阿久澤智和、寺内勝彦

④発掘・整理担当者　　阿久澤智和・並木史一

4　本書の編集は阿久澤・並木が行った。

5　発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

齋藤簡詳、髙澤京子、仲野正人、奈良啓子、峰岸あや子、村越純子、山田哲也

6　発掘調査にあたり、井艸町子氏、小野里義成氏、笹尾勝美氏の土地を借用した。

7　調査および報告書作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導・御協力があった。

群馬県教育委員会文化財保護課、（公益財団法人）群馬県埋蔵文化財調査事業団、前橋市立元総社小学校

井艸町子、出浦　崇、小野里義成、井上唯雄、梅澤重昭、大橋泰夫、小林　正、笹尾勝美、須田　勉、田中広明、林部　均、前沢和之、松島榮治、松田　猛、右島和夫

8　発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1　挿図中に使用した北は、座標北である。

2　挿図に建設省国土地理院発行の１：200,000地形図（宇都宮、長野）、１：50,000地形図（前橋）を使用した。

3　本遺跡の略称は、28Ａ147である。略称の後に枝番を付し、トレンチ番号を示した。

4　遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

Ｈ…古墳～平安時代の竪穴住居跡　　Ｂ…建物跡（掘立柱建物等）　　Ｗ…溝跡　　Ｔ…竪穴状遺構

Ａ…道路遺構　　Ｉ…井戸跡　　Ｄ…土坑　　Ｐ…ピット・柱穴・貯蔵穴　　Ｏ…落ち込み

5　遺構・遺物の実測図の基本的な縮尺は次のとおりである。ただし、図の配置上、他の縮尺を使用したほうが妥当な場合は、その他の縮尺を適宜使用した。

遺構　　全体図・遺構配置図…１：200　　遺構断面図…１：60　　住居跡等…１：60（竈…１：30）

　　掘立柱建物跡…１：100　溝…１：60、１：80

遺物　　1/3・1/4

6　計測値については、（　　）は現存値、［　　］は復元値を表す。

7　遺物観察表については、以下のとおり記述した。

①層位は遺構出土の場合、「床直」・「底面」：遺構底面より10cm未満の層位からの検出、「覆土」：床面より10cm以上の層位からの検出の２段階に分けた。

②口径、器高の単位はcmである。現存値を（　）、復元値を［　］で示した。

③胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名等を記載した。

④焼成は、基本的に極良・良好・不良の三段階とした。ただし、須恵器について酸化焔焼成によるものは「酸化焔」と記載した。

⑤色調は土器外面で観察し、色名は『新版標準土色帳』（小山・竹原1967）によった。

8　遺構平面図の－－－－は推定線を表し、－‐－‐－は堅緻面の範囲を表す。

9　スクリーントーンの使用は、次のとおりである。特別な場合は図版ごとに凡例を設けた。

遺構平面図　　粘土分布…　　炭化物分布…　　焼土分布…　　灰分布…

遺構断面図　　構築面…　　灰分布…

遺物実測図　　須恵器断面…　　陶器・磁器断面…　　煤付着面…

　　陶器・磁器表面…　　黒色処理…

10　主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B　（浅間Ｂ軽石：供給火山・浅間山、1108年）

Hr-FP（榛名二ッ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、６世紀中葉）

Hr-FA（榛名二ッ岳渋川テフラ：供給火山・榛名山、６世紀初頭）

As-C　（浅間Ｃ軽石：供給火山・浅間山、４世紀前半）

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯……1
⑴　調査のあらまし……1
⑵　これまでの調査結果……1
⑶　平成28年度調査……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境……2
1　遺跡の立地……2
2　歴史的環境……4

Ⅲ　調査方法と経過……7
1　調査方法……7
2　調査経過……8

Ⅳ　基本層序……12

Ⅴ　遺構と遺物……14
1　各トレンチの概要……14
2　各トレンチの検出遺構……15

Ⅵ　ま と め……60
1　元総社小学校校庭について……60
⑴　２号・４号・５号掘立柱建物跡について……60
⑵　元総社小学校校庭で検出された各遺構の空間的関係……62
2　国庁推定地Ｂ・Ｃ案周辺について……64
古代の区画溝……64
3　推定東山道駅路国府ルートについて……65
⑴　調査の概観……65
⑵　45a・ｂトレンチで検出された道路遺構について……65
⑶　推定東山道駅路国府ルートの既調査地点との比較……67
4　おわりに……68

挿図目次

Fig.1　推定上野国府位置図 …… 3
Fig.2　周辺遺跡 …… 5
Fig.3　２m小グリッドの呼称 …… 7
Fig.4　グリッド設定図と平成28年度調査区 ……10
Fig.5　上野国府等範囲内容確認調査基本層序模式図 ……13
Fig.6　各トレンチ土層柱状図 ……13
Fig.7　トレンチ全体図(1) ……16
Fig.8　トレンチ全体図(2) ……17
Fig.9　45ａ・ｂトレンチ各遺構(1) ……28
Fig.10　45ａ・ｂトレンチ各遺構(2) ……29
Fig.11　45ａ・ｂトレンチ各遺構(3) ……30
Fig.12　46トレンチ各遺構(1) ……31
Fig.13　46トレンチ各遺構(2) ……32
Fig.14　46トレンチ各遺構(3) ……33
Fig.15　46トレンチ各遺構(4) ……34
Fig.16　46トレンチ各遺構(5) ……35
Fig.17　46トレンチ各遺構(6) ……36
Fig.18　47トレンチ各遺構 ……37
Fig.19　48トレンチ各遺構(1) ……38
Fig.20　48トレンチ各遺構(2) ……39
Fig.21　48トレンチ各遺構(3) ……40
Fig.22　48トレンチ各遺構(4) ……41
Fig.23　49トレンチ各遺構 ……42
Fig.24　遺物実測図（45ａ・ｂトレンチ、46トレンチ①）……43
Fig.25　遺物実測図（46トレンチ②）……44
Fig.26　遺物実測図（46トレンチ③）……45
Fig.27　遺物実測図（46トレンチ④）……46
Fig.28　遺物実測図（46トレンチ⑤、47トレンチ）……47
Fig.29　遺物実測図（48トレンチ、49トレンチ①）……48
Fig.30　遺物実測図（49トレンチ②）……49
Fig.31　元総社小学校校庭（48トレンチ）
　４号掘立柱建物跡の模式図 ……61
Fig.32　元総社小学校校庭（48トレンチ）
　５号掘立柱建物跡の模式図 ……61
Fig.33　元総社小学校校庭の遺構検出状態 ……63
Fig.34　各建物跡・溝跡の変遷想定図（模式図）……63
Fig.35　国庁推定地Ｃ案付近の区画溝 ……64
Fig.36　推定東山道駅路国府ルートの推定ラインと
　道路遺構検出遺跡（地点）……66

表　目　次

Tab.1　各調査トレンチの面積と調査目的…… 7
Tab.2　調査経過図…… 8
Tab.3　井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表……50
Tab.4　遺物観察表……56
Tab.5　各遺跡（地点）における
　推定東山道駅路国府ルート……66

図版目次

【巻頭図版】
1　元総社小学校校庭（48トレンチ）より榛名山を望む（南東から）
2　48トレンチ全景（南から）
3　４号掘立柱建物跡（手前側の模造柱）と１号掘立柱建物跡（奥の模造柱）（東から）
4　45ａトレンチ１号道路遺構全景（北東から）
5　１号道路遺構南側溝の土層堆積
6　45ｂトレンチ２号道路遺構南側溝（南東から）

【遺構写真】
PL.1－1　45ｂトレンチ全景（南から）
　2　45ａトレンチ遺構検出状態（南から）
　3　45ａトレンチ２号溝跡全景（東から）
　4　45ａトレンチ３号溝跡全景（南から）
　5　45ａトレンチ１号・４号溝跡全景（東から）
PL.2－1　45ａトレンチ５号溝跡全景（東から）
　2　45ａトレンチ６・７号溝跡全景（南西から）
　3　45ａトレンチ８号溝跡全景（東から）
　4　46トレンチ全景（西から）
　5　46トレンチ１号住居跡全景（南東から）
　6　46トレンチ２号・３号住居跡全景（西から）
PL.3－1　46トレンチ５号住居跡全景（南から）
　2　46トレンチ６号住居跡全景（西から）
　3　46トレンチ７号住居跡全景（西から）
　4　46トレンチ８号住居跡全景（南から）
　5　46トレンチ９号住居跡全景（西から）
　6　46トレンチ10号・11号住居跡全景（南から）
　7　46トレンチ12号住居跡全景（南から）
　8　46トレンチ13号住居跡全景（西から）
PL.4－1　46トレンチ14号・15号住居跡全景（西から）
　2　46トレンチ16号住居跡全景（西から）
　3　46トレンチ17号住居跡全景（西から）
　4　46トレンチ18号住居跡全景（東から）

5　46トレンチ19号住居跡全景（東から）
6　46トレンチ20号住居跡全景（南西から）
7　46トレンチ21号住居跡全景（東から）
8　46トレンチ23号住居跡全景（南から）
PL.5－1　46トレンチ１号溝跡全景（東から）
2　46トレンチ２号溝跡全景（溝から）
3　46トレンチ１号ピット列全景（東から）
4　46トレンチ２号土坑全景（南から）
5　46トレンチ４号土坑全景（東から）
6　46トレンチ灰釉陶器出土状態（南から）
PL.6－1　47トレンチ全景（南から）
2　47トレンチ２号溝跡硬化面検出状態（西から）
3　47トレンチ１号井戸跡全景（北から）
4　48トレンチ２号住居跡全景（南から）
5　48トレンチ３号・４号住居跡、１号溝跡全景（南から）
6　48トレンチ２号溝跡全景（南から）
PL.7－1　48トレンチ２号掘立柱建物跡検出状態（西から）
2　48トレンチ２号掘立柱建物跡Ｐ$_2$検出状態（西から）
3　48トレンチ２号掘立柱建物跡Ｐ$_1$検出状態（西から）
4　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_4$検出状態（北から）
5　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_6$検出状態（北から）
6　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_7$検出状態（北から）
7　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_9$検出状態（東から）
8　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_{10}$検出状態（南から）
PL.8－1　48トレンチ５号掘立柱建物跡全景（南から）
2　49トレンチ全景（南東から）
3　49トレンチ遺構掘り下げ状況（西から）
4　49トレンチ２号竪穴状遺構全景（南から）
5　調査風景（49トレンチ）

【遺物写真】

PL.9　45ａ・46トレンチの出土遺物
PL.10　46トレンチの出土遺物
PL.11　48・49トレンチの出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

⑴　調査のあらまし

前橋市の元総社・総社地区は総社古墳群、山王廃寺、国分僧寺・尼寺などの古代の遺跡が多く存在し、上野国の中心地として栄えた地域である。上野国府についても、これまでの研究から元総社町付近に設置されたと考えられている。こうした歴史的な環境をふまえて、前橋市教育委員会では元総社・総社地区の歴史遺産を有機的に関連付けた保存・活用を目指し、平成18年度から22年度までの５年間山王廃寺の範囲内容確認調査を実施し、伽藍配置の解明等の成果を収めることができた。その一方で元総社町では元総社蒼海土地区画整理事業の進行にともない発掘調査を継続してきたが、存在が推定される上野国府に関連する遺構の確認は至っていなかった。区画整理事業が進行する中で上野国府の実態について早急な解明が急務となったことから、平成23年度から５ヵ年計画で上野国府等範囲内容確認調査が実施されるに至った。この平成27年度までの５ヵ年の発掘調査で、元総社小校庭遺跡の１号掘立柱建物跡の再検出のほか、枠形の掘込地業をもつ建物跡や、国府域の区画溝と考えられてきた古代の大溝のさらなる検出など、相応の成果を得ることはできたが目標である国庁の検出には至らなかった。そうしたことから、翌平成28年度から第２期５ヵ年計画を策定し、引き続いて上野国府の解明に向けて調査を継続することとなった。平成28年度調査は第２期５ヵ年計画の１年次調査となる。

⑵　これまでの調査結果

平成23年度から27年度までの第１期５ヵ年の調査成果の概要については、平成27年度調査報告書にまとめたとおりである。簡単ではあるが、ここでも以下のとおりにまとめておく。

過去５年間の発掘調査で実施したものは大きく分けると①国庁推定地Ａ案における確認調査、②国庁推定地Ｃ案における確認調査、③総社神社、元総社小学校およびその周辺における確認調査の３つにまとめられる国庁もしくは国府関連遺構の存在が期待される地点における調査と、④区画溝の確認調査、⑤東山道駅路国府ルートの確認調査の２つにまとめられる国府域もしくは国衙域を推定する上での重要な要素となり得る遺構の確認調査を実施した。

結果としては、①国庁推定地Ａ案において国府関連遺構は確認できず、②国庁推定地Ｃ案付近では、元総社蒼海遺跡群の調査結果も含めて、掘込地業建物跡、掘立柱建物跡、区画溝が検出され、何かしらの官衙関連遺構が検出された。ただし、その性格については確証的な遺構や遺物がないので、未だ断定できない状況にある。③については、元総社小校庭遺跡の１号掘立柱建物跡を再検出できたほか、元総社小学校校庭で古代の区画溝２条、掘立柱建物跡１棟のほか、単独ではあるが新たに何らかの柱穴を検出することができた。元総社小学校の西側では、大溝（区画溝）１条、少なくとも１棟の掘立柱建物跡が検出され、その北側一帯の国庁推定地Ｃ案の官衙関連遺構とともに、上野国府の構造を考える上で重要な成果を得ることができた。その他に、国庁推定地Ｃ案付近から元総社小学校にかけての範囲で、白色で坏部の底部に孔が穿かれている土師質の高坏形土器の出土例が確認できたことも特筆されるであろう。

④区画溝の確認調査については、１年目の平成23年度調査から点々と区画溝が検出されており、平成25年度には閑泉樋遺跡などの区画溝も含めて、東西約650m、南北約850mの長方形に国府域（国衙域）を区画する溝の存在を想定したが、現状としてはそのような連続性をもって区画溝は検出されていない。むしろ、予想外な地点で検出される事例も見受けられ、現状では総括的な解釈は難しい。⑤東山道駅路国府ルートの確認調査についても、平成25年度にその名残の伝承をもつ道路の付近で調査したが、道路遺構の検出には至っていない。

⑶　平成28年度調査

本年度は、昨年度までの調査結果を踏まえながら、下記の３つの視点に基づき範囲内容確認調査を実施し、上野国府の解明に資することとした。

①国庁推定地Ｃ案周辺における区画溝の範囲確認（47トレンチ）

国庁推定地Ｃ案周辺の調査については、上野国府等範囲内容確認調査のほかに区画整理事業に係る元総社蒼海遺跡群の発掘調査により、掘込地業建物２ないし３棟、掘立柱建物３棟、区画溝３条が検出されている。これらのうち区画溝１条を除くすべての遺構が北から西へ13度から19度の傾きを持つ。このことから、これらの建物や区画溝については時期的な同時性が考えられるため、そうした場合、官衙的性格を持つ施設の範囲を確定しておく必要があることから、区画溝の延伸が予想される地点において、その検出と精査を試みるために調査を実施した。

②元総社小学校校庭およびその周辺について（48、49トレンチ）

平成27年度調査では、昭和37年に群馬大学の調査で検出された１号掘立柱建物跡を再検出することができた。しかしながら、１号掘立柱建物跡の東の棟持柱とされた柱穴の東に新たに柱穴が検出された。棟持柱とされた柱穴と新たに検出された柱穴の柱間が2.7mで約９尺であることやほぼ真東に位置していることなどから、検出時点では性格不明であったが、１号掘立柱建物から連続する構造物（塀もしくは建物等）の柱穴である可能性が出てきた。この調査結果を踏まえて、元総社小学校校庭の１号掘立柱建物跡の東側において塀や建物跡などの構造物の痕跡の有無の確認し、をする必要が生じた。

また、総社神社や元総社小学校の西の「本村（ほんそん）」と通称される地域では、平成26年度調査では東西方向の区画溝、27年度調査では正方位を意識して建てられた掘立柱建物跡が検出された。本村地域は古くから家屋が密集し、調査可能な地点の選定が困難ではあるが、この付近における国府関連施設の有無を確認する調査も重要であることから、本年度も引き続き調査を実施した。

③推定東山道駅路国府ルートについて（45ａ・45ｂ、46トレンチ）

東山道駅路国府ルートについては、これまでの地割などの歴史地理学的見地や発掘調査成果などから、高崎市菊池町付近から前橋市内の利根川に架かる群馬大橋付近まで、そのルートは想定されている。元総社町付近においても、芦田堰に沿った道路が以前から東山道駅路の名残と考えられていることから、平成25年度に道路に沿った２トレンチ３地点において道路遺構の有無を確認したが、その検出には至らなかった。

東山道駅路国府ルートの推定ルートに関しては、鳥羽町にその名残と推定される地割が存在しており、その地割沿いに現況で発掘可能な地点が存在することから、その地点で道路遺構の有無を確認する調査を実施した。なお、発掘調査した地点は関越自動車道の西側の側道に面しているが、東に隣接する本線部分は鳥羽遺跡Ａ区に当たり、発掘調査で道路遺構が検出されている。

また、平成25年度に調査した26トレンチで北から東へ66度傾く古代末頃と推定される道路跡が検出されている（26トレンチ２号道路状遺構）。この道路跡は側溝を持たず幅も約２ｍ（推定）で特筆するほど大きな道路ではないが、道路面が非常に硬く締まっており、走行についても東山道駅路国府ルートに沿った元総社町弥勒方面から掘立柱建物跡が検出されている元総社小学校方面へ続いていることが想定されることから、その重要性を鑑み、26トレンチからの延伸が予想される地点において再度の検出と精査を試みて調査を実施した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地の利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という４つの地域に分けられる。

Fig. 1　推定上野国府位置図

上野国府推定地のある元総社地区の立地する前橋台地は、約24,000年前の浅間山噴火によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。台地の東部は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高３ｍ～５ｍを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑畑を主とした畑地として利用されてきた。

元総社地区は、前橋市街地から利根川を隔てた対岸に位置している。地区内には上野国総社神社が鎮座するほか、主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に、市道大友・石倉線が南北にそれぞれ走り、これらの幹線道路を中心にオフィスビルや大規模小売店が進出している。上野国府推定地はこれらの幹線道路から奥に入ったところに位置し、周囲には田畑も多くかつての養蚕農家が往年のたたずまいを残す静かで落ち着いた環境であったが、近年の区画整理事業の進捗にともない急速な住宅地化が進む地域である。

２　歴史的環境

本遺跡地周辺には、総社古墳群、山王廃寺、上野国分僧寺・尼寺のほか蒼海城跡など多くの遺跡が存在し、歴史的環境に優れている。また継続して実施されている埋蔵文化財発掘調査によって新しい知見が集積されている。

縄文時代　縄文時代の遺跡としては、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡や元総社蒼海遺跡群で前期・中期の集落跡が検出されているほか、元総社蒼海遺跡群（9）で晩期の住居が検出されている。

弥生時代　弥生時代の遺跡は、水田・集落跡等が検出された日高遺跡のほか、新保遺跡や新保田中村前遺跡など、染谷川沿いで拠点的な集落が営まれるが、現在前橋市域となっている範囲では、後期住居跡が検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域や桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけで少ない。

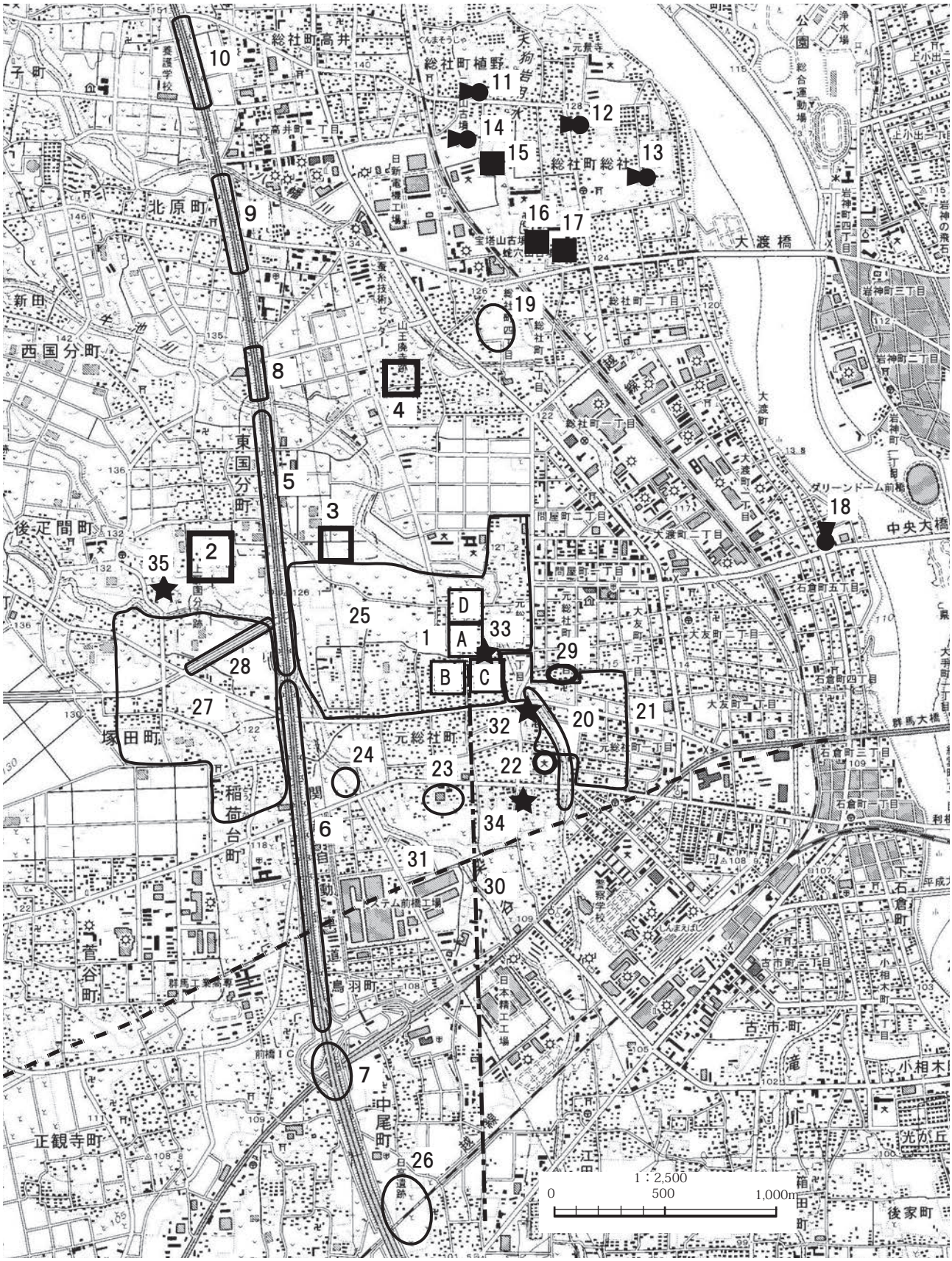
古墳時代から奈良・平安時代　古墳時代の集落については４世紀代と６世紀代を中心に展開しており、大屋敷遺跡や元総社蒼海遺跡群で集落が確認されている。元総社蒼海遺跡群では、牛池川沿いの低地で古墳時代の水田も確認されているほか、墓域や祭祀跡も確認されており、同時代の集落・生産域・墓域がそれぞれ展開していたことがうかがえる。

これらの集落を支配した豪族のものと考えられる古墳として、総社古墳群が挙げられる。総社古墳群を構成する主な古墳としては、推定される築造年代の古い順から、大型の前方後円墳である遠見山古墳、川原石を用いた積石塚で、上野国地域でも導入期の横穴式石室をもつ王山古墳、前方部と後円部にそれぞれ横穴式石室が築造されている前方後円墳の総社二子山古墳、横穴式石室と家形石棺をもつ方墳の愛宕山古墳、上野国地域における古墳の終末期に位置づけられている方墳の宝塔山古墳と蛇穴山古墳が存在する。

また、宝塔山古墳の南西約500mには山王廃寺が存在する。山王廃寺については、平成18年度からの５ヵ年計画で実施した範囲内容確認調査の結果、約80m四方を回廊で囲み、講堂・金堂・塔が法起寺様式の伽藍配置であることが判明した。山王廃寺の特徴である石製の塔心礎や石製鴟尾、根巻石等は、宝塔山古墳の石棺や、蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術を駆使して加工されており、このことから、この寺院を建立した氏族と宝塔山古墳・蛇穴山古墳の被葬者は同一の氏族と考えられている。

また、山王廃寺の下層には北西に主軸をもつ基壇建物や掘立柱建物跡が検出されているが、これらの建物群についての評価は「車評家」等諸説あるが、寺院の変遷を考える上で重要なものとなっている。

奈良・平安時代になると、上野国分僧寺、上野国分尼寺が建立されるなど、本地域は古代の政治・経済・文化の中心地としての様相を呈する。大正15年に国指定史跡となった上野国分僧寺は昭和55年から本格的な調査を実



1．上野国府国庁推定地　2．上野国分僧寺　3．上野国分尼寺　4．山王廃寺　5．上野国分僧寺・尼寺中間　6．鳥羽遺跡　7．中尾遺跡
8．国分境遺跡　9．北原遺跡　10．下東西遺跡　11．稲荷山古墳　12，大小道山古墳　13．遠見山古墳　14．総社二子山古墳　15．愛宕山古墳
16．宝塔山古墳　17．北原遺跡　18．王山古墳　19大屋敷遺跡　20．元総社寺田遺跡　21．元総社明神遺跡　22．元総社小学校校庭
23．天神Ⅱ遺跡　24．弥勒Ⅱ遺跡、25元総社蒼海遺跡群　26．日高遺跡　27．国府南部遺跡群　28．元総社西川・塚田中原遺跡
29．上野国府調査地点(昭和42年)　30．通称「日高道」　31．推定東山道駅路国府ルート　32．総社神社　33．宮鍋神社　34．釈迦尊寺　35．妙見寺

Fig. 2　周辺遺跡

施し、主要伽藍の礎石、築垣、塀等が確認された。また上野国分尼寺は、昭和44・45年の調査で伽藍配置が推定できるようになり、さらに平成12年に実施された寺域確認調査によって東南隅と南西隅の築垣とそれに平行する溝跡や道路状遺構が確認された。上野国分僧寺、上野国分尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴い発掘調査、上野国分僧寺、尼寺中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘立柱建物群が検出されている。

なお、元総社地域には総社神社が鎮座するほか、上野国府が存在したことが推定されているが、掘立柱建物跡が元総社蒼海遺跡群、元総社小校庭遺跡で確認されている。これらの建物の性格については不明であるが、元総社町周辺で掘立柱建物が確認された事例が現在少ないことから、特筆される遺構である。また、国府推定域でも西に位置する鳥羽遺跡では、神社遺構とされる周囲に方形の溝をもつ掘立柱建物が存在するほか、大規模な工房跡も確認されている。また、牛池川沿いの元総社明神遺跡Ⅷと元総社寺田遺跡Ⅲでは、それぞれ人形が出土しているほか、元総社寺田遺跡Ⅲでは「国厨」や「曹司」などの国府関連施設名が墨書された須恵器が出土している。その他に国府域の区画溝と考えられているものとして大溝がある。この遺構は閑泉樋遺跡・元総社明神遺跡・元総社蒼海遺跡群等で確認されており、上野国府等範囲内容確認調査の平成23年度調査（１次）でも確認されている。これらの大溝は覆土上部に浅間Ｂ軽石を包含するという時期的な特徴をもち、規模も同様であることや、確認された地点が連続すること地点もあることから、一連のものと考えられる大溝も存在する。その他に国府域を推定する上では、天神遺跡・弥勒遺跡・元総社蒼海遺跡群の西寄りの調査地点どの染谷川周辺では緑釉陶器が多数出土するほか、銅椀等の遺物が出土する傾向が強いことが指摘されており、こうした点から国府に関連した何らかの施設の存在がうかがえる。また元総社町周辺では至るところで奈良・平安時代の集落が検出されているが、これら集落から「大館」の墨書土器など特殊な遺物も少なからず出土している。

高崎市内の調査等により、元総社町の南部にN―64°―E方向の東山道駅路国府ルートが存在したことが推定されている。その他に存在が推定される通称「日高道」は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を北方へ延長したもので、これらは当時の交通網を物語る重要な遺構である。

中世以後　中世、元総社には蒼海城が築城され、総社長尾氏の居城となっていた。また総社を中心としたこの付近一帯は奈良・平安時代から引き続いて上野国の府中として栄える。蒼海城の築城年代については、伝承では鎌倉時代に千葉上総介常胤により築かれたとされているが詳しいことは分かっていない。ただし、何らかの城郭的なものは存在していたと考えられており、室町時代の永享元年（1429）に長尾景行が城の修築を行っている。蒼海城の特徴は、館のような方形の曲輪が碁盤の目のように配置されている点である、これらの曲輪は「○○屋敷」という名称で呼ばれている。なお、蒼海城は、江戸時代に秋元氏が現在の総社の地に総社城を築城して城下町等を移転させたことにより、完全に廃城となったと考えられる。蒼海城は、元総社町蒼海地区の区画整理事業に伴う発掘調査で、堀跡や掘立柱建物跡・井戸が検出されているほか、青白磁梅瓶や青磁・白磁片、穀物臼や茶臼などの石製品などが出土している。

その他に、上野国分僧寺、尼寺中間地域では寺院跡や土壙墓が検出されている。元総社蒼海遺跡群（5）でも土壙墓がまとまって検出されており、蒼海城の周囲に寺院や墓地が営まれていたと推定される。

Ⅲ　調査方法と経過

1　調査方法

上野国府等範囲内容確認調査は、その調査にあたり国庁の推定地として４案を提示した。

平成23年度はそのうちのＡ案の範囲内、平成24年度はＣ案の範囲内および総社神社西方付近において確認調査を行った。平成25年度は、国庁推定地４案の範囲外である総社神社・元総社小学校における国府関連施設の確認調査のほか、国府域を推定する上での参考とするため、区画溝と東山道駅路国府ルートの確認をそれぞれ行った。平成26年度は、平成25年度の調査結果を踏まえて国庁推定地Ｃ案周辺・元総社小学校およびその周辺における国府関連施設の確認調査や、区画溝の範囲確認調査を実施した。この年度の調査で国庁推定地Ｃ案付近において掘込地業建物が少なくとも２棟検出された。こうした成果から、平成27年度も引き続き、国庁推定地Ｃ案周辺・元総社小学校およびその周辺で範囲確認調査を行った。特に元総社小学校では、その校庭でかつて発掘調査された「元総社小校庭遺跡」の１号掘立柱建物跡が存在することや、平成28年度は国庁推定地Ｃ案付近での区画溝の範囲確認や、元総社小学校校庭および総社神社の西側における国府関連施設の確認調査のほか、鳥羽町内において推定東山道駅路国府ルートの確認調査も実施し、その総調査面積は422㎡に達した（Tab.１）。

Tab.１　各調査トレンチの面積と調査目的

トレンチ	調査面積（㎡）	主な調査目的
45a	64	推定東山道駅路国府ルートの調査
45b	17	推定東山道駅路国府ルートの調査
46	86	推定東山道駅路国府ルートの調査
47	24	区画溝の範囲確認
48	176	国府関連施設の調査（元小）
49	55	国府関連施設の調査（元小付近）
計	422	

調査は「上野国府等範囲内容確認調査基準」に基づいて行った。以下に調査方法について要点を記す。

グリッド設定（Fig.３）　調査区のグリッド設定は以下のとおりである。①単位は４ｍ四方とする。②国家座標第Ⅸ系（日本測地系）を用い、Ｘ＝＋44000、Ｙ＝－77200を基点（Ｘ０、Ｙ０）とする。③西から東へ４ｍごとにＸの数値が増大し（Ｘ157、Ｘ158、Ｘ159……）、北から南へ４ｍごとにＹの数値が増大する（Ｙ44、Ｙ45、Ｙ46……）。④各グリッドの呼称基点は北西杭とする。

なお、このグリッド設定は、区画整理に伴い継続的に調査が行われている元総社蒼海遺跡群のグリッド設定と共通するものである。

トレンチ設定　各トレンチの設定幅については、これまで掘立柱建物の柱穴間隔を考慮して原則３ｍとしていたが、平成24年度の調査から４ｍ幅へと拡大した。トレンチ名は、原則として調査順に数字で呼称することとし、23年度からの通し番号とした。

遺構の確認　遺構確認については、基本層序Ⅰ層およびⅡ層直下で行い、その後、上野国府の遺構面が存在するⅢ層（Hr－FP・As-C混土層）を細分しながら確認することとした。遺構の確認にあたって、必要な場合はサブトレンチを設定することにし、サブトレンチの規模は遺構保護のため必要最小限とした。

測量　遺構平面図については縮尺１/20を原則とし、必要に応じて１/10～１/50の縮尺を適宜使用することとした。また、土層図についても縮尺１/20とし、遺構毎の図面とは別に、グリッド杭のあるトレンチ壁面ですべて作成することに

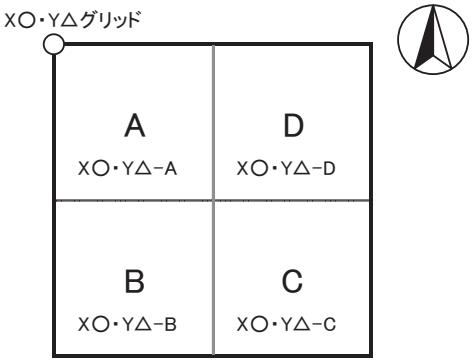


Fig.３　２ｍ小グリッドの呼称

した。

出土遺物の取り上げ　遺構毎を原則とし、遺構に属さない遺物は４ｍグリッド単位で記録を作成し取り上げることとした。なお、状況に応じて４ｍグリッドをFig.３のように４分割し、２ｍの小グリッド一括で取り上げた遺物もある。小グリッドの呼称は、北西から反時計回りでＡ～Ｄとした。なお現位置を保つ礎石等、施設を構成する遺物については、原則として現状保存することとした。

写真撮影　遺構の写真撮影については、35㎜フィルム（モノクロ、カラーリバーサル）およびデジタルデータを常時使用した。また、必要に応じて６×９サイズフィルムを使用した。空中写真撮影にはデジタルカメラを使用した。

埋め戻し　調査終了後は、今後の調査と区別できるように石灰を散布してから埋め戻しをおこなった。また、掘立柱建物跡や掘込地業をもつ建物跡については、ゴンベ砂を撒いて遺構を保存した上で埋め戻しを行った。

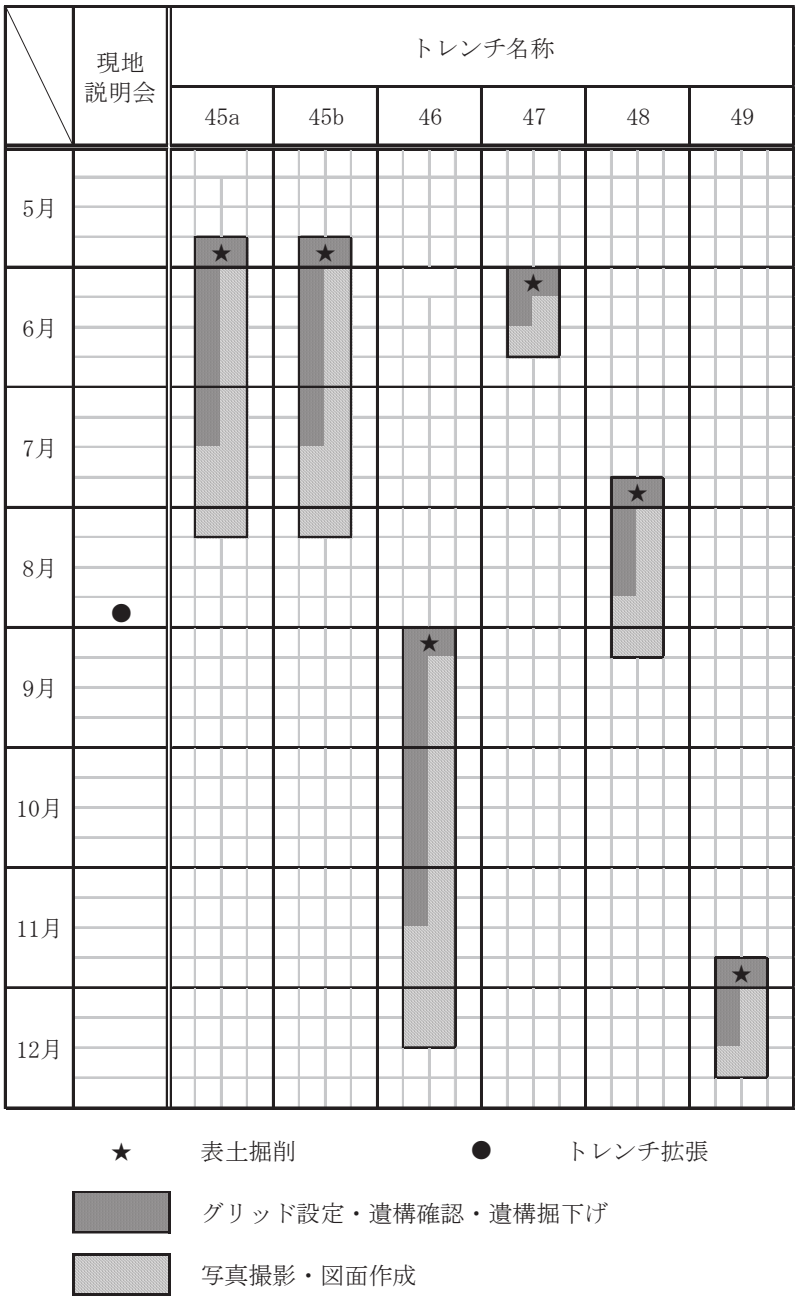
２　調査経過

平成28年度の発掘調査は５月27日から開始し、12月20日に終了した。調査経過は、以下のとおりである。

最初に着手したのは45ａトレンチで、５月26日にトレンチの設定を行い、27日に掘削した。遺構確認の結果、古代の道路遺構と、その側溝の可能性のある溝跡が平行して検出されたことから、同じ借用地内のうち、少し離れた地点で任意でトレンチを掘削した（45ｂトレンチ）。45ｂトレンチにおいても、45ａトレンチで検出したものと同一と考えられる道路遺構と溝を検出することができた。なお、そうした経緯から、45ａトレンチは国家座標上の正方位で設定されているが、45ｂトレンチは、国家座標を基にして設定されたものではない。

掘削後、先行して中世以後の遺構の掘り下げを行ったが、中世の遺構の掘り下げが完了する頃に47トレンチの調査を開始する必要が生じたことから、45ａ・45ｂトレンチの調査をトレンチの維持管理

Tab. 2　調査経過図



を行いながら中断し、47トレンチの設定・掘削を実施する運びとなった。

47トレンチの調査は、45ａ・45ｂトレンチの調査開始直後の６月１日に掘削を行なった。47トレンチは調査面積も比較狭かったことと、検出遺構の数も比較的少なかったことから発掘調査も短期間で終了し、６月10日には調査をほぼ終了することができた。しかしながら、梅雨の影響を受けて、47トレンチの埋め戻しは若干遅れた14日に実施した。

その後、45ａ・45ｂトレンチに戻り調査を引き続き行ったが、梅雨の影響が著しく、また、元総社地区周辺でも水田耕作が開始となったために、トレンチ内で大量の湧水が発生する事態が起きた。その状況は一晩で排水用のサブトレンチが水没する有様で、雨天が続いたり激しい雷雨が発生すると調査トレンチ自体が水没して水があふれ出すような状況であった。そのようなことで、トレンチ内の湧水が発掘作業の進捗に支障をきたすまでになりつつあったが、７月下旬には元総社小学校が夏休みになるのとあわせて校庭の発掘調査を開始しなくてはならないので、その日程に間に合わせるように作業を進めた。最終的には、45ａ・45ｂトレンチの調査は８月９日に埋め戻しで終了となった。調査に非常に苦労を要したトレンチであった。しかしながら、古代の道路遺構の検出という、ある意味、逆に、想定を超える調査成果を挙げることができたことは幸運であった。なお、埋め戻しにあたってはゴンベ砂を道路遺構の面や溝に充填して遺構面の保護と、調査区域の明示を行ってから埋め戻し、土壌が落ちついた頃合を見計らって現況復旧を行った。

話は７月に遡ってしまうが、元総社小学校が夏休みを迎えた直後の７月21日に、平成28年度も校庭の発掘調査（48トレンチ）を実施した。掘削と同時に遺構確認を実施したところ、平成27年度調査で新たに検出された柱穴からさらに東へ等間隔に柱穴の可能性のある遺構が連続していることが確認できた。また、トレンチ内では深く砂が充填された状態の深い掘り込みが確認できた場所が幾つか存在した。平成27年度調査の経験や、群馬県史等の資料から、これらは群馬大学による調査の跡（テストピットか？）であることが判明した。元総社小学校校庭（48トレンチ）の調査についても、第５章に記載のとおり、かつて群馬大学が調査した２号掘立柱建物跡の一部が確認できたほか、掘立柱建物跡を新たに２棟検出することができた。特に、４号掘立柱建物は１号掘立柱建物と相似形という意味では、その存在感が非常に大きいものであった。そうした成果を地域の方々をはじめとして市民に公開するために、８月27日に現地説明会を実施した。

48トレンチの発掘調査は、元総社小学校の２学期開始と同時に終了しなければならないが、２学期の開始日である８月29日に元総社小学校の５年生と６年生を対象とした見学会を開催した。残暑の厳しい折ではあったが、自分の学校の校庭に姿を現した古代の遺跡に児童たちは興味津々の様子であった。なお、埋め戻しに際しては、遺構面の保護と、調査した範囲の明示のためにゴンベ砂を充填してから埋め戻しを行った。

平成25年度から元総社小学校の校庭で発掘調査を実施しているが、８月下旬頃から秋雨が降り始め、埋め戻しが思うようにいかないのが例年の状況である。特に、調査が終了した１ヶ月後には、校庭で運動会を実施することから、埋め戻し後の整地作業も入念に行わなければならない。平成28年度も例年どおり埋め戻しには苦労した。それ以上に、掘削時に山にしておいた表土が予想以上に水分を含み、埋め戻しは可能であるものの、土が非常にやわらかく、整地作業に手間取ることとなった。例年のこととは言いながらも、元総社小学校には大変な迷惑をかけている反面、それでも協力を惜しまない対応には頭が上がらない次第である。

元総社小学校校庭（48トレンチ）のゴンベ砂充填を９月２日に行い、埋め戻しを４日に実施したあとに細かな整地作業を行いながら、46トレンチの掘削作業を９月５日に実施した。46トレンチは第５章でも述べるとおり、プランが明瞭に確認できないほど、時期の近接した住居跡や土坑などの遺構が重複した状態であった。そうしたこともあり、遺構の検出やその判断についても検討を要する事が多かった。そこへ秋雨の影響や、46トレンチが地質的にも土壌の粘質の強い地域であることもあり、これまで実施してきた上野国府等範囲内容確認調査で最長の調査期間を費やすこととなった。最終的に、発掘調査が終了して埋め戻したのは12月13日となってしまった。

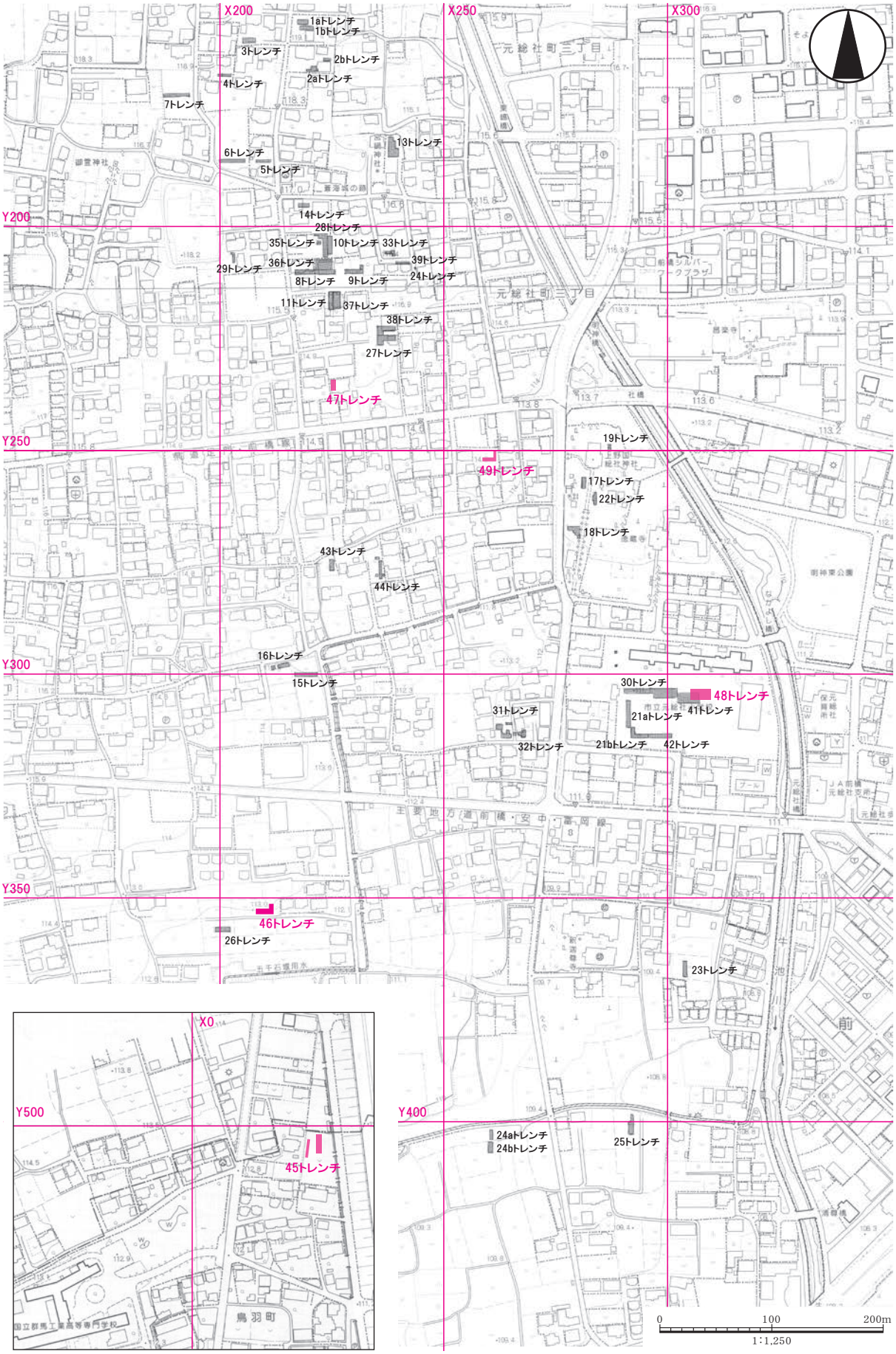


Fig. 4　グリット設定図と平成28年度調査区

46トレンチは元々東山道駅路国府ルートの確認調査に関連して、平成25年度に検出した元総社小学校方面へ進む古代末の道路遺構の再検出を目的として実施した。当初設定したトレンチ内で道路遺構が確認できなかったことから、トレンチの西端および東端南側を拡張したが、道路遺構を検出することはできなかった。なお、このトレンチの調査で印象的な出来事としては、調査期間中である11月24日に、晩秋ながら降雪があったことである。鮮やかな紅葉を覆い隠すような初雪は、ここ数年でも非常に早く、また、上野国府等範囲内容確認調査でも調査期間中に降雪となったのは初めてのことであり、とても印象的であった。

49トレンチの発掘調査については、可能な限り年内に発掘調査を終えるために、11月29日に掘削を行った。なお、46トレンチで測量および最終的な確認のための掘り下げを行いながら、同時進行で49トレンチの掘削となった。49トレンチの調査は表土掘削時に現れたおびただしい数の近世以後のピットの確認と掘り下げが中心となった。当初掘削したトレンチの範囲内では国府関連遺構の検出ができなかったことと、トレンチが借用地内の一番南で東西方向に設定されていることから、トレンチ東端から北へ向かって７ｍサブトレンチ状に拡張することにより、古代の区画溝の確認漏れの抑止に努めた。結果的には、トレンチ内で国府関連遺構を検出することはできなかった。ただし、表土の下層が総社砂層となっており、基本層序のⅢ・Ⅳ・Ⅴ層までが削り採られている状況が確認できたことや、現表土の下位には、旧表土と考えられる薄い硬化面が複数層存在したことから、土取りと整地はかなり古くから行われており、47トレンチの状況も踏まえると、元総社町内でも、俗に「本村」と呼ばれる地域は、かなり古くから現況に近い状態にあることが窺えた。また、49トレンチの調査では、竪穴状遺構や井戸の覆土から小片ではあるが、他のトレンチよりも古代の瓦の破片の出土が目立った。このように、49トレンチの発掘調査は、調査地点が限られる「本村」地域の調査であったため、「念には念を入れた」調査となった。なお、埋め戻しは12月20日に実施し、あわせて機材撤収を行い、平成28年度の発掘調査は終了した。

このように、平成28年度調査は45ａ・45ｂトレンチ、46トレンチ、48トレンチと、雨天と湧水に悩まされた調査が続いた。こうした状況での調査は、作業の進捗が遅れるだけでなく、発掘現場の安全管理上、事故にも十分注意していかなければならない。はたまた、民有地を借用して実施するという調査の特性上、借用した土地を返還する際の現況への復旧に手間がかかり、地権者へ迷惑がかかるなど、二次的に引き起こるデメリットも多い。そうした意味でも、平成28年度は、非常に体力的にも精神的にも苦労の多い発掘調査となった。

Ⅳ　基本層序

⑴　鳥羽町付近（45ａ・45ｂトレンチ）

上野国府等範囲内容確認調査における鳥羽町での調査は、45ａ・45ｂトレンチが初めてである。

表土（Ⅰａ層）の下層には浅間Ｂ軽石混入土層（Ⅰｂ層）の堆積も認められた。浅間Ｂ軽石の純層（Ⅱ層）は古代の溝の覆土では認められたが、道路面では認められなかった。道路面は砂質の灰褐色土層の上位に構築され、古代の溝（側溝）も同じ層に掘り込まれていた。この層は砂質な特徴から総社砂層に似ているが、むしろ、榛名山二ッツ岳の噴火により発生したＦＡ泥流層と考えられる。なお、群馬町教育委員会が1986年に発掘調査した推定東山道駅路の菅谷地区の調査地点である11トレンチの調査においても、浅間Ｂ軽石混入土層の下層にＦＡ泥流層と推定される灰黄褐色土層が堆積している状態が確認されている（群馬町教育委員会　1987）。

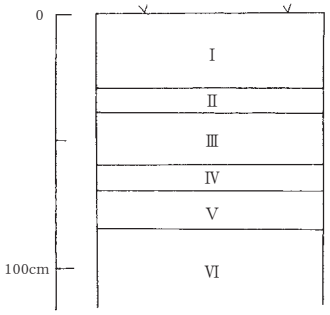
⑵　天神地区（46トレンチ）

天神地区での調査は平成25年度調査の26トレンチ以来であるが、浅間Ｂ軽石の純層（Ⅱ層）は確認できなかったものの、26トレンチの基本層序と同様の土層が確認できた。特筆すべきは、Ⅳ層（浅間Ｃ軽石混入黒褐色土層）とⅤ層（総社砂層への漸移層）は非常に粘性が強い状況であった。

⑶　国庁推定地Ｃ案周辺、元総社小学校校庭（47・48・49トレンチ）

元総社蒼海遺跡群（95）の西に位置する47トレンチは、上位に厚く盛土されたその状態から整地されたことが考えられる。また、盛土の下層に旧表土と考えられる層が存在し、その下層が総社砂層となっていることから、土取りが行われたことが考えられる。一般県道足門・前橋線を挟んだ南の範囲に位置する49トレンチの土層についても近似した状態で、表土の下層は総社砂層となっていた。また、トレンチの東は谷地と推定されるため、東へ行くほど総社砂層のレベルは低くなるが、その分表土は厚くなっていく状況を見ることができた。このことから、49トレンチにおいても土取りと盛土による整地が行われたと考えられる。

48トレンチは、平成27年度に調査した41トレンチの東に位置する。41トレンチでは表土（Ⅰ層・校庭のゴンベ砂及びその下層の旧表土）の下位はⅣ層からⅤ層へと変化する層位が現れ、その面で遺構確認を行った。48トレンチにおいてもほぼ同様の状況であるが、Ⅳ層よりもⅤ層が遺構確認面の大部分を占めているように思われた。この状況は、掘立柱建物跡が集中している校庭中央の北寄りが台地の頂上付近であるというこれまでの調査結果をまとめた見解とも一致する。



Ⅰ層	As-B 軽石が混入する耕作土・表土層。 混入量の多寡により、ａ（新）・ｂ（旧）に分けられる。 Ⅰａ層：灰黄褐色砂質土。現在の表土・耕作土 Ⅰｂ層：灰黄褐色砂質土。旧表土・耕作土。いわゆる As-B 混土層
Ⅱ層　As-B 軽石純層	
Ⅲ層　暗褐色土	As-C、Hr-FP などの軽石粒を５～10％程度含む。 場所により粘性が変化する。（奈良・平安時代の遺物包含層）
Ⅳ層　黒褐色土	As-C を10～30％程度含む。 場所により粘性が変化する。 この層上面で、古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構が確認しやすくなる。
Ⅴ層　総社砂層への漸位層	上部黒色土（ａ）から下へ行くにつれて、黄褐色土（ｂ）へ漸位する。 場所によっては、黒褐色粘質土～褐色粘質土へ漸位する。
Ⅵ層　総社砂層	場所により色調・土質が異なり、黄褐色土でロームに近いところと、明褐色もしくは白色に近い色調を呈する粘質土のところがある。

Fig. 5　上野国府等範囲内容確認調査基本層序模式図

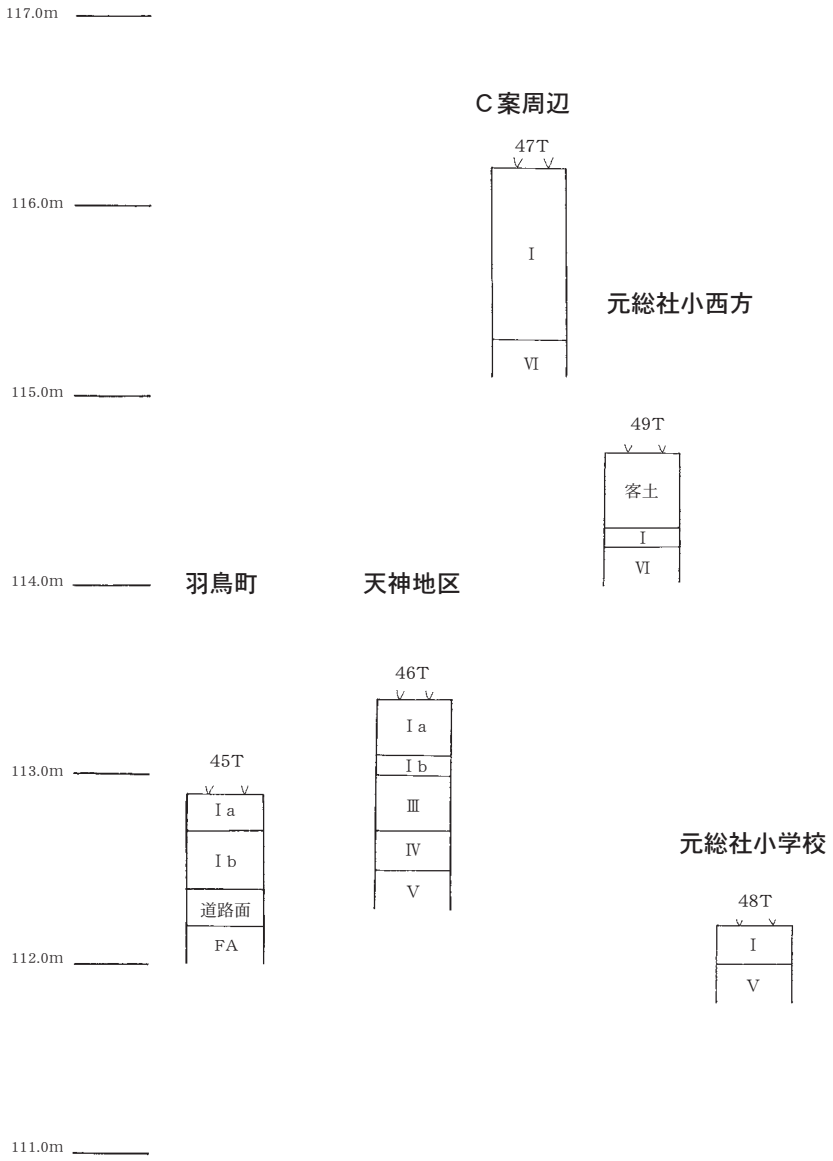


Fig. 6　各トレンチ土層柱状図

Ⅴ　遺構と遺物

１　各トレンチの概要

平成28年度調査にあたり、国府関連施設および区画溝の解明について有益な情報が得られると思われる調査候補地のうち、調査可能な５ヶ所にトレンチを設定した。以下に調査目的別に各トレンチの概要を記す。

各トレンチの調査目的は、第１章で述べたとおり、以下の３点となる

①　国庁推定地Ｃ案周辺における区画溝の範囲確認

②　元総社小学校校庭およびその周辺の国府関連遺構の確認

③　推定東山道駅路国府ルートの確認

以下に調査目的毎に設定トレンチの概要について述べる。

⑴　国庁推定地Ｃ案周辺における区画溝の範囲確認

47トレンチ（Fig．７、PL．６）

47トレンチは、元総社蒼海遺跡群（95）で検出された２号・３号溝跡の西側の延伸を確認するために設定されたトレンチで、規模は長さ８ｍ、幅３ｍの南北方向のトレンチで、調査面積は24㎡ある。トレンチの位置する付近は、第４章の基本層序でも述べたとおり、本来存在していた土層が総社砂層まで削り取られた上に整地のため盛り土されていたため、表土（近現代の撹乱土含む）が厚く堆積していた。

調査の結果、近世以後と推定される溝１条・土坑５基・ピット６基が検出されたほか、元総社蒼海遺跡群（95）で検出された２号・３号溝跡の延伸と考えられる古代の溝跡が２条検出された。その他に古代の井戸跡が１基検出された。これにより、古代の溝は元総社蒼海遺跡群（95）から西へは30m伸びることが確認された。

⑵　元総社小学校周辺における国府関連施設の確認

48トレンチ（Fig．７、PL．６）

48トレンチは元総社小学校校庭の遺構確認を目的として設定されたトレンチである。

平成27年度調査で、元総社小校庭遺跡１号掘立柱建物跡が再検出できたが、その際に、東側の棟持柱とされていた柱穴の東側で、新たに同規模の柱穴が検出されたことは既に述べたが、その柱穴が属する施設の確認を主眼においた１号掘立柱建物跡の東側の確認調査を目的としている。

トレンチの規模は、校庭の施設の関係で若干の変則はあるが長さ16m、幅約11mの東西方向に長いトレンチで、形状はトレンチというよりも調査区に近い。調査面積は176㎡である。

調査の結果、古代の掘立柱建物跡３棟、10世紀代と推定される住居跡４軒、古代の溝跡２条、古代から中世にかけてのピットが21基検出された。なお、ピットの一部はその検出状態や連続性から、建造物の柱穴と考えられるものも存在する。なお、平成27年度調査で新たに検出された柱穴は掘立柱建物の柱穴であることが判明し、１号掘立柱建物の東側の棟持柱も同じ掘立柱建物の柱穴であることも判明した。ちなみに、掘立柱建物３棟のうち、１棟は元総社小校庭遺跡の２号掘立柱建物跡で、残りの２棟は新発見の掘立柱建物跡である。

49トレンチ（Fig．７、PL．８）

49トレンチは総社神社および元総社小学校の西側付近における国府関連遺構の有無を確認するために設定されたトレンチである。

トレンチの規模は長さ12m、幅４ｍの東西方向のトレンチで、東端で北方向に長さ７ｍ、幅１ｍの規模で溝の有無を確認するために拡張を行った。よって調査面積の合計は55㎡である。

トレンチは土取りによって削られており、古代の遺構の検出は困難な状態であった。よって、検出された遺構は中世以後の遺構のみで、中世以後のピット85基、井戸３基、近世以後の竪穴状遺構３基、建物跡１棟、土坑８基が検出された。ただし、古代に関しては、土坑の覆土から古代の瓦の破片が少なからず出土している点が特筆される。

⑶　推定東山道駅路国府ルートの確認

45ａトレンチ、45ｂトレンチ（Fig.７、PL.１）

45ａ、45ｂトレンチは鳥羽町の東山道駅路国府ルートの名残と推定される地割の南側に隣接して設定されている。本来、この地割は直線的であったと考えられるが、近年の宅地化によりノコギリの刃のように入り組んでいる。また、この地割が高崎市との境界となっている。トレンチは45ａトレンチを主体とし、その補足調査のために西へ約10mの地点（同じ地番の畑の中）に45ｂトレンチを設定した。

トレンチの規模は、45ａトレンチは長さ16m、幅４mの南北方向のトレンチで、調査面積は64㎡である。45ｂトレンチは長さ17m、幅１mで、国家座標に準じて設定したものではないため正方位に設定されていないが、ほぼ南北方向となっている。調査面積は17㎡である。

調査の結果、中世の溝（金尾城の堀跡）１条のほかに中世の溝３条、古代の道路面（硬化面）２面・溝５条、土坑３基が検出された。このうち、古代の硬化面と溝は共伴性があり、それぞれ両側溝をともなう道路跡と推定される。

46トレンチ（Fig.８、PL.２）

46トレンチは東山道駅路国府ルートの推定路からは離れた場所に位置している。本トレンチの調査目的は、平成25年度に調査した26トレンチにおいて古代末の道路跡（道路状遺構）が検出されたが、その道路跡の走行が国府ルートの走行に類似している点や、26トレンチの調査で検出された地点からの延伸が元総社小学校付近となることから、道路跡の存在が推定される位置にトレンチを設定したものである。

トレンチの規模は長さ16m、幅４mの東西方向のトレンチであるが、トレンチ東端を４m分北へ突出させたＬ字形を呈している。その他に、トレンチ西端を西へ長さ約２m、幅約１m、同じく東端を南へ長さ約3.5m、幅約１m拡張させている。調査面積は86㎡である。

調査の結果、Ⅲ層に相当する時期の遺構の重複が濃密で遺構の認定が非常に困難であったが、４世紀代の住居跡１軒、８世紀代の住居跡５軒、９世紀代の住居跡５軒、10世紀代の住居跡12軒、古代の溝１条、土坑16基、ピット９基を認定した。その他に中世の溝１条、土坑３基、掘立柱建物の柱穴と認定したピット群１列、その他のピット10基を検出した。なお、調査目的であった古代の道路跡の検出については、明瞭な硬化面を検出できなかった。遺構の重複により破壊されたことも考えられるが、いずれにせよ未検出との結論に至った。

２　各トレンチの検出遺構

各トレンチの検出遺構について、トレンチ番号順に記載する。

45ａ・45ｂトレンチ

⑴　道路遺構

１号道路遺構（Fig.９・10・11、PL.１）

位置　45ａトレンチ：Ｘ27、Ｙ504グリッド。45ｂトレンチ：Ｘ23・24、Ｙ506グリッド。　**主軸方向**　Ｎ―63°―Ｅ。　**形状等**　両側に側溝（４号・５号溝跡）を持ち、その間に硬化面が拡がる。硬化面は道路面全体に

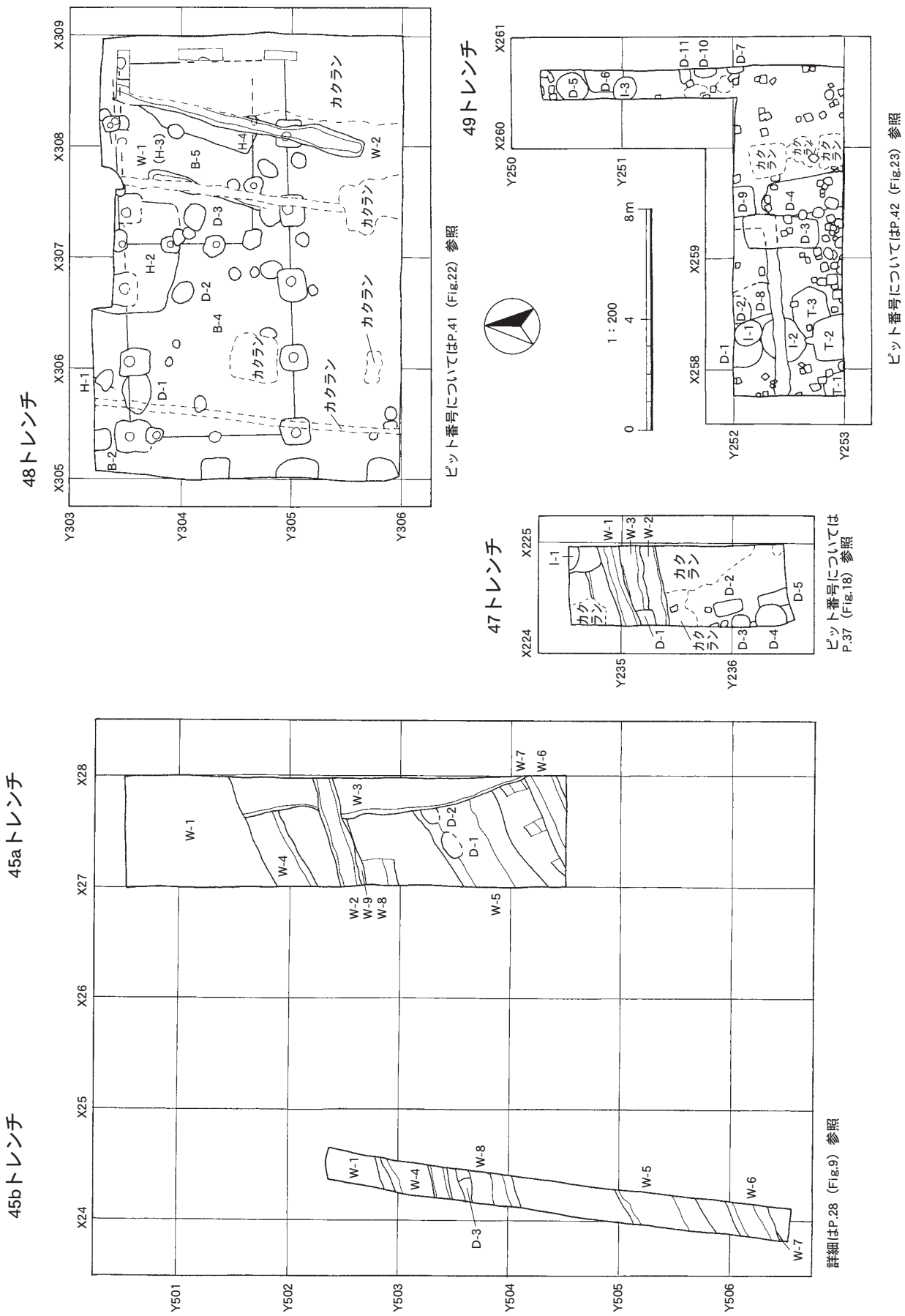
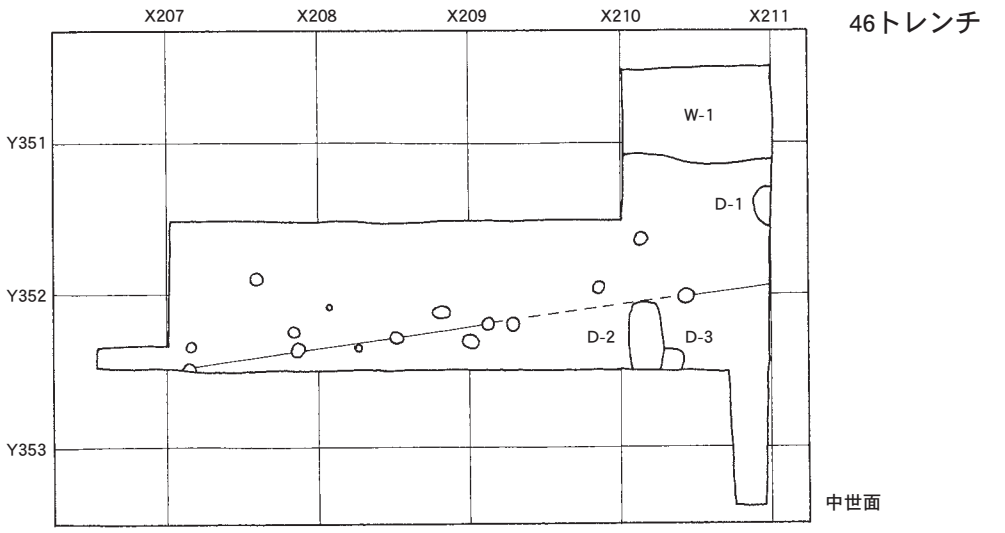
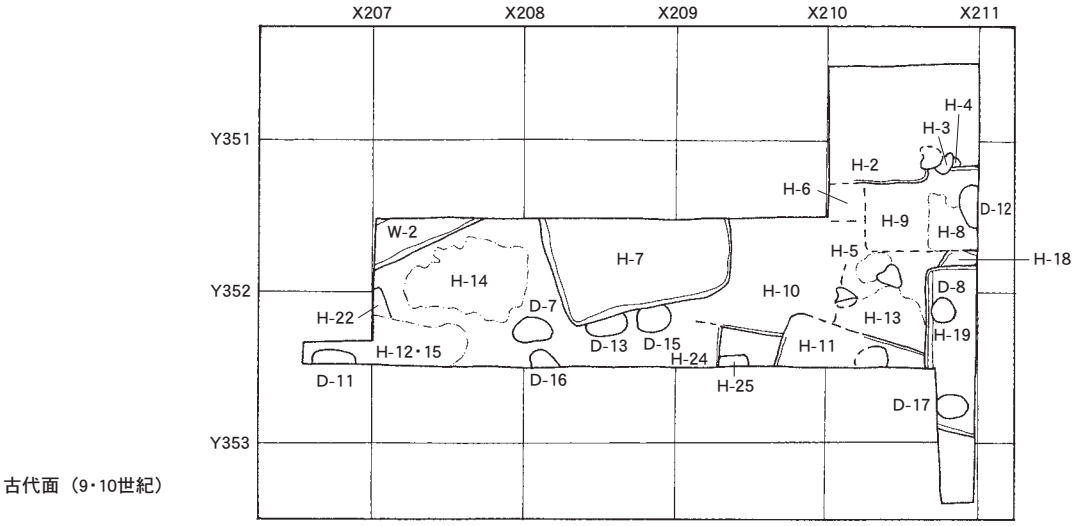


Fig. 7　トレンチ全体図(1)



ピット番号についてはP.36（Fig.17）参照



古代の土坑・ピットの詳細についてはP.31～35（Fig.12～16）を参照

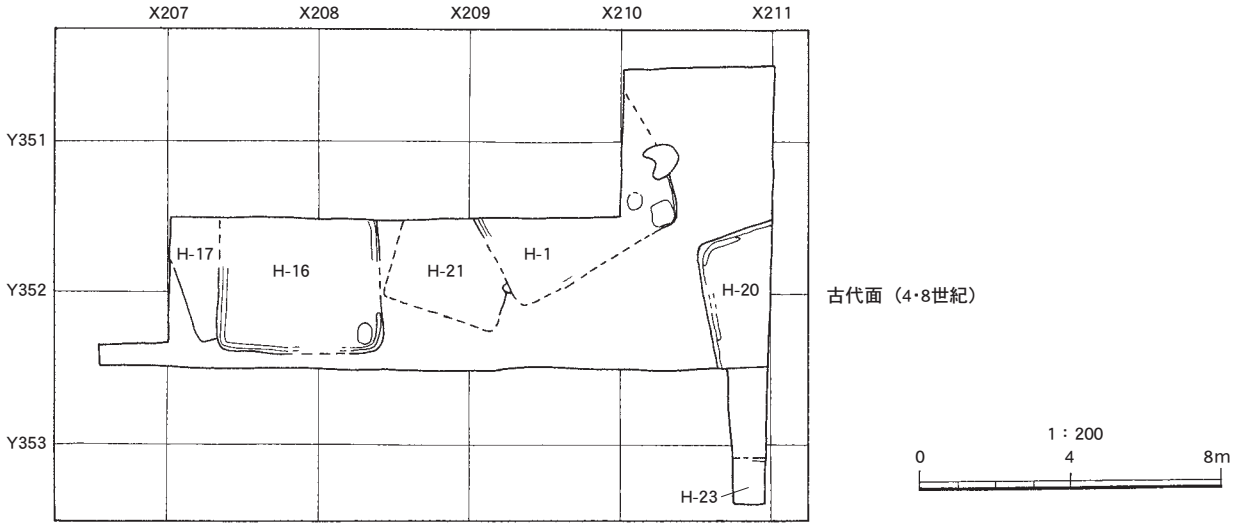


Fig. 8　トレンチ全体図(2)

広がるように分布。硬化状態は強く締まる。道路の主軸方向に平行した方向にサブトレンチを入れ断面を観察したが、波板状凹凸面は確認できなかった。45ｂトレンチ西端から45ａトレンチ東端までの間で長さ28m、道路面の最大幅4.40m。側溝の心々間の最大幅6.70m、側溝外側も含めた最大幅(8.05)ｍ。　**重複関係**　２号道路遺構(道路面)、１号・２号・３号・９号溝跡、１号・２号・３号土坑と重複する。２号道路遺構、３号土坑よりも新しく、１号・２号土坑、１号・２号・３号・９号溝跡よりも古い。なお、２号道路遺構の道路面との間に若干の間層（浅間Ｃ軽石を含む黒褐色土。締まりあり。）をもつ。　**出土遺物**　道路面から、土師器（坏・甕）、須恵器(坏、甕)、灰釉陶器（坏）破片が僅かに出土。側溝からの出土遺物については各溝の項に記載。　**時期**　道路面直上位は浅間Ｂ軽石混入土層（基本層序Ｉｂ層）の堆積が確認できたことや、４号・５号溝跡の覆土中位に浅間Ｂ軽石の純層の堆積が確認できたことから、1108（弘仁元）年の時点で両側溝をもつ道路として機能していたと推定される。道路が造作された時期については確定させる要素がないため不明。

《１号道路遺遺構の側溝と推定される遺構》

①北側側溝

４号溝跡（Fig.９・10・11、PL.１）

位置　45ａトレンチ：X27、Y501･502グリッド。45ｂトレンチ：X24、Y502･503グリッド。　**主軸方向**　N―64°―E。　**形状等**　断面は逆台形。45ｂトレンチ西端から45ａトレンチ東端までの間で長さ17.5m、最大上幅(2.50) m、最大下幅1.70m、１号道路遺構の道路面からの深さ30㎝。　**重複関係**　１号・３号溝跡、３号土坑と重複する。３号土坑より本遺構が新しい。１号・３号溝跡より本遺構が古い。　**出土遺物**　土師器（坏・甕)、酸化焔焼成須恵器（坏・椀）破片が僅かに出土。**その他**　覆土に浅間Ｂ軽石の純層が堆積していた。

②南側側溝

５号溝跡（Fig.９・10・11、PL.２）

位置　45ａトレンチ：X27、Y503グリッド。45ｂトレンチ：X23・24、Y505グリッド。　**主軸方向**　N―62°―E。　**形状等**　断面は逆台形。45ｂトレンチ西端から45ａトレンチ東端までの間で長さ18m、最大上幅2.70m、最大下幅1.70m、１号道路遺構の道路面からの深さ40㎝。　**重複関係**　３号溝跡、１号・２号土坑と重複する。本遺構が一番古い。　**出土遺物**　土師器（甕)、須恵器（甕）破片が僅かに出土。　**その他**　覆土に浅間Ｂ軽石の純層が堆積していた。

２号道路跡（Fig.９・10・11、PL.１）

位置　45ａトレンチ：X27、Y504グリッド。45ｂトレンチ：X23・24、Y506グリッド。　**主軸方向**　N―65°―E。　**形状等**　硬化面は道路面全体に広がるように分布。硬化状態は強く締まる。波板状凹凸面は未調査のため不明。45ｂトレンチ西端から45ａトレンチ東端までの間で長さ22m、道路面の最大幅6.50m、側溝の心々間の最大幅7.7m、側溝も含めた最大幅9.5m。　**重複関係**　１号道路遺構、３号溝跡、３号土坑と重複する。３号土坑よりも本遺構は新しい。１号道路遺構、３号溝跡よりも本遺構は古い。　**出土遺物**　道路面から須恵器(蓋・椀）破片が僅かに出土。側溝からの出土遺物については各溝の項に記載。　**時期**　１号道路遺構（浅間Ｂ軽石層も含めて）との重複関係から、12世紀（1108（弘仁元）年）時点では道路としての機能は失っていたと推定される。道路が造作された時期については確定させる要素がないため不明。

《２号道路遺遺構の側溝と推定される遺構》

①北側側溝

８号溝跡（Fig.９・10・11、PL.２）

位置　45ａトレンチ：X27、Y502グリッド。45ｂトレンチ：X24、Y503・504グリッド。　**主軸方向**　N―69°―E。　**形状等**　断面は逆台形。45ｂトレンチ西端から45ａトレンチ東端までの間で長さ17.5m、最大上幅1.60m、最大下幅0.80m、２号道路遺構の道路面からの深さ40㎝。　**重複関係**　１号道路遺構（道路面)、３号

溝、３号土坑と重複する。３号土坑よりも本遺構が新しい。１号道路遺構（道路面）・３号溝よりも本遺構が古い。　**出土遺物**　なし。

②南側側溝

６号溝跡（Fig.９・10・11、PL.２）

位置　45ａトレンチ：X27、Y504グリッド。45ｂトレンチ：X23・24、Y506グリッド。　**主軸方向**　N―64°―E。　**形状等**　断面は皿状。45ｂトレンチ西端から45ａトレンチ東端までの間で長さ19m、最大上幅（1.30）m、最大下幅0.55m、１号道路遺構の道路面相当の高さからの深さ46㎝。**重複関係**　２号道路遺構（南側側溝：７号溝跡）と重複する。本遺構が新しい。　**出土遺物**　土師器（甕？）破片が僅かに出土。　**その他**　覆土に浅間Ｂ軽石の純層が堆積していた。

７号溝跡（Fig.９・10・11、PL.２）

位置　45ａトレンチ：X27、Y504グリッド。45ｂトレンチ：X23・24、Y506グリッド。　**主軸方向**　45ａトレンチにおける計測値はN―58°―E。ただし、この角度では45ｂトレンチでの検出位置に接続しないことから、多少湾曲している可能性があるか。　**形状等**　断面は逆台形。45ｂトレンチ西端から45ａトレンチ東端までの間で長さ［20］m、最大上幅（1.00）m、最大下幅0.45m。２号道路遺構の道路面からの深さ60㎝。　**重複関係**　１号道路遺構（道路面）、２号道路遺構（南側側溝：６号溝跡）と重複する。本遺構が一番古い。　**出土遺物**　須恵器（椀）破片が僅かに出土。

⑵　溝跡

１号溝跡（Fig.９・10・11、PL.１）

位置　45ａトレンチ：X27、Y500・501グリッド。45ｂトレンチ：X24、Y502グリッド。　**主軸方向**　N―69°―E。　**形状等**　長さ・幅ともに不明。非常に規模が大きいため、一部分の試掘のみで調査を終了した。**重複関係**　１号道路遺構（４号溝跡）、３号溝跡と重複する。本遺構が一番新しい。　**出土遺物**　須恵器（坏）、軟質土器、常滑焼（甕）、灯明皿、染付等破片、火打ち石等が出土。　**時期**　中世と推定される。金尾城（山崎1979）の堀跡と推定される。覆土の堆積状態や聞き取りから近年まで田として耕作されていたらしい。

２号溝跡（Fig.９・10・11、PL.１）

位置　45ａトレンチ：X27、Y502グリッド。45ｂトレンチ：X24、Y503グリッド。　**主軸方向**　N―74°―E。**形状等**　断面は逆台形。長さ（4.10）m、最大上幅0.85m、最大下幅0.55m、深さ20㎝。　**重複関係**　１号道路遺構、３号・９号溝跡と重複する。本遺構が一番新しい。　**出土遺物**　須恵器、陶磁器、スラグ小片が出土。**時期**　中世以後と推定される。

３号溝跡（Fig.9.10.11、PL.１）

位置　X27、Y501～504グリッド。　**主軸方向**　やや曲がっているが概ねN―11°―W。　**形状等**　断面は浅い皿状で、部分的に二段となる。長さ（9.70）m、最大上幅1.55m、最大下幅0.95m、深さ13㎝。　**重複関係**　１号道路遺構、２号道路遺構、１号・２号・９号溝跡と重複する。１号道路遺構・２号道路遺構よりも新しい。１号・２号・９号溝跡よりも古い。　**出土遺物**　土師器・スラグ小片が出土。　**時期**　中世以後と推定される。**その他**　覆土がやや締まり、底面が平坦でなかったことから道路遺構の可能性も考えられる。

９号溝跡（Fig.９・10・11、PL.１）

位置　45ａトレンチ：X27、Y500・501グリッド。45ｂトレンチでは未検出。　**主軸方向**　N―74°―Eか。**形状等**　２号溝跡とほとんど重複するため不明。　**重複関係**　１号道路遺構、２号溝跡と重複する。１号道路遺構より新しく、２号溝跡より古い。　**出土遺物**　なし。　**時期**　中世以後と推定される。

⑶　土坑

土坑が３基検出された（Fig.９・10・11、PL.１）。各遺構の規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

46トレンチ

(1) 住居跡

１号住居跡（Fig.12、PL.）

位置　X209・210、Y350・351・352グリッド。　**主軸方向**　N―62°―E。　**形状等**　方形。東西5.21m、南北(2.50)m。壁高(10.5)㎝。　**床面**　貼床で一部は総社砂層の地山床と考えられる。　**ピット等**　柱穴１基（P_1）と貯蔵穴１基（P_2）が検出された。規模については計測表（Tab.３）に記載した。　**周溝**　西壁で周溝が検出された。周溝の規模は上幅20㎝、下幅５㎝。　**竈**　東壁で竈の袖と考えられる遺構を検出。ただし竈全体の規模は不明。　**重複関係**　２号・６号・７号・21号住居跡、１号溝跡、５号土坑と重複する。本遺構が一番古い。　**出土遺物**　土師器（坏・甕・放射状暗紋のある坏）、須恵器（蓋・坏）の破片が出土。　**時期**　８世紀前半と推定される。

２号住居跡（Fig.12、PL.２）

位置　X210、Y351グリッド。　**主軸方向**　N―90°―E。　**形状等**　方形と推定される。東西(2.57)m、南北(1.10)m。壁高(20.5)㎝。　**床面**　貼床。　**竈**　東壁南東隅寄りに構築されている。主軸方向はN―126°―E。３号住居跡の竈と重複する。残存する規模で長さ43㎝、幅40㎝。　**重複関係**　１号・３号・６号住居跡、１号溝跡、５号土坑と重複する。１号・３号・６号住居跡よりも新しい。１号溝跡・５号土坑よりも古い。　**出土遺物**　須恵器（坏・羽釜）、酸化焔焼成須恵器（坏）、土師質土器（坏・羽釜）、黒色土器（坏）、瓦（平瓦）の破片が出土。**時期**　10世紀後半と推定される。

３号住居跡（Fig.12、PL.２）

位置　X210、Y351グリッド。　**形状等**　１号溝跡および２号住居跡に破壊されているため、竈の燃焼部から煙道部の一部が残存するのみ。　**竈**　主軸方向は南北方向にも見えるが不明。残存する規模で長軸57㎝、短軸53㎝。　**重複関係**　２号・６号住居跡、１号溝跡と重複する。６号住居跡よりも新しい。２号住居跡、１号溝跡よりも古い。　**出土遺物**　土師器（甕）、須恵器（蓋）、土師質土器（羽釜）の破片が出土。　**時期**　10世紀後半か。　**その他**　２号住居跡の竈の一部である可能性がある。

４号住居跡（Fig.12）

位置　X210、Y351グリッド。　**形状等**　遺構確認時に焼土の分布が認められたことから、住居跡の竈の存在を推定。プラン確認を行ったが、明瞭に住居の形状を検出することができなかった。また、竈の燃焼部等についても検出できなかった。よって、詳細は不明。

５号住居跡（Fig.12、PL.３）

位置　X210、Y351グリッド。　**形状等**　竈跡の焼土と、その手前側の硬化面のみの検出。焼土と硬化面の位置関係から南東隅に竈を設けた住居と推定される。　**床面**　Ⅲ層の地山床。硬化面が焼土の前面で検出された。　**竈**　竈の跡と推定される焼土が確認された。焼土分布の主軸方向はN―139°―E。範囲は長軸52㎝、幅40㎝。　**出土遺物**　住居の範囲内と推測される範囲から土師器（坏）、須恵器（坏・羽釜）、酸化焔焼成須恵器（椀）、瓦（平瓦）の破片が出土。　**時期**　10世紀代と推定される。

６号住居跡（Fig.12、PL.３）

位置　X210、Y351グリッド。　**主軸方向**　N―85°―E。　**形状等**　全体形状は方形と推定される。東西(4.02)m、南北(2.25)m。壁高(33.5)㎝。　**床面**　Ⅲ層の地山床。硬化面が遺構面のほぼ全面で検出された。　**竈**　調査地内では検出されていない。東壁に構築されていると推定されるが調査区外のため不明。　**重複関係**　１号・２号・３号住居跡、１号溝跡、１号・５号土坑と重複する。１号住居よりも新しい。２号・３号住居跡、１号溝跡、１号・５号土坑よりも古い。　**出土遺物**　土師器（坏・甕）、須恵器（蓋・坏）の破片、砥石が出土。　**時期**　９世紀前半と推定される。

７号住居跡（Fig.14、PL.３）

位置　X208・209、Y351・352グリッド。　**主軸方向**　N―72°―E。　**形状等**　方形。東西(4.78)m、南北(3.00)m。壁高(25.0)㎝。　**面積**　(10.8)㎡。　**床面**　総社砂層の地山床と考えられる。　**ピット等**　貯蔵穴状のピットが住居プランの南東隅で１基検出された。規模については計測表（Tab.３）に記載した。　**竈**　調査区内では検出されていない。ただし、住居プラン西壁側で床面に灰の分布が確認された。　**重複関係**　１号・16号・21号住居跡と重複する。本住居跡が新しい。なお、北壁の土層堆積状態の観察結果から、平面形状未確認の住居が重複している可能性がある。　**出土遺物**　土師器（坏・甕・台坏甕）、須恵器（蓋・坏・甕・羽釜・転用硯）、酸化焔焼成須恵器（坏）、土師質土器（坏）、緑釉陶器の破片、石製品（碁石？）が出土。　**時期**　10世紀前半か。

８号住居跡（Fig.12、PL.３）

位置　X210、Y351グリッド。　**形状等**　Ⅲ層に床面と考えられる堅緻面が分布していたことと、平面的な遺物の集中が確認できたことから住居跡と認定した。硬化面の分布は、東壁へ続いていた。　**竈**　調査地内では検出されていない。東壁に構築されていると推定されるが調査区外のため不明。　**重複関係**　６号・９号住居跡、１号土坑と重複する。６号・９号住居跡よりも新しい。１号土坑よりも古い。　**出土遺物**　土師器（坏）破片、須恵器（坏・甕・羽釜・鉢）、酸化焔焼成須恵器（坏・椀）、土師質土器（羽釜）、灰釉陶器（椀・鉢）、緑釉陶器（段皿）の破片が出土。新しい時期の遺物が混入するか。　**時期**　９世紀後半と推定される。

９号住居跡（Fig.12、PL.３）

位置　X210、Y351グリッド。　**形状等**　住居の北壁と推定される立ち上がりが確認され、灰の分布が面的に確認できたことから住居跡と認定した。よって、形状等の詳細は不明。　**床面**　明瞭な床面（硬化面）は確認できなかった。　**竈**　調査区内では検出されていない。前述の灰の分布が竈に関連するものか。　**重複関係**　６号・８号住居跡、１号土坑と重複する。６号住居跡よりも新しい。８号住居跡・１号土坑よりも古い。　**出土遺物**　須恵器（坏・甕）破片、古銭（隆平永宝か）が出土。　**時期**　９世紀後半と推定される。

10号住居跡（Fig.14、PL.３）

位置　X209・210、Y351・352グリッド。　**主軸方向**　N―100°―E。　**形状等**　南壁と考えられる立ち上がりが確認され、東壁に当たる位置で竈と推定される焼土等の分布が確認できた点や、推定される住居内側で硬化面が確認できたことから住居跡と認定した。平面形状は方形と推定されるが、具体的な規模は不明。　**床面**　Ⅲ層の地山床。硬化面が遺構面のほぼ全面で検出された。　**竈**　東壁のやや南東隅寄りの位置で、竈の跡と考えられる焼土と灰・炭化物の分布が確認された。焼土分布の主軸方向はN―100°―E。範囲は長軸57㎝、幅(30)㎝。　**重複関係**　５号・７号・11号・13号住居跡、２号・４号土坑と重複する。７号住居跡・２号・４号土坑よりも古い。11号・13住居跡よりも新しいと推定される。５号住居跡との新旧関係については不明瞭。　**出土遺物**　須恵器（坏・甕・羽釜）破片、酸化焔焼成須恵器（坏・椀）破片。　**時期**　10世紀前半と推定される。

11号住居跡（Fig.14、PL.４）

位置　X209・210、Y352グリッド。　**主軸方向**　N―107°―E。　**形状等**　西壁と考えられる立ち上がりが確認され、推定される住居内側で硬化面が確認できたことから住居跡と認定した。平面形状は方形と推定されるが、具体的な規模は不明。　**床面**　Ⅲ層の地山床。堅緻面が遺構面のほぼ全面で検出された。　**竈**　調査地内では検出されていない。東壁に構築されていると推定されるが調査区外のため不明。　**重複関係**　10号・13号住居跡、２号・３号土坑と重複する。10号・13号住居跡、２号・３号土坑よりも古い。　**出土遺物**　須恵器（坏・甕）破片、酸化焔焼成須恵器（坏・椀）破片。　**時期**　９世紀後半と推定される。

12号住居跡（Fig.16、PL.３）

位置　X207、Y352グリッド。　**形状等**　面的な掘り下げで遺構確認を行った際、硬化した面が広範囲で確認で

きたことから住居跡の床面と認定したもの。よって、平面形状、主軸方向等は不明。　**床面**　Ⅲ層の地山床。硬化面の規模は長軸2.5m、短軸1.3m。　**重複関係**　15号住居跡と重複する。本遺構が新しい。　**時期**　10世紀代と推定される。

13号住居跡（Fig.14、PL.３）

位置　X210、Y352グリッド。　**形状等**　Ⅲ層に床面と考えられる堅緻面が分布していたことと、平面的な遺物の集中が確認できたことから住居跡と認定した。　**床面**　Ⅲ層の地山床。　**竈**　調査地内では検出されていない。　**重複関係**　10号・11号・18号・19号・20号住居跡、２・３号土坑、２号落ち込みと重複する。18号・19号・20号住居跡、２号落ち込みよりも新しい。10号・11号住居跡、２・３号土坑よりも古い。　**出土遺物**　破片、須恵器（坏・甕・羽釜）破片、酸化焔焼成須恵器（椀）破片。**時期**　10世紀前半と推定される。

14号住居跡（Fig.16、PL.４）

位置　X207・208、Y351・352グリッド。　**形状等**　面的な掘り下げで遺構確認を行った際、硬化した面が広範囲で確認できたことから住居跡の床面と認定したもの。よって、平面形状、主軸方向等は不明。　**床面**　Ⅲ層の地山床。硬化面の規模は長軸3.3m、短軸2.3m。　**重複関係**　16号・17号住居跡と重複する。本遺構が新しい。　**時期**　10世紀代と推定される。

15号住居跡（Fig.16、PL.４）

位置　X207、Y352グリッド。　**形状等**　面的な掘り下げで遺構確認を行った際、硬化した面が広範囲で確認できたことから住居跡の床面と認定したもの。よって、平面形状、主軸方向等は不明。　**床面**　Ⅲ層の地山床。硬化面の規模は長軸2.5m、短軸1.3m。　**重複関係**　12号・22号住居跡と重複する。本遺構が一番新しい。　**時期**　10世紀代と推定される。

16号住居跡（Fig.15、PL.４）

位置　X207・208、Y351・352グリッド。　**主軸方向**　N―90°―E。　**形状等**　方形。東西4.45m、南北(3.53)m。壁高(21.0)㎝。　**面積**　(15.8)㎡。　**床面**　貼床。硬化面が住居のほぼ全面で検出された。　**ピット等**　貯蔵穴と推定されるピットが住居プランの南東隅で１基検出された。規模については計測表（Tab.３）に記載した。　**周溝**　調査した西壁・南壁・東壁で周溝が検出された。周溝の規模は最大上幅25㎝、最大下幅10㎝、深さ５㎝。　**竈**　東壁中央に存在したと推定されるが、６号土坑の影響もあり不明。　**重複関係**　７号・14号・17号・21号住居跡、２号溝跡、６号土坑と重複する。17号・21号住居跡よりも新しい。７号・14号住居跡、２号溝跡、６号土坑よりも古い。　**出土遺物**　土師器（坏・甕・小甕）、須恵器（坏・皿・鉢・盤・甕）破片、螺旋状暗紋を有する土器破片、石製品（石皿？）、環状の金属製品など。16号住居跡の遺物としたものの中にも、新しい時期の遺物も多く含まれていることも考えられる。　**時期**　８世紀後半と推定される。

17号住居跡（Fig.15、PL.４）

位置　X207、Y351・352グリッド。　**形状等**　16号住居跡の精査時に、その西側で検出した方形の遺構を住居跡としたもの。検出された遺構も床面よりやや低い高さと推定されるため、主軸方向や床面の状況等も不明。　**重複関係**　16号住居跡、２号溝跡と重複する。本遺構が古い。　**出土遺物**　確実に伴う遺物は出土していない。　**時期**　重複関係から８世紀代と推定されるが、詳しい時期は不明。

18号住居跡（Fig.13、PL.４）

位置　X210、Y351・352グリッド。　**主軸方向**　N―30°―E。　**形状等**　方形。東西(2.20)m、南北(2.95)m。壁高(14.5)㎝。　**床面**　貼床。　**竈**　東壁に構築されていると推定されるが調査区外のため不明。　**重複関係**　13号・19号・20号住居跡、８号・９号土坑と重複する。20号住居跡、８号・９号土坑よりも新しい。13号・19号住居跡よりも古い。　**出土遺物**　土師器（坏・甕）、須恵器（坏・甕）破片、砥石。　**時期**　９世紀代と推定される。

19号住居跡（Fig.13、PL.４）

位置　X210、Y351･352グリッド。　**主軸方向**　N―90°―E。　**形状等**　方形。東西(1.30)m、南北(2.64)m。壁高(9.0)㎝。　**床面**　貼床。　**周溝**　西壁で周溝が検出された。周溝の規模は上幅17㎝、下幅７㎝、深さ４㎝。**竈**　東壁に構築されていると推定されるが調査区外のため不明。　**重複関係**　13号・18号・20号住居跡、８号土坑と重複する。18号･20号住居跡、８号土坑よりも新しい。13号住居跡より古い。　**出土遺物**　土師器（坏・甕）破片、須恵器（甕）破片、酸化焔焼成須恵器（坏・椀）、灰釉陶器破片。　**時期**　10世紀前半と推定される。

20号住居跡（Fig.13、PL.４）

位置　X210、Y351･352グリッド。　**主軸方向**　N―65°―E。　**形状等**　方形。東西(2.20)m、南北(3.20)m。壁高(16.5)㎝。　**床面**　総社砂層の地山床。　**周溝**　住居北西隅および西壁の一部で検出された。周溝の規模は上幅10㎝、下幅７㎝、深さ5.5㎝。　**炉**　北壁寄りで楕円形に焼土・灰・炭化物が集中する地点を検出。炉跡と判断した。　**重複関係**　13・18・19号住居跡、８号土坑と重複する。本遺構が一番古い。　**出土遺物**　覆土が薄いため遺物は少ない。土師器（台付甕）破片等。　**時期**　住居の特徴などから４世紀代と推定される。

21号住居跡（Fig.15）

位置　X208・209、Y351・352グリッド。　**主軸方向**　N―２°―E。　**形状等**　方形。東西(2.55)m、南北(4.00)m。壁高(7.5)㎝。　**床面**　貼床。床面のほぼ全面で検出された。**ピット等**　貯蔵穴と推定されるピットが住居プランの南東隅で１基検出された。その他、そのピットの南に重複して小ピットが検出された。規模については計測表（Tab.３）に記載した。　**周溝**　周溝が西壁で検出された。周溝の規模は最大上幅25㎝、最大下幅17㎝、深さ(2.5)㎝。　**竈**　東壁中央付近に灰が分布することから、付近にその存在が推定できるが、本体は未確認。　**重複関係**　１号・７号・16号住居土坑と重複する。１号住居跡よりも新しい。７号住居跡より古い。16号住居との新旧関係は６号土坑の影響で不明瞭。　**出土遺物**　土師器（坏・甕）破片、須恵器（坏・大甕）破片。　**時期**　８世紀代と推定される。

22号住居跡（Fig.15）

位置　X206・207、Y351・352グリッド。　**主軸方向**　N―70°―E。　**形状等**　トレンチ西壁および南壁の土層を観察時に住居と推定される掘り込みが確認できた点から、住居跡と認定した。　**竈**　東壁に構築されていたと推定されるが、調査では検出されていない。　**重複関係**　11号土坑と重複する。本遺構が新たらしい。　**出土遺物**　明確に本遺構に伴う遺物は判別できない。　**時期**　10世紀代と推定される。

23号住居跡（Fig.13、PL.４）

位置　X210、Y353グリッド。　**主軸方向**　N―90―Eと推定される。　**形状等**　方形と推定される。トレンチ南東隅のサブトレンチにおいて北壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明。　**出土遺物**　土師器破片、須恵器破片。　**時期**　遺物が少ないため時期の特定が難しいが、８世紀代もしくは９世紀前半頃を想定したい。

24号住居跡（Fig.15）

位置　X209、Y352グリッド。　**主軸方向**　N―94°―Eと推定される。　**形状等**　方形と推定される。東側壁と推定される遺構と、その西側で面的に検出された硬化面を床面と認定したもの。よって、詳細な規模は不明。**重複関係**　16号・21号・25号住居跡と重複すると推定される。各遺構の時期から、本遺構が一番新しい。　**出土遺物**　住居内と推定される範囲から須恵器（甕）破片、酸化焔焼成須恵器（坏）破片が出土している。　**時期**　10世紀代と推定される。

25号住居跡（Fig.15）

位置　X209、Y352グリッド。　**形状等**　トレンチ南壁の土層を観察した際に掘り込みと解釈できる土層の変化を確認したため、住居跡として認定したもの。よって、詳細な規模は不明。　**重複関係**　土層観察から、24号住居跡との重複が推定される。その場合、本住居が古い。　**時期**　10世紀代と推定される。

⑵　**ピット列**

46トレンチの中世面の調査において、ピットが同軸上に並んだことから一つの構造物と捉えた。その性格としては柵列が考えられる。

１号ピット列（Fig.17、PL.５）

位置　X207・208・209・210、Y352・353グリッド。　**主軸方向**　N―76°―E。　**形状等**　円形の５基のピットが直線的に並んだもの。なお、各柱穴（ピット）の規模等については計測表（Tab.３）に記載した。柱間の距離については、西から2.9m・2.7m・2.45m・5.2mで、一番東のピットは約２間分離れる。その間でピットは検出されなかった。　**時期**　中世と推定される。

⑶　**溝跡**

１号溝跡（Fig.17、PL.５）

位置　X210、Y350・351グリッド。　**主軸方向**　N―90°―E。　**形状等**　底面まで調査していないため断面形状は不明。　**重複関係**　１号・２号・３号・６号住居跡と重複する。本遺構が新しい。　**出土遺物**　土師器（坏、甕）破片、須恵器（坏・蓋・甕）破片、酸化焔焼成須恵器（坏）破片、陶磁器破片。　**時期**　中世と推定される。

２号溝跡（Fig.15、PL.５）

位置　X207、Y351グリッド。　**主軸方向**　N―65°―E。　**形状等**　断面は逆台形。上幅(120.0)㎝、下幅(100.0)㎝、深さ54㎝。　**重複関係**　16号・17号住居跡と重複する。本遺構が新しい。　**出土遺物**　土師器（坏、甕）破片、須恵器（坏・蓋・転用硯）破片、石製品（碁石？）が出土。　**時期**　古代と推定される。住居跡との重複関係から９世紀から10世紀代にかけて存在したと推定される。

⑷　**土坑、ピット、落ち込み**

土坑が17基、ピットが19基、落ち込みが２ヶ所検出された（Fig.12～17、PL.５）。各遺構の規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

47トレンチ

⑴　**溝跡**

１号溝跡（Fig.18、PL.６）

位置　X224、Y234・235グリッド。　**主軸方向**　N―73°―W。　**形状等**　トレンチ内で検出された規模は長さ3.2m、最大上幅0.85m、最大下幅0.4m、深さ25㎝。断面は逆台形。　**重複関係**　２・３号溝跡、１号井戸跡、１号土坑、２号ピットと重複する。２・３号溝跡よりも新しい。１号土坑、２号ピットよりも古い。　**出土遺物**　土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）・土師質土器（椀）・軟質土器・陶磁器破片。　**時期**　近世と推定される。

２号溝跡（Fig.18、PL.６）

位置　X224、Y234・235グリッド。　**主軸方向**　N―76°―W。　**形状等**　トレンチ内で検出された規模は長さ3.6m、最大上幅2.7m、最大下幅2.5m、遺構確認面からの深さ0.40m。断面は逆台形。底面に硬化面が同軸で帯状に分布する。その硬化面の下位に３号溝跡が存在する。また、硬化面直上には10～20㎝の川原石が散在していた。　**重複関係**　１・３号溝跡、１号井戸跡、１号土坑、２号ピットと重複する。３号溝跡は本遺構の底面に掘削され、その上部に本遺構の底面と同レベルで硬化面が分布していることから、同時期の遺構とも考えられる。他の遺構については、本遺構が一番古い。　**出土遺物**　土師器（坏・甕）破片、須恵器（甕）破片、瓦（平瓦）破片、鉄滓。　**時期**　古代と推定される。出土遺物や遺構の重複関係から10世紀代には機能していなかったと考えたい。

３号溝跡（Fig.18、PL.６）

位置　X224、Y234・235グリッド。　**主軸方向**　N―77°―W。　**形状等**　トレンチ内で検出された規模は長さ

［3.0］m、最大上幅0.98m、最大下幅0.50m、深さ0.32m。断面は逆台形。上位に硬化面（２号溝跡の底面）が分布する。　**重複関係**　１・３号溝跡、１号井戸跡、１号土坑、２号ピットと重複する。２号溝跡については同時期に存在した可能性がある。他の遺構については本遺構が古い。なお、本遺構直上の硬化面については２号溝跡の説明を参照。　**出土遺物**　なし。　**時期**　古代と推定される。出土遺物や遺構の重複関係から10世紀代には機能していなかったと考えたい。

⑵　井戸跡、土坑、ピット

井戸跡が１基、土坑が５基、ピットが６基検出された（Fig.18、PL.６）。各遺構の規模については計測表（Tab.３）に記載した。

48トレンチ

⑴　竪穴式住居

１号住居跡（Fig.19）

位置　X305、Y303グリッド。　**主軸方向・形状等**　竈と推定される焼土をともなう楕円形のピット状の遺構が確認されたのみで、主軸方向・形状等は不明。　**竈**　住居南東隅に設置されたと推定される竈状の遺構が存在する。　**出土遺物**　酸化焔焼成須恵器（椀）破片が出土。　**時期**　出土遺物から10世紀前半と推定される。

２号住居跡（Fig.19、PL.６）

位置　X306・307、Y303グリッド。　**主軸方向**　ほぼ正方位と考えられる。　**形状等**　方形と推定される。東西(3.90)m、南北(2.40)m。壁高(15)㎝。　**面積**　(10.0)㎡。　**床面**　砂層への漸移層に構築された地山床と推定されるが硬化は顕著ではない。　**竈**　痕跡が確認できないため不明。　**重複関係**　４号・５号掘立柱建物跡と重複する。本遺構が新しい。　**出土遺物**　土師器（坏・甕）破片。　**時期**　出土遺物が少なく時期特定が難しいが10世紀後半か。

３号住居跡（Fig.19、PL.６）

位置　X307・308、Y303・304グリッド。　**検出状態**　１号溝跡と２号溝跡にはさまれた範囲で、硬化した黒色土が面的に検出されたことから、住居跡の床面と判断した。しかし、その形状も判然としないため、住居跡の可能性は低いと考えられる。

４号住居跡（Fig.19、PL.６）

位置　X299、Y304グリッド。　**主軸方向**　N―120°―E。　**形状等**　方形と推定される。東西(0.76)m、南北(0.84)m。壁高(２)㎝。　**面積**　(0.6)㎡。　**床面**　砂層への漸移層に構築された貼床。堅緻面が認められる。　**竈**　検出できなかった。東壁に構築されていたと推定される。　**重複関係**　３号住居跡と重複する。　**出土遺物**　土師器（坏）破片、須恵器（蓋）破片、酸化焔焼成須恵器（坏）破片が出土。　**時期**　出土遺物から10世紀代と推定される。

⑵　掘立柱建物跡

２号掘立柱建物跡（元総社小校庭遺跡２号掘立柱建物跡）（Fig.20、PL.７）

位置　X305、Y303グリッド。　**主軸方向**　正方位。　**形状等**　群馬大学の調査結果から東西方向に長軸をとると推定される。本年度の調査では梁行東列の柱穴１間分を検出した。　**柱穴**　P_1は北半分が調査区外となっているが、検出状態から方形と推定される。P_2は梁行方向に長軸をとる楕円形。P_2のほうが小さい。両方とも覆土はすでに掘り取られているため柱痕等は不明であるが、柱穴底面の精査の結果、P_1では当たりのような痕跡は確認できなかったが、P_2では当たりと推定される環状を呈した鉄分の凝集が確認できた。なお、各柱穴の規模については計測表（Tab.３）に記載した。　**重複関係**　４号掘立柱建物跡と重複する。柱穴が完掘されていたので、新旧関係は不明。１号住居跡とも調査区外で重複するものと推測される。　**時期**　古代と推定される

が、詳しい時期を判断する根拠がないため不明。

４号掘立柱建物跡（Fig.20、PL.７・８）

位置　X305～308、Y303～305グリッド。　**主軸方向**　N―２°―Eであるが、本来的には正方位を意識していると推定される。　**形状等**　東西方向に長軸をとり、桁行５間、梁行２間。柱の心心で東西13.42m（桁行北列）、南北5.98m（梁行西列）を測る。建物跡の北側は調査区外のため不明であるが、建物の西側・南側・東側および内側で庇・束柱の柱穴は検出されなかった。雨落ち溝も検出されなかった。　**柱穴**　本掘立柱建物跡に属する柱穴と認定したピットは13基存在する。南東隅の柱穴は確認できなかったが、本来的には存在していたと考えられる。柱穴の平面形状は隅丸の方形で、柱穴の底面では、円形に白色化した硬化部分とそれを環状に囲む鉄分の凝集が多くの柱穴で確認できた。なお、そうした部分が円形に掘り凹められているものが多い。また、柱穴に覆土の残る８基については、抜き取り痕は検出されなかった。各柱穴の規模等については計測表（Tab.３）に記載した。柱間の距離については、桁行北列で西から2.65m・2.60m・2.74m・2.63m・2.80m、桁行南列で西から2.70m・2.68m・2.62m・2.73m・（不明）、梁行西列は北から3.00m・2.98m、梁行東列は北から2.86m・（不明）を測る。　**重複関係**　２号住居跡、２号掘立柱建物（元総社小校庭遺跡２号掘立柱建物跡）・５号掘立柱建物跡、１・２号溝跡と重複する。２号住居跡、５号掘立柱建物跡、１・２号溝跡よりも古い。２号掘立柱建物との関係については、すでに覆土が完掘されていたので新旧関係は不明。　**出土遺物**　柱穴からから古墳時代の土師器（４世紀・６世紀）や須恵器の破片が少量出土している。　**時期**　８世紀代に存在していたと考えられるが、詳しい時期を判断する根拠に乏しい。10世紀代には廃絶していたと推定される。

５号掘立柱建物跡（Fig.21、PL.８）

位置　X307・308、Y303・304グリッド。　**主軸方向**　正方位。　**形状等**　東側の梁の柱列を確認できなかったが、東西方向に長軸をもつ建物と推定される。桁行は不明であるが少なくとも３間以上、梁行は３間。柱の心心で南北4.83m（梁行西側）を測る。建物の西側、南側および内側では庇・束柱の柱穴は検出されなかった。ただし、建物内側に柱穴状のピット（P―21）が存在し、束柱の可能性がある。雨落ち溝は検出されなかった。　**柱穴**　本掘立柱建物跡に属する柱穴は８基検出された。柱穴の平面形状は隅丸の方形と円形のものが混在する。また、柱列方向に掘り形をもつ柱穴も存在した。柱穴の底面には多少の凹みをもつものが存在した。また円形または環状の鉄分の凝集が確認されたものもあり、凹み部分に鉄分の凝集があるものも確認された。抜き取り痕が明瞭に確認できた柱穴はなかったが、柱穴を掘り直したものは存在する。各柱穴（ピット）の規模等については計測表（Tab.３）に記載した。柱間の距離については、桁行南列で西から2.00m・2.30m、梁行西列は北から1.45m・1.65m・1.73mを測る。　**重複関係**　２・３・４号住居跡、４号掘立柱建物跡、１号・２号溝跡と重複する。４号掘立柱建物跡よりも新しい。２・３・４号住居跡、１号・２号溝跡よりも古い。　**時期**　古代と推定される。

⑶　溝跡

１号溝跡（Fig.19、PL.６）

位置　X307、Y303・304グリッド。　**主軸方向**　N―15°―W。　**形状等**　長さ(4.3)m、深さ0.32m　最大上幅0.98m、最大下幅0.50m。断面はU字形。　**重複関係**　４・５号掘立柱建物跡、P―22と重複する。４号掘立柱建物とは、本遺構が古い。５号掘立柱建物とは撹乱により直接的な重複関係が確認できないが、４号掘立柱建物との新旧関係から、本遺構が古い。P―22についても、本遺構が古い。　**出土遺物**　土師器（石田川式・坏・甕）破片、須恵器（蓋、甕）破片、土師質土器（坏、椀）、転用硯破片、瓦破片。　**時期**　古代と推定される。掘削された時期の特定は難しいが10世紀後半頃には機能していなかったと考えられる。

２号溝跡（Fig.19、PL.６）

位置　X307・308、Y303・304・305グリッド。　**主軸方向**　N―13°―W。　**形状等**　トレンチ内で確認できる

規模では、長さ9.3m、深さ25㎝、最大上幅0.83m。最大下幅0.56m。断面はU字形。溝はX308、Y305で終息するが、終息する地点が一番幅広く深い。　**重複関係**　４号住居跡、４号・５号掘立柱建物跡と重複する。本遺構が一番新しい。　**出土遺物**　土師器（坏、甕）、須恵器（蓋・坏・甕）、土師質土器（坏）、瓦（平瓦）、灰釉陶器（椀）破片が出土。　**時期**　古代と推定される。出土遺物や他の遺構との重複関係から10世紀代に機能していたか。

⑷　土坑、ピット、風倒木痕

土坑が３基、ピットが21基、風倒木痕１ヶ所が検出された（Fig.19・21・22）。各遺構の規模等については計測表（Tab.３）に記載した。なお、ピットには検出状態や位置関係から何かしらの構造物を構成する柱穴と考えられるものも存在する。しかしながら、その構造が明瞭ではないことから、ピットとして扱った。

49トレンチ

⑴　建物跡（Fig.23、PL.８）

位置　X257・258・259、Y252グリッド。　**主軸方向**　N―３°―E。　**形状等**　拳大の川原石が敷き詰められた帯状の敷石が方形区画を呈した状態で検出された。この帯状部分の幅は約50㎝、深さ20㎝程度の溝状の掘り込みに石を敷き詰めたものと推定される。この遺構に関連すると推定される円形の敷石も検出された。敷石は40㎝程度の扁平な川原石を中心に配置し、その周囲に放射状に拳大の円礫を放射状に並べたもの。帯状の敷石は建物の基礎と推定されるが、円形の敷石は用途不明。作業台か。　**重複関係**　検出状態から、本遺構が一番新しい。**時期**　近世以後と推定される。

⑵　竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（Fig.23、PL.８）

位置　X257、Y252グリッド。　**主軸方向**　N―18°―E。　**形状等**　長方形と推定される。検出されたのは北西隅と考えられ、東西(0.82)m、南北(0.89)m。壁高58㎝。　**床面**　地山の砂層に造られた地山床。**ピット等**　この住居にともなう可能性のあるピットが３基検出された。各ピットの規模等については計測表（Tab.３）に記載した。　**出土遺物**　土師器（甕）・須恵器（坏）・瓦（平瓦）破片が出土。　**時期**　中世以後と推定される。

２号竪穴状遺構（Fig.23、PL.８）

位置　X258、Y252グリッド。　**主軸方向**　ほぼ正方位。　**形状等**　方形。東西4.15m、南北4.07m。壁高15㎝。　**床面**　地山の砂層に造られた地山床。　**周溝**　西壁に周溝が認められた。　**ピット等**　柱穴と考えられるピットが３基検出された。ピットの規模等については計測表（Tab.３）に記載した。　**重複関係**　３号竪穴状遺構と重複する。本遺構が新しいと推定される。　**出土遺物**　須恵器（甕）・瓦（平瓦、丸瓦）・かわらけ・陶磁器などの破片が出土。　**時期**　中世以後と推定される。

３号竪穴状遺構（Fig.23、PL.８）

位置　X258、Y252グリッド。　**主軸方向**　N―78°―E。　**形状等**　方形。東西2.05m、南北1.28m。壁高41.5㎝。　**床面**　地山の砂層に造られた地山床。　**重複関係**　２号竪穴状遺構と重複する。本遺構が古いと推定される。**出土遺物**　酸化焔焼成須恵器（坏）・瓦（平瓦）破片が出土。　**時期**　中世以後と推定される。

⑶　井戸跡・土坑・ピット

井戸跡３基、土坑11基、ピット85基が検出された（Fig.23、PL.８）。出土遺物等から、中世以後に属する遺構がほとんどを占めると推定される。その規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

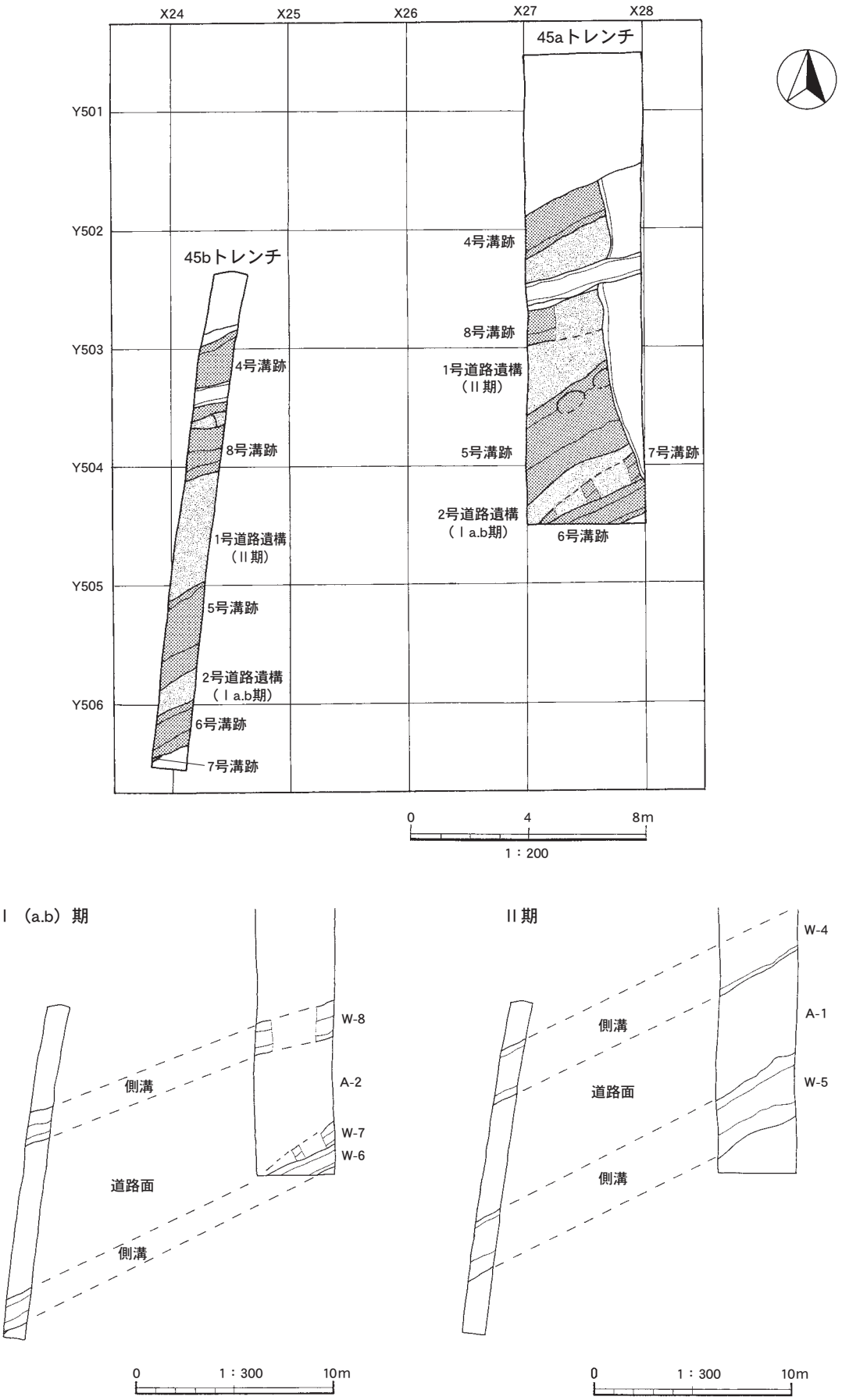


Fig. 9　45ａ・ｂトレンチ各遺構(1)

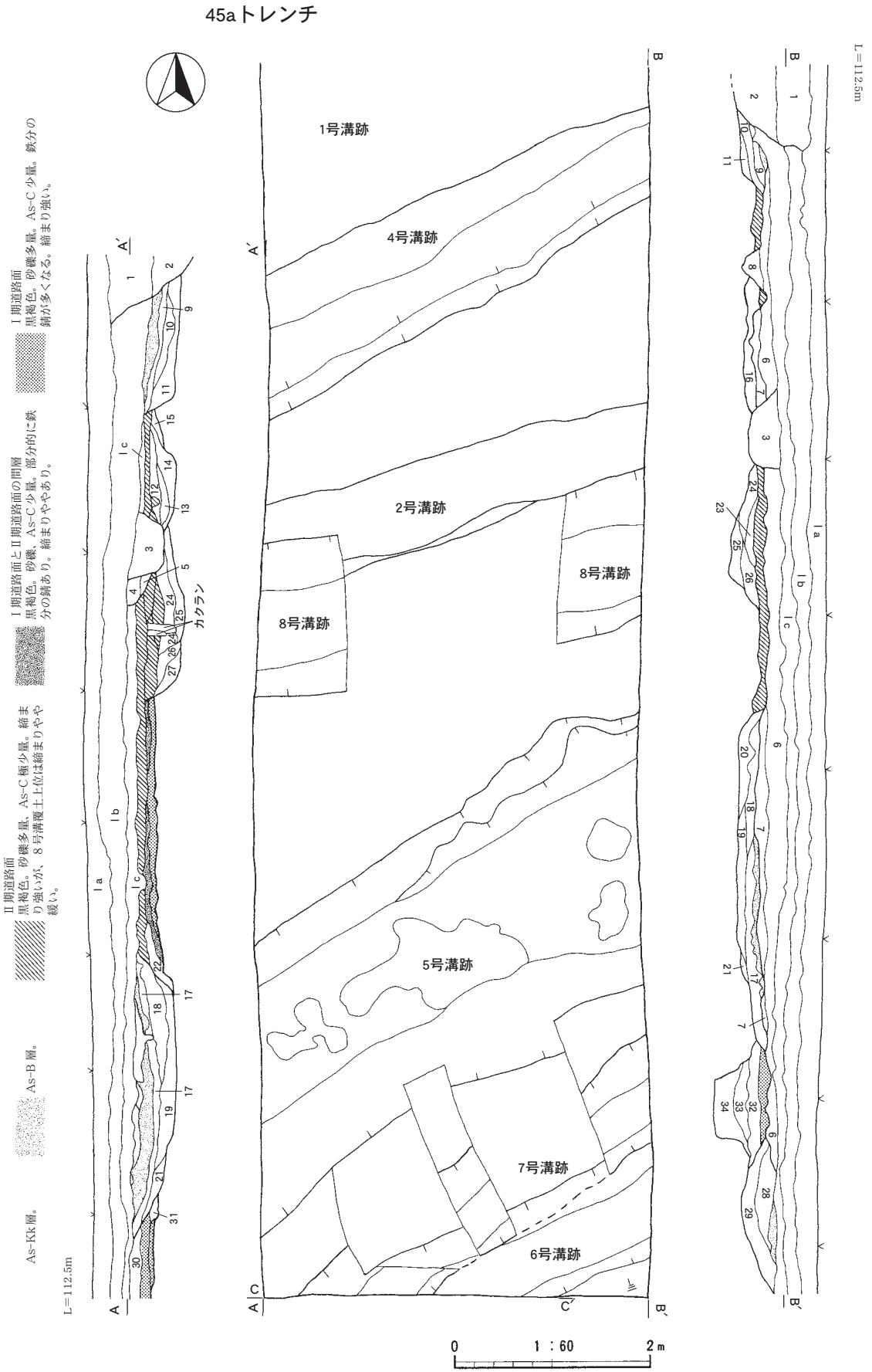
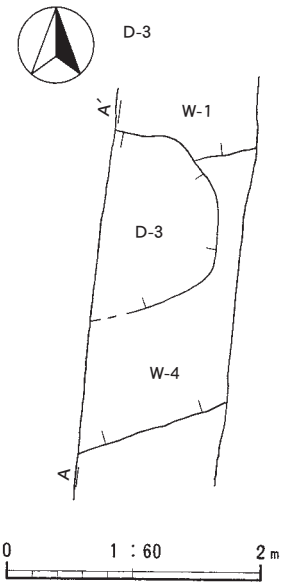
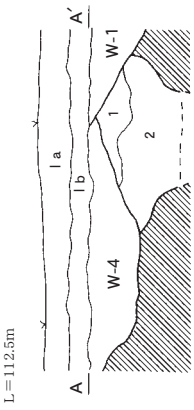


Fig. 10　45 a ・ b トレンチ各遺構(2)

45a トレンチ　西壁・東壁層序説明

Ⅰa		現表土。
Ⅰb		As-B 混入土層（上層）
Ⅰc		As-B 混入土層（下層）
1		現表土。(1号溝を埋め立てた土)（1号溝跡覆土）
2		旧表土。(1号溝を田などに使用していた際の表土)（1号溝跡覆土）
3	暗褐	As-B 多量。（2号溝跡覆土）
4	暗褐	As-B 多量。（9号溝跡覆土）
5	暗褐	As-B 多量。（9号溝跡覆土）
6	黒褐	As-B 多量。1号道路遺構のブロックを含む。締まりややあり。（3号溝跡覆土）
7	黒褐	砂礫少量。（3号溝跡覆土）
8	黒褐	砂質。（3号溝跡覆土）
9	黒	粘質。（4号溝跡覆土）
10	黒褐	粘質。As-C、砂礫少量。（4号溝跡覆土）
11	黒褐	粘性あるが砂質。砂礫多量。As-C 少量。（4号溝跡覆土）
12	黒褐	砂礫小量、As-C 極少量。
13	黒褐	砂礫・As-C 極少量。
14	黒褐	やや砂質。
15	黒	やや粘質。(Ⅳ層か。)
16	黒褐	砂質。As-C 若干。
17	黒	粘質。（5号溝跡覆土）
18	暗褐	砂質。As-C 少量。（5号溝跡覆土）
19	黒褐	As-C 少量。（5号溝跡覆土）
20	黒褐	砂質。（5号溝跡覆土）
21	暗褐	As-C 少量。（5号溝跡覆土）
22	黒褐	砂礫少量。締まりややあり。
23	黒褐	砂礫多量。As-C 極少量。締まりややあり。（8号溝跡覆土）
24	黒褐	砂質。（8号溝跡覆土）
25	黒褐	砂質。（8号溝跡覆土）
26	黒褐	砂礫少量、As-C 極少量。（8号溝跡覆土）
27	褐灰	砂質。（8号溝跡覆土）
28	黒	粘質。（6号溝跡覆土）
29	黒	As-C 極少量。（6号溝跡覆土）
30	黒褐	砂礫少量。
31	暗褐	As-C 少量。
32	黒褐	砂礫少量。As-C 極少量。（7号溝跡覆土）
33	黒褐	砂礫少量。As-C 若干。（7号溝跡覆土）
34	灰黄褐	砂礫多量。（7号溝跡覆土）



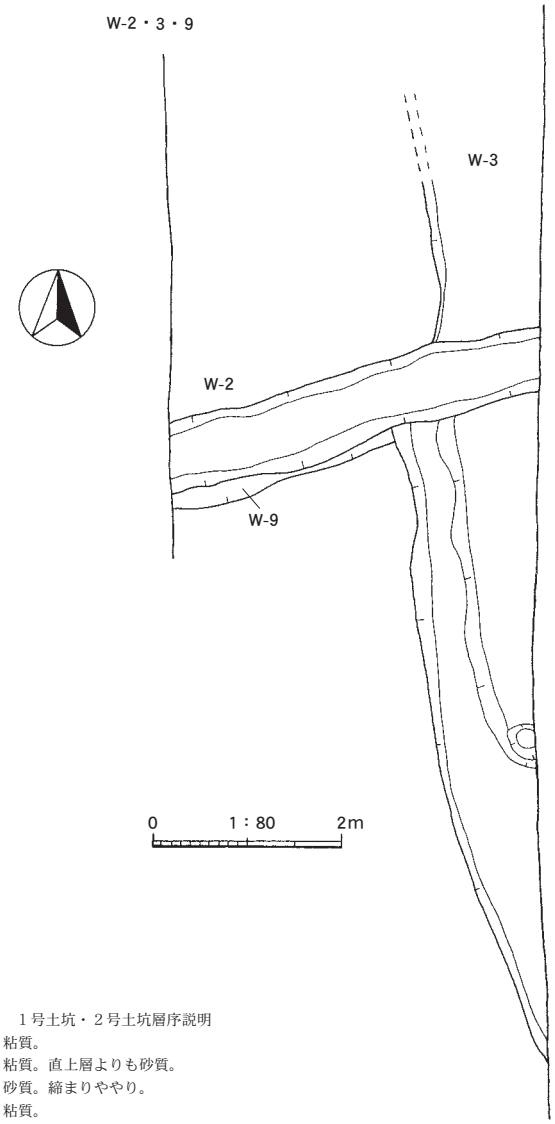


45b トレンチ　3号土坑層序説明

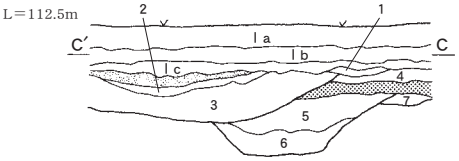
Ⅰa		現表土。
Ⅰb		As-B 混入土層
1	黒褐	As-C 極少量、砂礫少量。
2	黒	粘質土層。

45a トレンチ　南壁層序説明

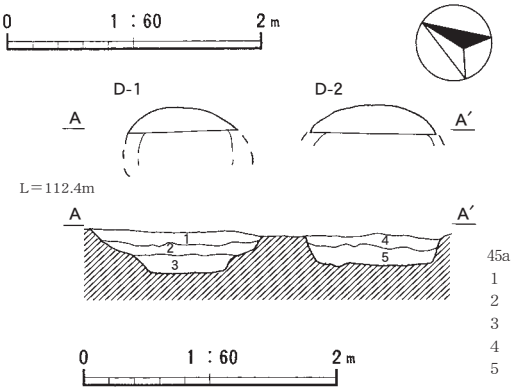
Ⅰa		現表土。
Ⅰb		As-B 混入土層（上層）
Ⅰc		As-B 混入土層（下層）
1	黒	粘質。
2	黒	粘質。（6号溝跡覆土）
3	黒褐	粘性あるが砂質。（6号溝跡覆土）
4	黒褐	砂礫少量。締まりややあり。
5	黒褐	砂礫少量。As-C 若干。（7号溝跡覆土）
6	灰黄褐	砂礫多量。（7号溝跡覆土）
7	黒褐	砂礫少量。砂層土ブロック若干。締まりややあり。



45aトレンチ南壁



※トーン部分の説明は P.29 に準ずる。



45a トレンチ　1号土坑・2号土坑層序説明

1	黒褐	粘質。
2	黒褐	粘質。直上層よりも砂質。
3	灰黄褐	砂質。締まりややり。
4	黒褐	粘質。
5	黒褐	粘質。直上層よりも砂質。

Fig. 11　45ａ・ｂトレンチ各遺構(3)

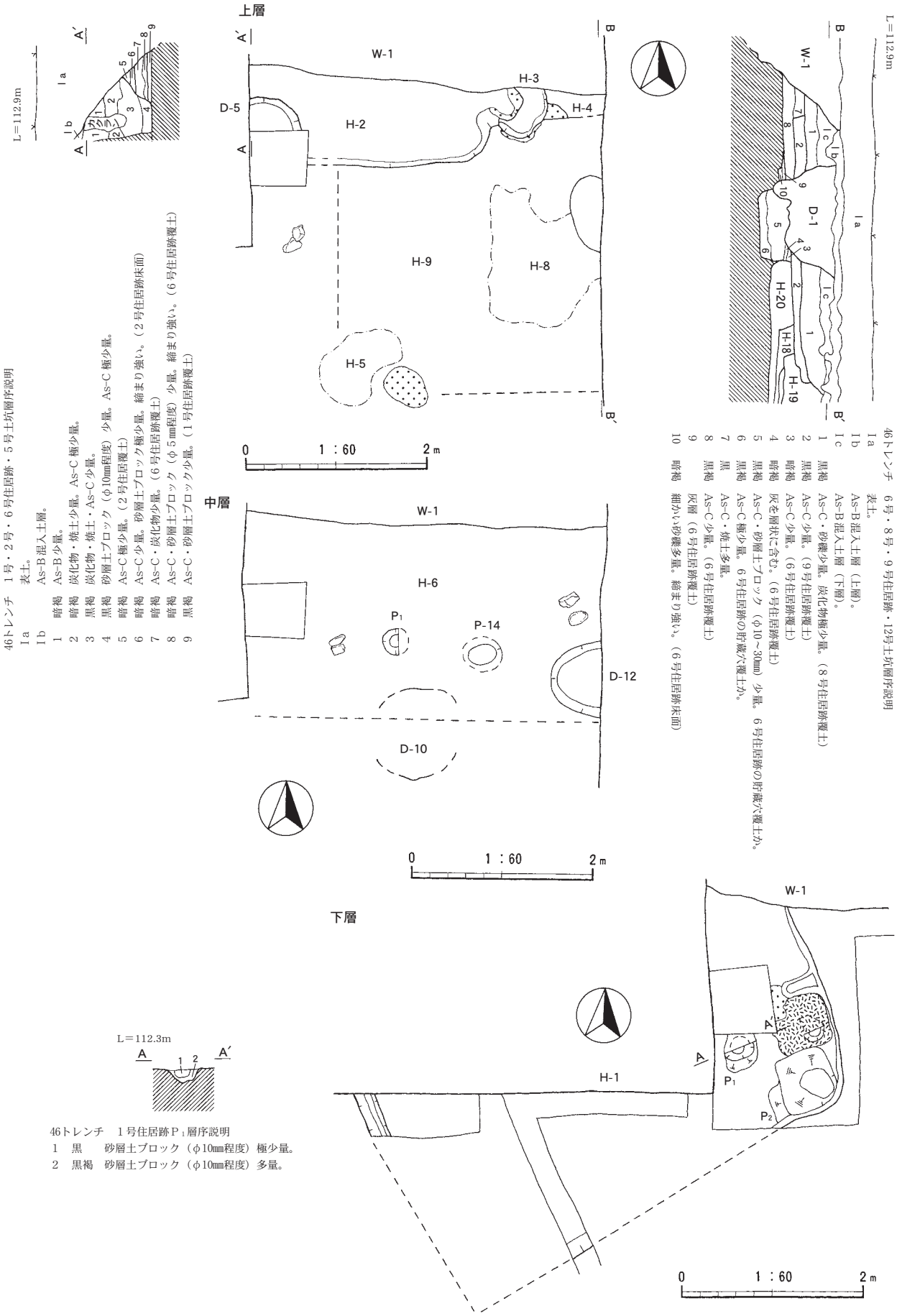
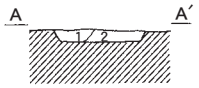


Fig. 12　46トレンチ各遺構(1)

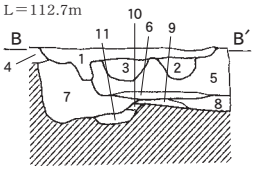
D-9・P-13
L＝112.5m



0　1：60　2m

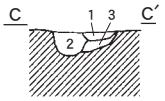
46トレンチ　9号土坑、13号ピット層序説明
1　暗褐　As-C 少量。炭化物極少量。
2　黒褐　As-C 多量。底面に薄く灰の堆積。

D-8・H-19
L＝112.7m



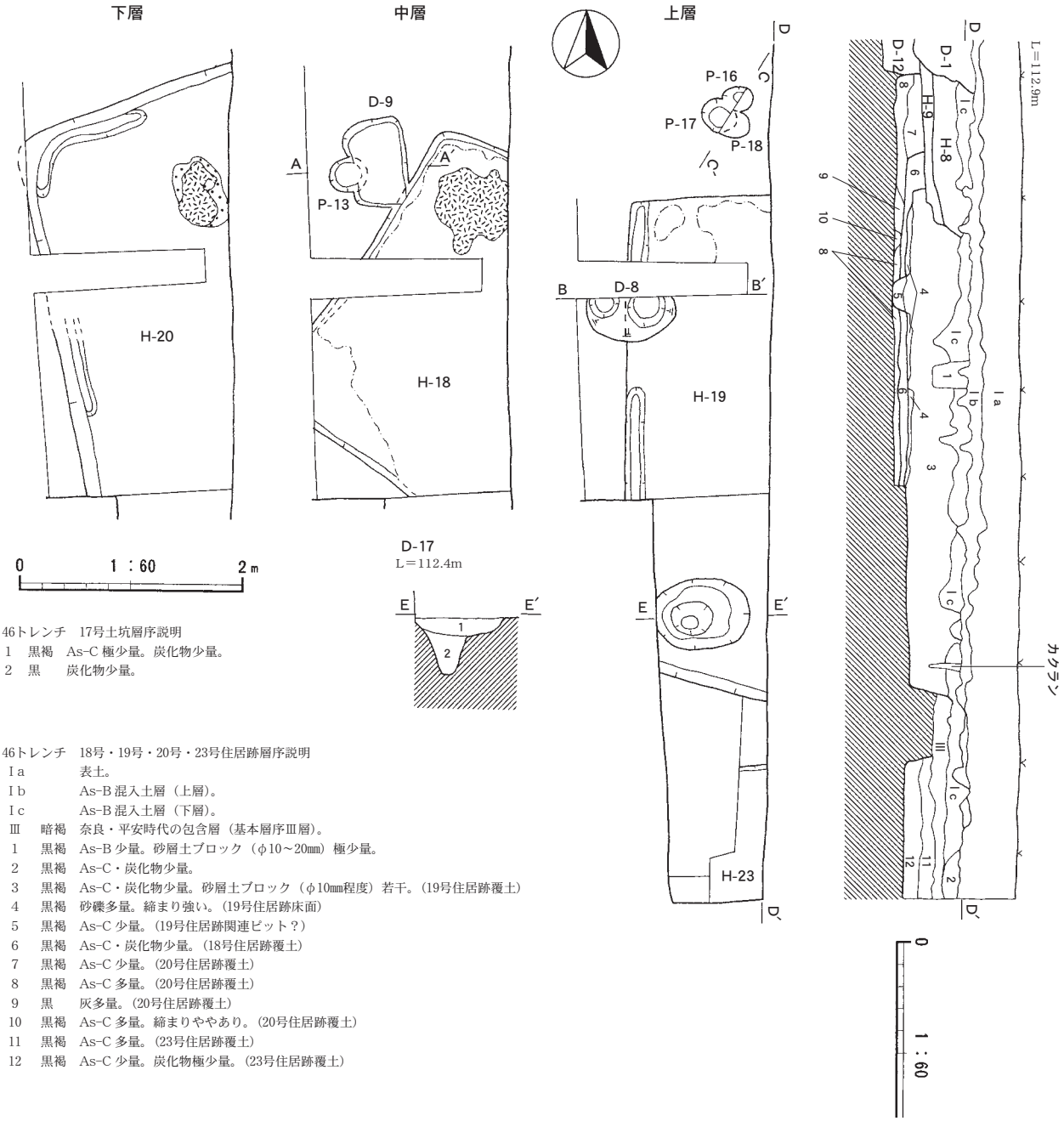
46トレンチ　8号土坑、19号住居跡層序説明
1　黒褐　砂礫少量。炭化物極少量。
2　黒褐　炭化物極少量。
3　黒褐　炭化物極少量。
4　黒褐　炭化物極少量。
5　黒褐　As-C・砂礫・炭化物少量。（19号住居跡覆土）
6　黒褐　細かい砂礫多量。締まり強い。（19号住居跡床面）
7　黒褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）極少量。（8号土坑覆土）
8　黒褐　As-C 多量。
9　黒褐　As-C 少量。
10　黒　細かい砂礫少量。
11　黒　砂層土ブロック（φ10～20㎜）少量。

P-16・17・18
L＝112.3m



0　1：60　2m

46トレンチ　16号・17号・18号ピット層序説明
1　黒褐　As-C 少量。
2　黒褐　As-C・砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。
3　暗褐　粘質。細かい砂層土多量。



46トレンチ　17号土坑層序説明
1　黒褐　As-C 極少量。炭化物少量。
2　黒　炭化物少量。

46トレンチ　18号・19号・20号・23号住居跡層序説明
Ⅰa　表土。
Ⅰb　As-B 混入土層（上層）。
Ⅰc　As-B 混入土層（下層）。
Ⅲ　暗褐　奈良・平安時代の包含層（基本層序Ⅲ層）。
1　黒褐　As-B 少量。砂層土ブロック（φ10～20㎜）極少量。
2　黒褐　As-C・炭化物少量。
3　黒褐　As-C・炭化物少量。砂層土ブロック（φ10㎜程度）若干。（19号住居跡覆土）
4　黒褐　砂礫多量。締まり強い。（19号住居跡床面）
5　黒褐　As-C 少量。（19号住居跡関連ピット？）
6　黒褐　As-C・炭化物少量。（18号住居跡覆土）
7　黒褐　As-C 少量。（20号住居跡覆土）
8　黒褐　As-C 多量。（20号住居跡覆土）
9　黒　灰多量。（20号住居跡覆土）
10　黒褐　As-C 多量。締まりややあり。（20号住居跡覆土）
11　黒褐　As-C 多量。（23号住居跡覆土）
12　黒褐　As-C 少量。炭化物極少量。（23号住居跡覆土）

Fig. 13　46トレンチ各遺構(2)

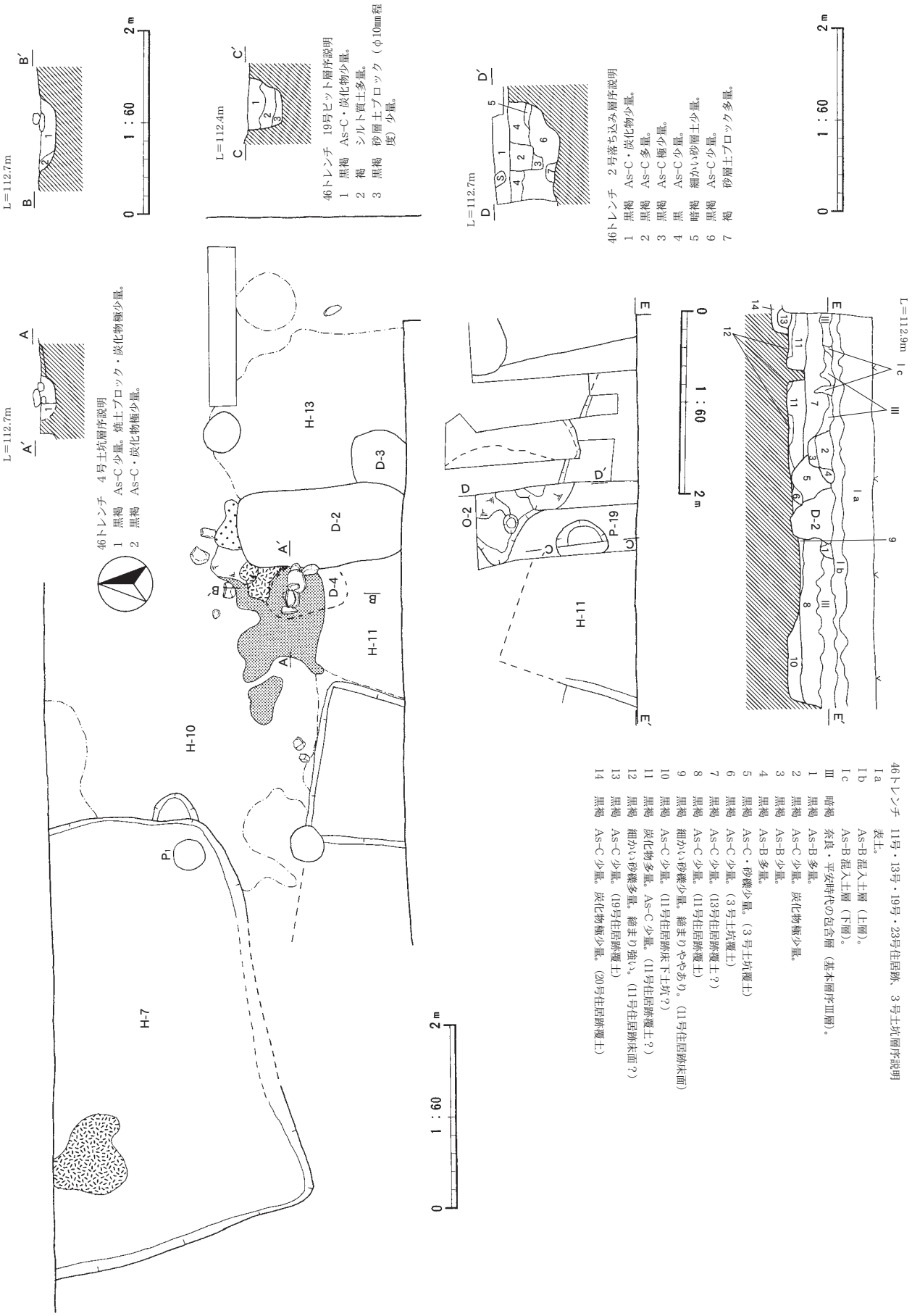
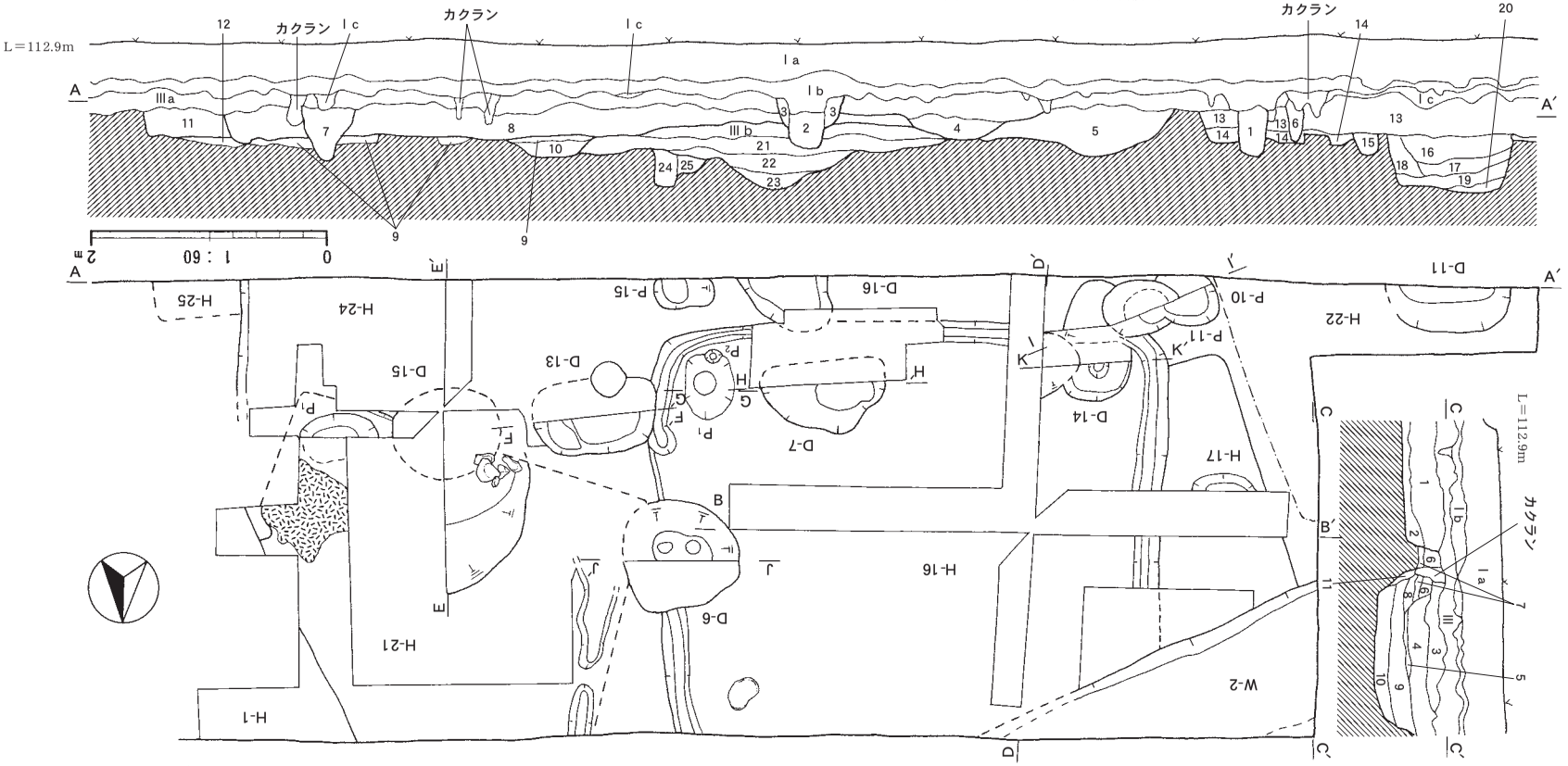


Fig. 14　46トレンチ各遺構(3)

Fig. 15　46トレンチ遺構(4)

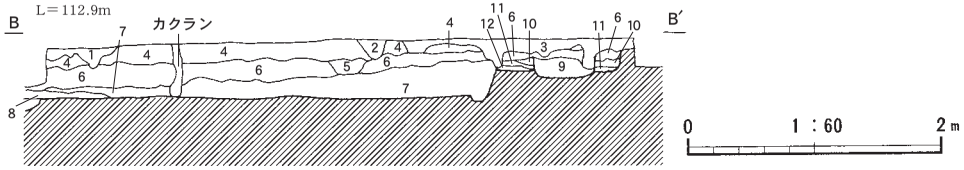
46トレンチ　22号住居跡、2号溝跡層序説明

Ⅰa　表土。
Ⅰb　As-B混入土層。
Ⅲ　暗褐　奈良・平安時代の包含層。As-B少量混入。
1　黒褐　As-C少量。(22号住居跡の覆土？)
2　黒褐　As-C少量。(22号住居跡の覆土？)
3　黒褐　As-C少量。(2号溝跡の覆土)
4　黒褐　As-C少量。炭化物極少量。(2号溝跡の覆土)
5　黒褐　As-C極少量。(2号溝跡の覆土)
6　黒褐　As-C・炭化物少量。(2号溝跡の覆土)
7　黒褐　As-C極少量。締まりややあり。(2号溝跡の覆土)
8　黒褐　As-C少量。炭化物極少量。(2号溝跡の覆土)
9　黒褐　As-C少量。(2号溝跡の覆土)
10　黒褐　As-C・炭化物少量。(2号溝跡の覆土)
11　黒褐　As-C少量。(2号溝跡の覆土)



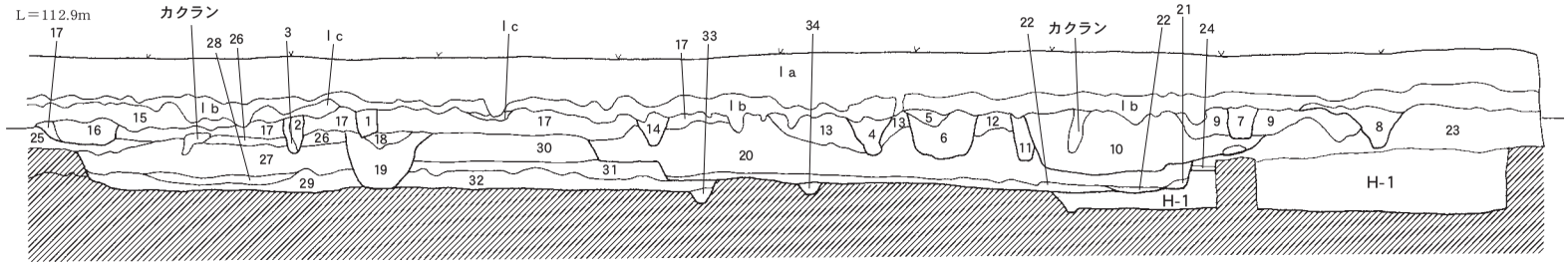
46トレンチ　16号・17号住居跡層序説明

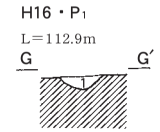
1　黒褐　炭化物少量。
2　黒褐　炭化物少量。
3　黒褐　As-C少量。
4　黒褐　As-C少量。炭化物極少量。
5　黒　As-C若干。
6　黒褐　As-C・細かい砂礫少量。炭化物極少量。締まりややあり。
7　黒褐　炭化物少量。As-C極少量。(16号住居跡覆土)
8　黒褐　細かい砂礫少量。(16号住居跡覆土)
9　黒褐　As-C少量。炭化物極少量。
10　黒褐　As-C極少量。(17号住居跡覆土)
11　黒褐　As-C少量。締まりややあり。(17号住居跡床面？)
12　黒　As-C若干。(17号住居跡床下掘り形？)



46トレンチ　22号・24号・25号住居跡、11号・16号土坑、15号ピット層序説明

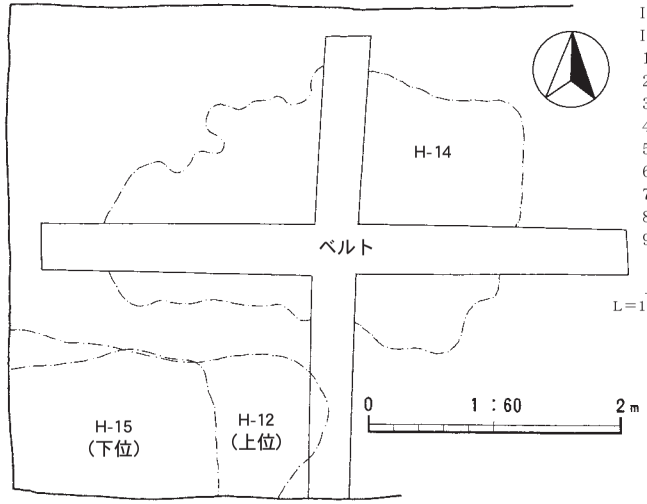
Ⅰa　表土。
Ⅰb　As-B混入土層（上層）。
Ⅰc　As-B混入土層（下層）。
Ⅲa　暗褐　奈良・平安時代の包含層。As-B少量混入。
Ⅲb　暗褐　奈良・平安時代の包含層。
1　黒褐　As-B多量。
2　黒褐　As-B少量。
3　黒褐　As-B多量。
4　黒褐　As-C少量。炭化物極少量。
5　黒褐　As-C少量。遺物を多く包含する。
6　黒褐　As-C少量。
7　黒褐　As-C極少量。
8　黒褐　As-C少量（24号住居跡覆土）
9　黒褐　As-C極少量。締まり強い。(24号住居跡床面)
10　黒褐　As-C少量。(24号住居跡床下土坑？)
11　黒褐　As-C少量。(25号住居跡覆土)
12　黒褐　細かい砂礫少量。締まりややあり。(25号住居跡床面)
13　黒褐　As-C少量。(22号住居跡の覆土？)
14　黒　As-C多量。締まりややあり。(22号住居跡の覆土？)
15　黒褐　砂質。As-C若干。
16　黒褐　As-C多量。砂層土ブロック（φ10～20mm）少量。(11号土坑覆土)
17　黒褐　As-C少量。(11号土坑覆土)
18　黒褐　As-C少量。砂層土ブロック（φ10mm程度）多量。(11号土坑覆土)
19　黒褐　As-C少量。(11号土坑覆土)
20　黒褐　砂層土ブロック（φ10～20mm）多量。(11号土坑覆土)
21　黒褐　As-C多量。
22　黒褐　As-C多量。
23　黒褐　砂礫少量。
24　黒褐　As-C少量。Ⅳ層に近い。
25　黒褐　As-C少量。

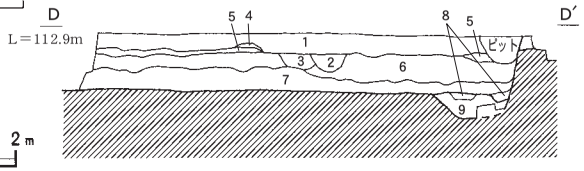


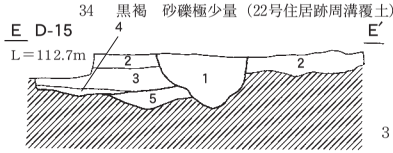


46トレンチ　16号住居跡Ｐ1層序説明
1　黒褐　炭化物・灰多量。砂層ブロック（φ５㎜程度）少量。

46トレンチ　１号・７号・16号住居跡、２号溝跡層序説明
Ⅰa　表土。
Ⅰb　As-B 混入土層（上層）。
Ⅰc　As-B 混入土層（下層）。
1　黒褐　As-B 多量。
2　黒褐　As-B 少量。
3　黒褐　As-B 多量。
4　黒褐　As-B 多量。
5　黒褐　As-B 少量。
6　黒褐　As-B 極少量。
7　黒褐　As-B 少量。
8　黒褐　As-B 少量。
9　黒褐　As-B 少量。
10　黒褐　As-C・砂礫少量。
11　黒褐　As-B 多量。
12　黒褐　As-B 少量。
13　黒褐　As-B・炭化物少量。
14　黒褐　As-B 少量。
15　黒褐　As-B・As-C 少量。
16　黒褐　As-C 少量、As-B 極少量。
17　黒褐　As-C 少量。
18　黒褐　As-B 極少量。
19　黒褐　As-C 少量。
20　黒褐　As-C・炭化物少量。（７号住居跡覆土）
21　黒褐　砂礫少量。（７号住居跡覆土）
22　黒褐　炭化物極少量。（７号住居跡覆土）
22　黒褐　As-C・粘質土ブロック（φ20～30㎜）極少量。（７号住居跡覆土）
23　灰黄褐As-B 若干混入。
24　黒褐　細かい砂礫少量。
25　黒褐　As-C 少量、炭化物極少量。
26　黒褐　As-C 少量。
27　黒褐　As-C 少量。（２号溝跡覆土）
28　黒　As-C 少量。（２号溝跡覆土）
29　黒　As-C・炭化物少量。砂層ブロック（φ20～30㎜）極少量。（２号溝跡覆土）
30　黒褐　As-C 少量。炭化物極少量。（16号住居跡覆土）
31　黒褐　As-C・細かい砂礫少量。締まりややあり。（16号住居跡覆土）
32　黒褐　As-C 極少量。（16号住居跡覆土）
33　黒褐　細かい砂礫少量。（16号住居跡周溝覆土）
34　黒褐　砂礫極少量（22号住居跡周溝覆土）

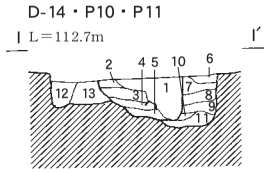


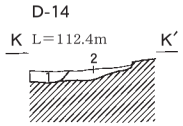


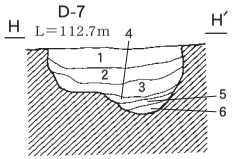


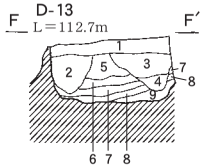
46トレンチ　16号住居跡層序説明
1　黒褐　As-C 少量。炭化物極少量。
2　黒　As-C・炭化物少量。
3　黒　As-C 若干。
4　黒褐　細かい砂礫少量。As-C 若干。
5　黒褐　細かい砂礫少量。As-C 極少量。
6　黒褐　細かい砂礫・As-C 少量。炭化物極少量。締まりややあり。
7　黒褐　炭化物少量。As-C 極少量。
8　黒褐　As-C 極少量。
9　黒褐　砂層ブロック（φ10～20㎜）少量。

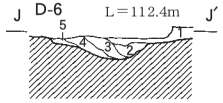
46トレンチ　15号土坑層序説明
1　黒褐　As-C・炭化物少量。（15号土坑覆土）
2　黒褐　As-C 多量。締まりややあり。
3　黒褐　As-C 少量。炭化物極少量。（21号住居跡覆土）
4　黒褐　細かい砂礫少量。締まり強い。（21号住居跡床面）
5　黒褐　炭化物少量。As-C 極少量。（21号住居跡床下土坑？）











46トレンチ　14号土坑・10号・11号ピット層序説明
1　黒褐　As-C 少量。
2　暗褐　As-C・シルト質土少量。
3　黒褐　やや砂質。As-C 少量。
4　黒褐　As-C 極少量。
5　黒褐　シルト質土少量。
6　黒褐　As-C 少量。
7　黒褐　シルト質土少量。As-C 極少量。締まりややあり。
8　黒褐　As-C 極少量。締まり強い。
9　黒　As-C 極少量。締まり強い。
10　暗褐　シルト質土多量。締まりややあり。
11　黒褐　シルト質土ブロック（φ10㎜程）多量。締まりややあり。
12　黒褐　As-C 極少量。
13　暗褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）多量。

46トレンチ　14号土坑層序説明
1　黒褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）少量。
2　暗褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）多量。

46トレンチ　７号土坑層序説明
1　黒褐　As-C 多量。
2　黒褐　As-C 少量。炭化物若干。
3　黒褐　As-C 少量。炭化物若干。
4　暗褐　砂層の粘質土極少量。締まりややあり。
5　黒褐　砂層土ブロック（φ10～30㎜）多量。
6　黒褐　砂層の粘質土少量。締まりややあり。

46トレンチ　13号土坑層序説明
1　黒褐　As-C 多量。締まりややあり。
2　黒褐　As-C 少量。
3　黒褐　As-C 多量。
4　黒褐　As-C 少量。
5　黒褐　As-C 少量。
6　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。
7　暗褐　砂層土ブロック（φ10㎜程度）多量。
8　黒　砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。
9　黒　砂層土ブロック（φ10㎜程度）多量。

46トレンチ　６号土坑層序説明
1　黒褐　焼土・炭化物若干。
2　黒褐　焼土・炭化物若干。
3　黒褐　粘質土少量。炭化物極少量。
4　黒褐　炭化物極少量。
5　黒褐　粘質土多量。

Fig. 16　46トレンチ各遺構(5)

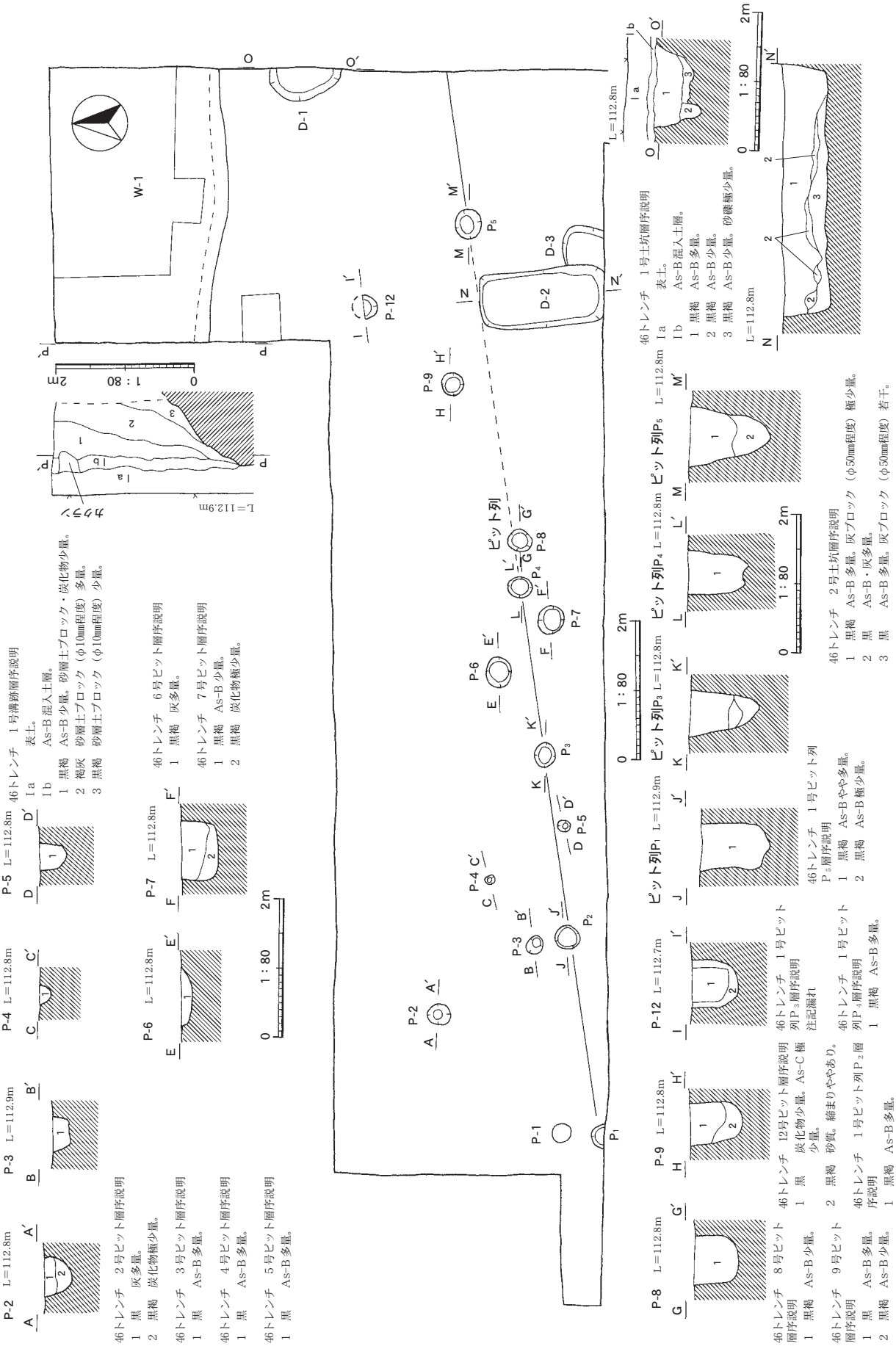
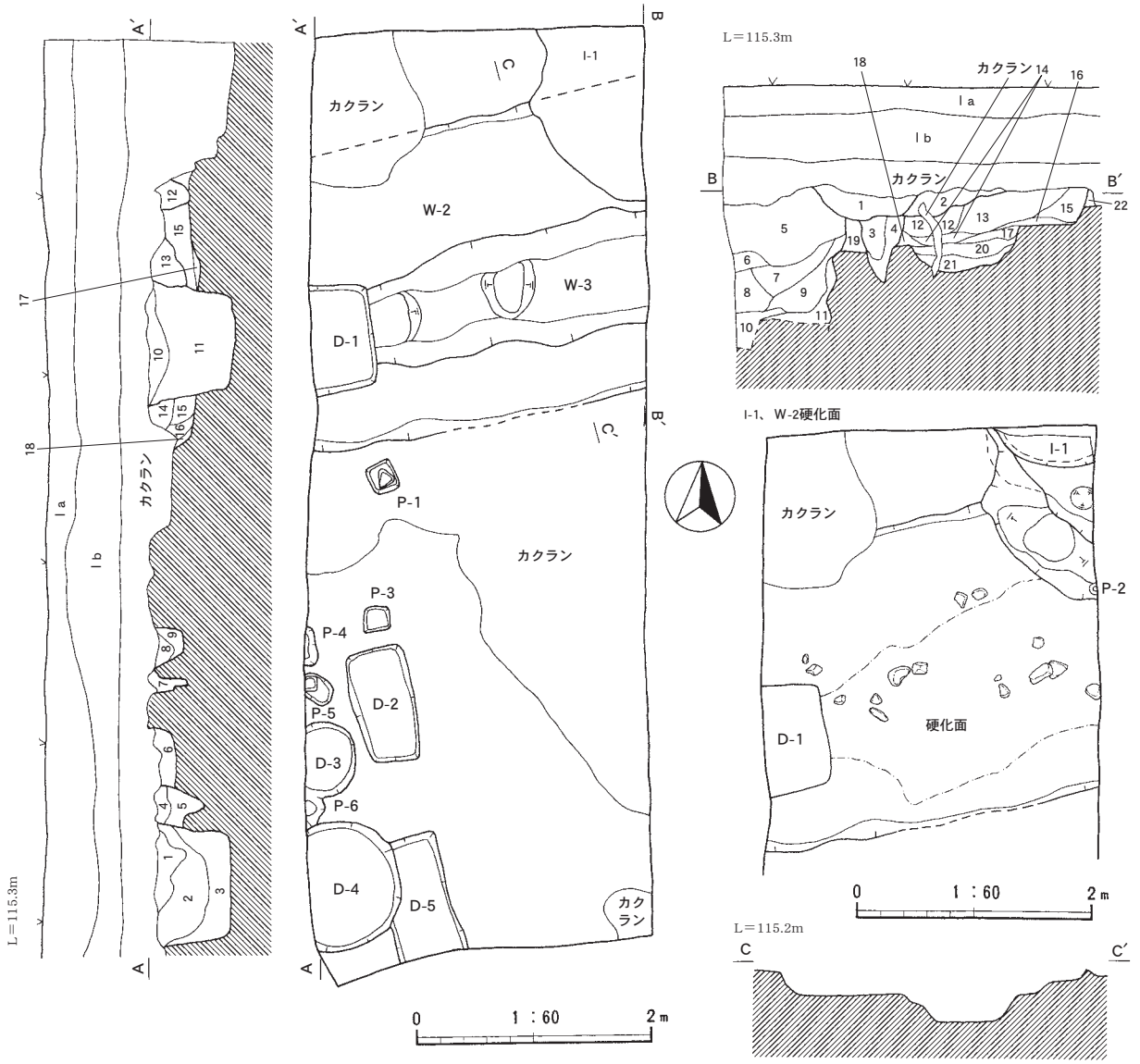


Fig. 17　46トレンチ各遺構(6)

47トレンチ　トレンチ東壁（北端）層序説明

Ⅰa		表土。
Ⅰb		客土。
1	黒褐	シルト質土多量。（1号溝跡覆土）
2	黒褐	シルト質土少量。
3	黒褐	As-C・As-B 少量。
4	暗褐	As-C・As-B 少量。
5	黒褐	As-C・As-B 少量。砂層土ブロック（φ10㎜程度）（1号井戸跡覆土）
6	黒	炭化物多量。As-C 少量。（1号井戸跡覆土）
7	黒褐	As-C 少量。（1号井戸跡覆土）
8	黒褐	灰・炭化物少量。（1号井戸跡覆土）
9	黒褐	As-C・細かい砂層土少量。（1号井戸跡覆土）
10	黒褐	As-C・炭化物少量。（1号井戸跡覆土）
11	黒褐	砂層土ブロック（φ10～50㎜）多量。（1号井戸跡覆土）
12	黒褐	As-C 少量。砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。締まりややあり。（2号溝跡覆土）
13	黒褐	As-C・砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。締まりややあり。（2号溝跡覆土）
14	黒褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。締まりややあり。（2号溝跡覆土）
15	黒褐	As-C・砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。締まりややあり。（2号溝跡覆土）
16	黒褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。締まり強い。（2号溝跡覆土）
17	黒褐	砂層土ブロック（φ10～30㎜程度）多量。締まり強い。（2号溝跡覆土）
18	暗褐	ややシルト質。砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。締まりややあり。（2号溝跡覆土）
19	暗褐	As-C・細かい砂層土少量。（2号溝跡覆土）
20	黒褐	As-C・砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。締まり強い。（3号溝跡覆土）
21	黒褐	砂層土ブロック（φ10～30㎜程度）多量。締まり強い。（3号溝跡覆土）
22	黒褐	As-C・砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。



47トレンチ　トレンチ西壁層序説明

Ⅰa		表土。
Ⅰb		客土。
1	暗褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。（4号土坑覆土）
2	暗褐	砂質。砂層土ブロック（φ10～30㎜程度）少量。（4号土坑覆土）
3	黒褐	砂質。砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。（4号土坑覆土）
4	暗褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。（6号ピット覆土）
5	暗褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）若干。（6号ピット覆土）
6	暗褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。（3号土坑覆土）
7	暗褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。（5号ピット覆土）
8	暗褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。（4号ピット覆土）
9	暗褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。（4号ピット覆土）
10	暗褐	As-C・As-B 少量。砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。（1号土坑覆土）
11	黒褐	As-C・As-B 少量。砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。（1号土坑覆土）
12	黒褐	As-C 少量。砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。
13	黒褐	シルト質土多量。（1号溝跡覆土）
14	黒褐	As-C 少量。砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。（2号溝跡覆土）
15	黒褐	砂層土ブロック（φ10㎜程度）多量。As-C 少量。締まり強い。（2号溝跡覆土）
16	黒褐	やや砂質。砂礫極少量。（2号溝跡覆土）
17	黒褐	砂質。（2号溝跡覆土）
18	にぶい黄褐	砂質。（2号溝跡覆土？）

Fig. 18　47トレンチ各遺構

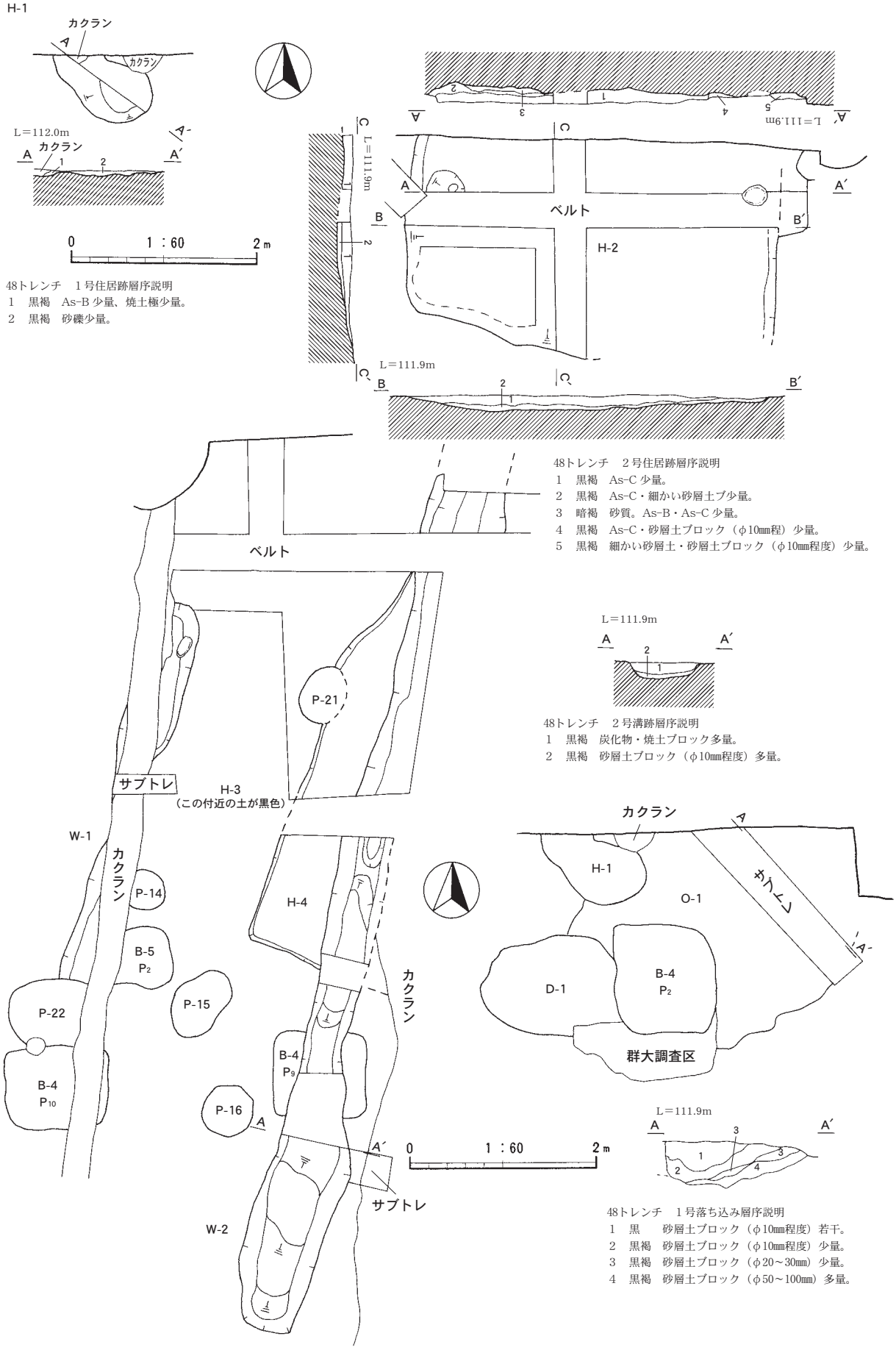


Fig. 19　48トレンチ各遺構(1)

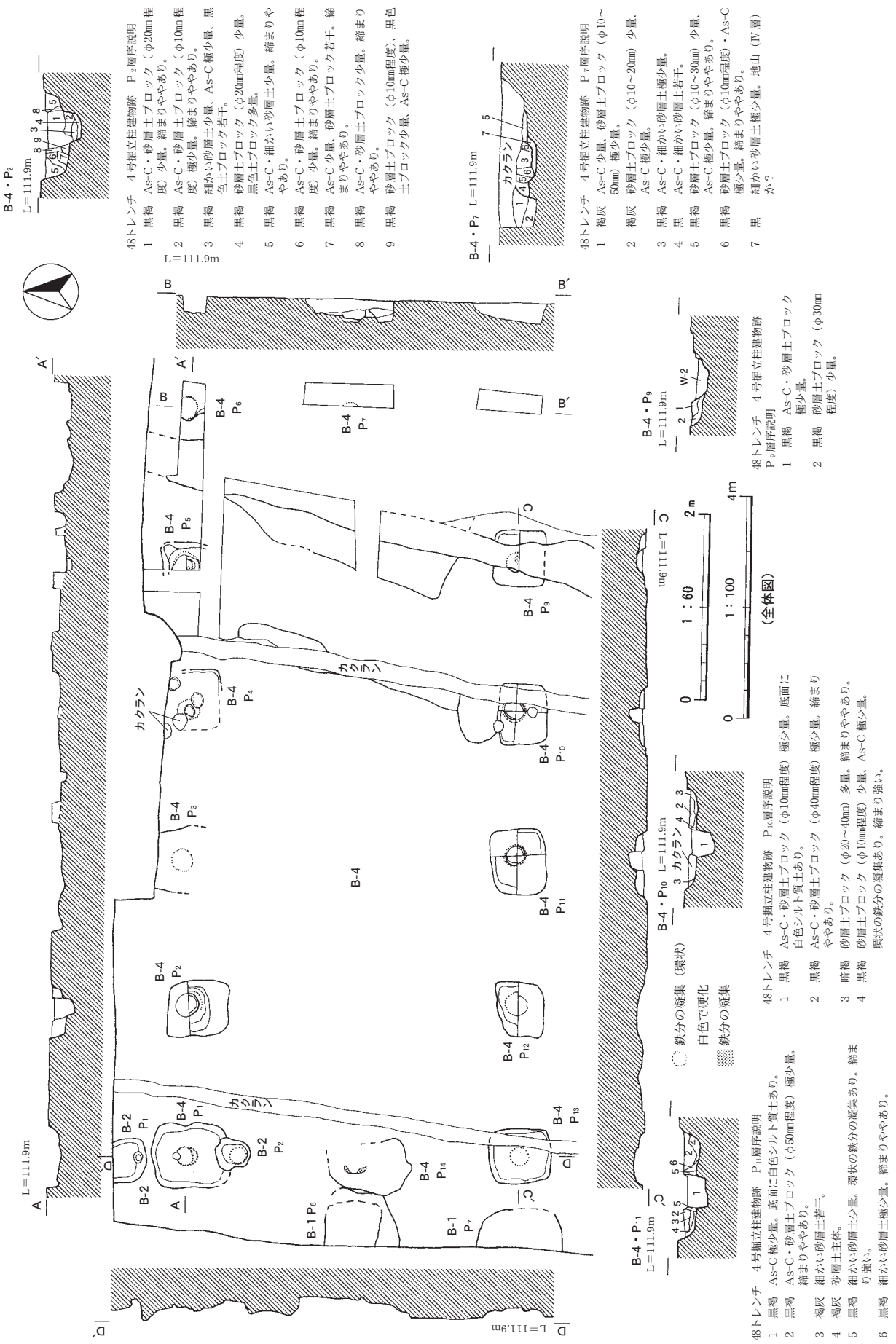
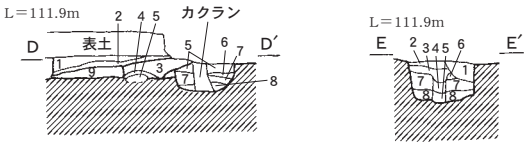


Fig. 20　48トレンチ各遺構(2)

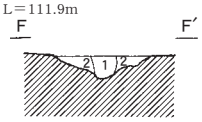
48トレンチ　5号掘立柱建物跡　P7層序説明
1　黒褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）・As-C 少量。
2　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜程度）・細かい砂層土多量。
3　黒褐　As-C 多量。
4　黄褐　細かい砂層土多量。締まりややあり。
5　黒褐　As-C 多量、砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少。締まりややあり。
6　黒褐　細かい砂層土少量、As-C 極少量。締まりややあり。
7　黒褐　As-C 多量、細かい砂層土少量。締まりややあり。
8　黒褐　As-C 極少量。締まりややあり。
9　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜）多量、As-C 少量。

48トレンチ　5号掘立柱建物跡　P8層序説明
1　褐灰　As-B 若干、As-C 少量。
2　黒褐　As-C 少量。砂層土ブロック（φ10～40㎜）・焼土若干。締まり強い。
3　黒褐　As-C・砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。締まりややあり。
4　黒褐　As-C・細かい砂層土若干。
5　黒褐
6　黒褐　As-C・細かい砂層土少量。締まりややあり。
7　黒褐　細かい砂層土少量、As-C 極少量。
8　黒褐　As-C 極少量。

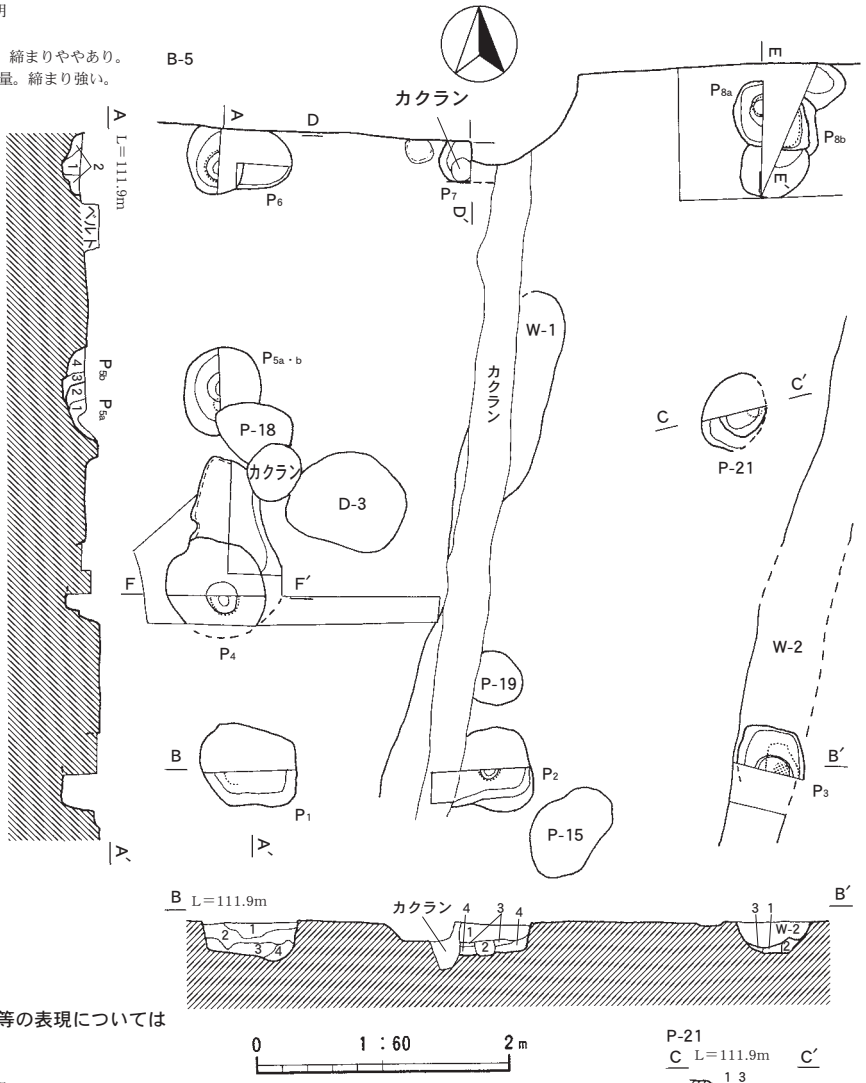


48トレンチ　5号掘立柱建物跡　P6層序説明
1　黒褐　As-C・細かい砂層土若干。
2　黒褐　細かい砂層土少量、As-C 極少量。締まりややあり。
3　黒褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）多量。締まり強い。

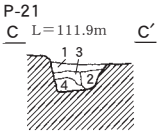
48トレンチ　5号掘立柱建物跡
P5層序説明
1　黒褐　細かい砂層土極少量、As-C 若干。
2　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜）少量。締まり強い。
3　黒褐　細かい砂層土極少量、As-C 若干。
4　黒褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）多量。締まり強い。



48トレンチ　5号掘立柱建物跡
P4層序説明
1　黒褐　As-C 少量、細かい砂層土極少量。
2　黒褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）多量、As-C 少量。締まりややあり。



※B-5ピット中の鉄分の凝集等の表現については
P.39 Fig.20に準ずる。



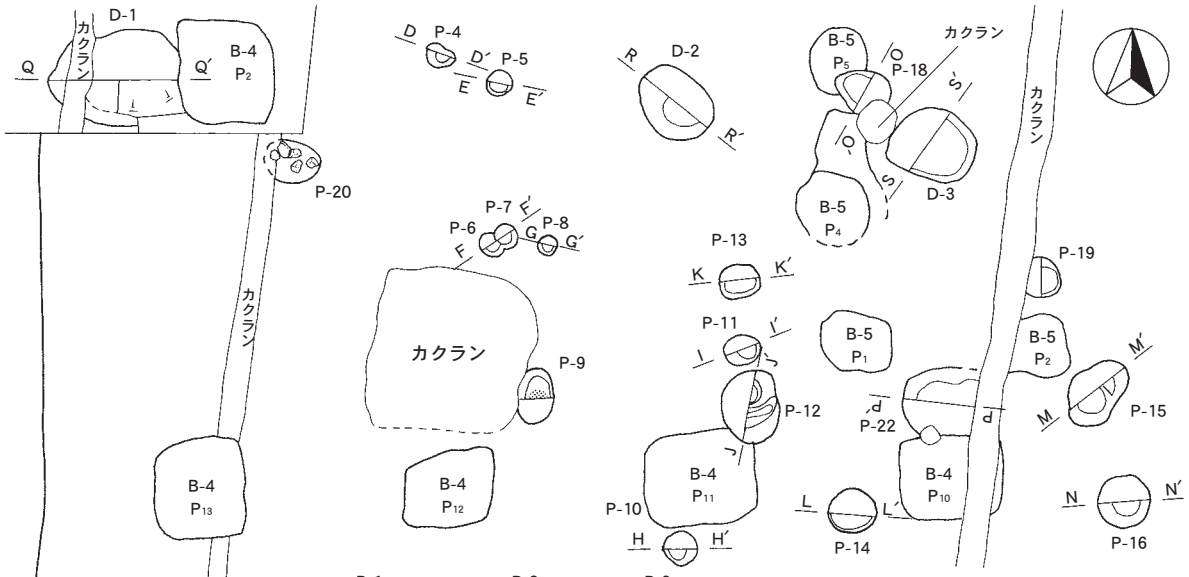
48トレンチ　5号掘立柱建物跡　P1層序説明
1　黒褐　砂層ブロック（φ10～30㎜）多量、As-C 少量。締まりややあり。
2　黒褐　As-C 多量。締まりややあり。
3　黒　　砂層ブロック（φ10㎜程度）・As-C 少量。締まりややあり。
4　黒　　細かい砂層土少量。As-C 若干。締まりややあり。

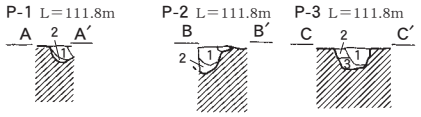
48トレンチ　5号掘立柱建物跡　P2層序説明
1　黒褐　As-C 多量。締まりややあり。
2　黒褐　As-C 多量、細かい砂層土極少量。締まりややあり。
3　黒褐　As-C 少量。締まりややあり。
4　黒褐　As-C 少量。締まりややあり。

48トレンチ　5号掘立柱建物跡　P3層序説明
1　黒褐　As-B 若干。
2　黒褐　細かい砂層土少量、As-C 若干。締まりややあり。
3　黒　　砂層土ブロック（φ10㎜）。締まりややあり。

48トレンチ　21号ピット層序説明
1　黒褐　As-C 少量、細かい砂層土若干。締まり強い。
2　暗褐　As-C 少量、細かい砂層土若干。締まりややあり。
3　暗褐　砂層土ブロック（φ40㎜）多量。黒色土ブロック混入。締まりややあり。
4　暗褐　砂層土ブロック（φ40～100㎜）多量。締まりややあり。

Fig. 21　48トレンチ各遺構(3)

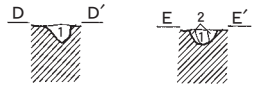




48トレンチ　1号ピット層序説明
1　黒褐　As-C 多量、砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。
2　暗褐　細かい砂層土多量。

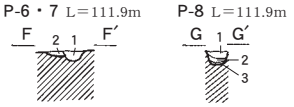
48トレンチ　2号ピット層序説明
1　黒褐　細かい砂層土・砂層ブロック少量。
2　暗褐　細かい砂層土・砂層ブロック多量。

48トレンチ　3号ピット層序説明
1　黒褐　As-C 少量。
2　黒褐　細かい砂層土多量、As-C 極少量。締まりややあり。
3　黒　　砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。締まりややあり。



48トレンチ　4号ピット層序説明
1　黒褐　細かい砂層土多量。

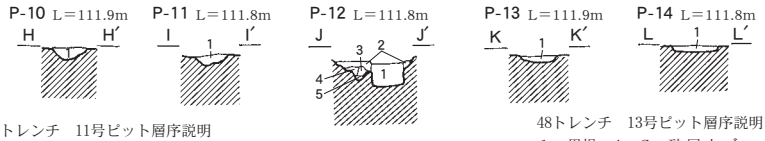
48トレンチ　5号ピット層序説明
1　黒褐　As-C・細かい砂層土極少量。
2　暗褐　細かい砂層土少量。



48トレンチ　6号・7号ピット層序説明
1　暗褐　細かい砂層土多量。
2　黒褐　As-C 少量。

48トレンチ　8号ピット層序説明
1　黒褐　As-C・細かい砂層土少量。
2　褐　　細かい砂層土主体。
3　暗褐　細かい砂層土多量。

48トレンチ　10号ピット層序説明
1　黒褐　As-C・砂層土ブロック（φ10～30㎜）少量。

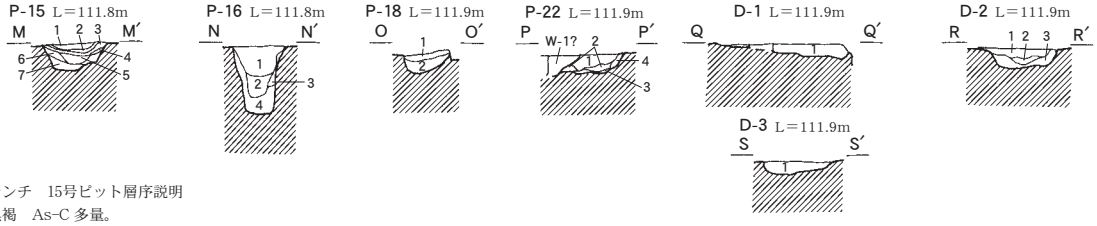


48トレンチ　11号ピット層序説明
1　黒褐　As-C・砂層土ブロック（φ10～30㎜）少量。

48トレンチ　12号ピット層序説明
1　黒褐　As-C・砂層土ブロック（φ10㎜）極少量。底面に白色シルト質土。
2　黒褐　As-C 極少量。締まりややあり。
3　灰黄褐砂層土主体。締まりややあり。
4　暗褐　細かい砂層土極少量・黒色粘質土ブロック包含。締まりややあり。
5　黒褐　As-C・細かい砂層土極少量。

48トレンチ　13号ピット層序説明
1　黒褐　As-C・砂層土ブロック（φ10～30㎜）少量。

48トレンチ　14号ピット層序説明
1　褐　　砂層土主体。As-C 若干。



48トレンチ　15号ピット層序説明
1　黒褐　As-C 多量。
2　黒　　灰多量。
3　黒褐　細かい砂層土・砂層ブロック（φ10㎜程度）多量。
4　黄褐　砂層土主体。
5　黒褐　砂層土少量。
6　黒褐　砂層土少量。
7　黒褐　As-C・砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。

48トレンチ　16号ピット層序説明
1　黒　　As-C 多量。
2　黒　　砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。
3　黒　　細かい砂層土極少量。
4　黒　　砂層土ブロック（φ20～30㎜程度）少量。

48トレンチ　18号ピット層序説明
1　黒褐　砂質。As-C 少量。
2　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。

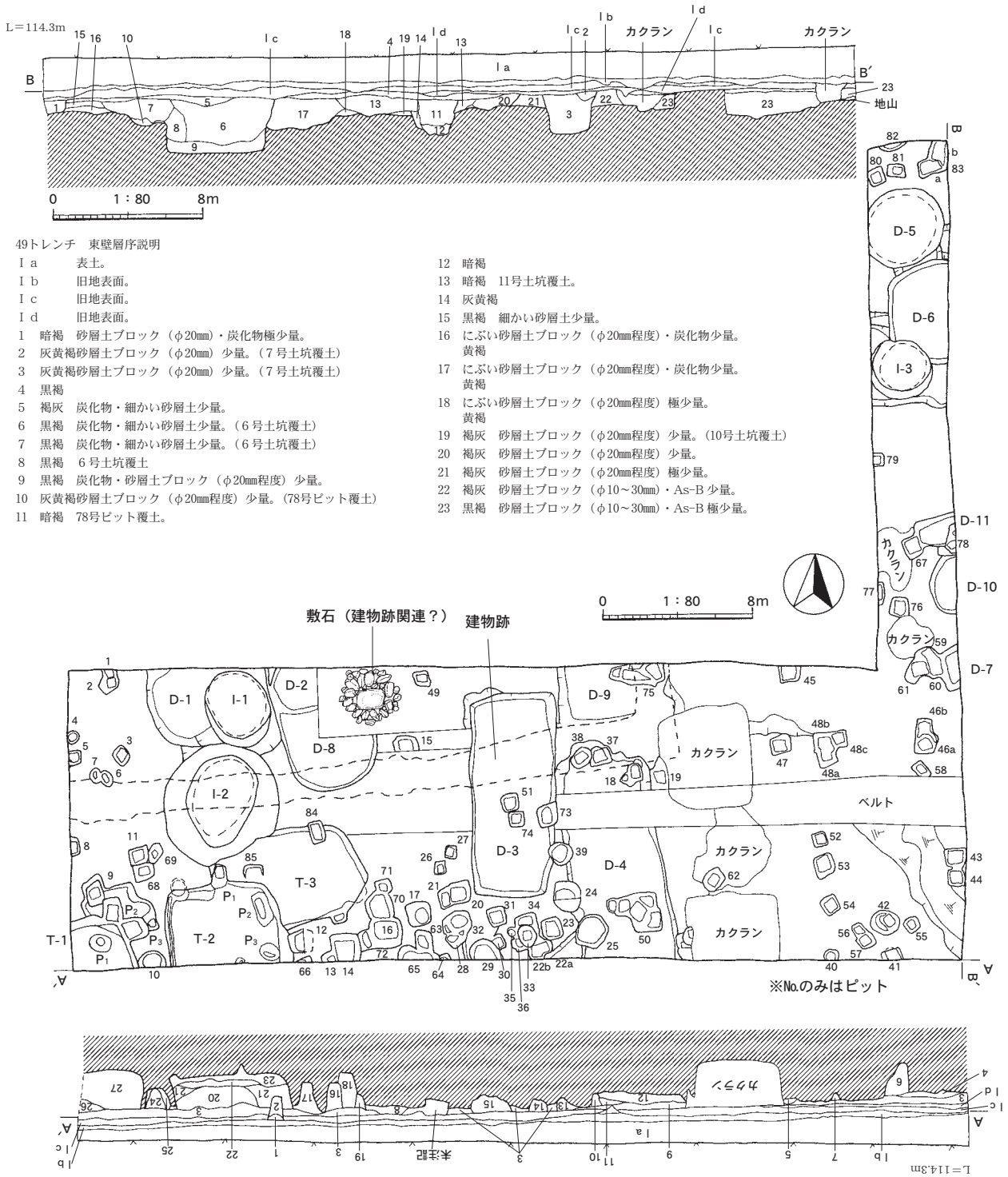
48トレンチ　22号ピット層序説明
1　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。
2　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。
3　褐　　細かい砂層土多量。
4　褐　　細かい砂層土多量。

48トレンチ　1号土坑層序説明
1　黒褐　砂層土ブロック（φ10～30㎜）少量、焼土若干。

48トレンチ　2号土坑層序説明
1　暗褐　砂質。As-C 少量。
2　黒褐　砂質。As-C 少量。
3　黒褐　砂層土ブロック少量、焼土若干。

48トレンチ　3号土坑層序説明
1　黒褐　砂質。As-C 少量、炭化物極少量。

Fig. 22　48トレンチ各遺構(4)



49トレンチ　東壁層序説明

Ⅰa　表土。
Ⅰb　旧地表面。
Ⅰc　旧地表面。
Ⅰd　旧地表面。
1　暗褐　砂層土ブロック（φ20㎜）・炭化物極少量。
2　灰黄褐砂層土ブロック（φ20㎜）少量。（７号土坑覆土）
3　灰黄褐砂層土ブロック（φ20㎜）少量。（７号土坑覆土）
4　黒褐
5　褐灰　炭化物・細かい砂層土少量。
6　黒褐　炭化物・細かい砂層土少量。（６号土坑覆土）
7　黒褐　炭化物・細かい砂層土少量。（６号土坑覆土）
8　黒褐　６号土坑覆土
9　黒褐　炭化物・砂層土ブロック（φ20㎜程度）少量。
10　灰黄褐砂層土ブロック（φ20㎜程度）少量。（78号ピット覆土）
11　暗褐　78号ピット覆土。
12　暗褐
13　暗褐　11号土坑覆土。
14　灰黄褐
15　黒褐　細かい砂層土少量。
16　にぶい砂層土ブロック（φ20㎜程度）・炭化物少量。黄褐
17　にぶい砂層土ブロック（φ20㎜程度）・炭化物少量。黄褐
18　にぶい砂層土ブロック（φ20㎜程度）極少量。黄褐
19　褐灰　砂層土ブロック（φ20㎜程度）少量。（10号土坑覆土）
20　褐灰　砂層土ブロック（φ20㎜程度）少量。
21　褐灰　砂層土ブロック（φ20㎜程度）極少量。
22　褐灰　砂層土ブロック（φ10～30㎜）・As-B 少量。
23　黒褐　砂層土ブロック（φ10～30㎜）・As-B 極少量。

49トレンチ　南壁層序説明

Ⅰa　表土。
Ⅰb　旧地表面。
Ⅰc　旧地表面。
Ⅰd　旧地表面。
1　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。
2　暗褐　砂礫・砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。
3　黒褐　As-B 少量。砂層ブロック（φ10～30㎜程度）極少量。炭化物若干。締まり強い。
4　黒褐　砂礫・砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。
5　暗褐　砂層土少量。
6　黒褐　細かい砂層土・砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。（41号ピット覆土）
7　黒褐　細かい砂層土極少量。（40号ピット覆土）
8　黒褐　砂層土ブロック（φ10～20～20㎜）多量。締まり強い。
9　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。締まり強い。
10　黒褐　細かい砂層土多量。（４号土坑覆土）
11　黒褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）少量。（４号土坑覆土）
12　黒褐　砂層土ブロック（φ10～30㎜）多量。（４号土坑覆土）
13　黒褐　細かい砂層土・砂層土ブロック（φ10～20㎜）多量。締まり強い。
14　黒褐　細かい砂層土多量。砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。締まり強い。（54号ピット覆土）
15　黒褐　砂層土ブロック（φ10～30㎜）多量。締まりややあり。（29号ピット覆土）
16　暗褐　砂層土ブロック（φ10～20㎜）極少量。（13号ピット覆土）
17　黒褐　細かい砂層土極少量。砂層土ブロック（φ10～20㎜）極少量。（66号ピット覆土）
18　黒褐　砂層土ブロック（φ10～40㎜）極少量。（14号ピット覆土）
19　黒褐　砂層土少量。
20　暗褐　砂層土ブロック（φ10～30㎜）多量。炭化物少量。（２号竪穴状遺構覆土）
21　暗褐　砂層土ブロック（φ10～30㎜）・細かい砂層土多量。（２号竪穴状遺構覆土）
22　暗褐　炭化物多量。砂層土ブロック（φ10㎜程度）少量。（２号竪穴状遺構覆土）
23　暗褐　砂層土ブロック（φ10～100㎜）多量。（２号竪穴状遺構覆土）
24　暗褐　細かい砂層土多量。
25　総社砂層か
26　黒褐　砂層土ブロック（φ10㎜程度）極少量。（１号竪穴状遺構覆土）
27　黒褐　砂層土ブロック（φ10～50㎜）多量。（１号竪穴状遺構覆土）

Fig. 23　49トレンチ各遺構

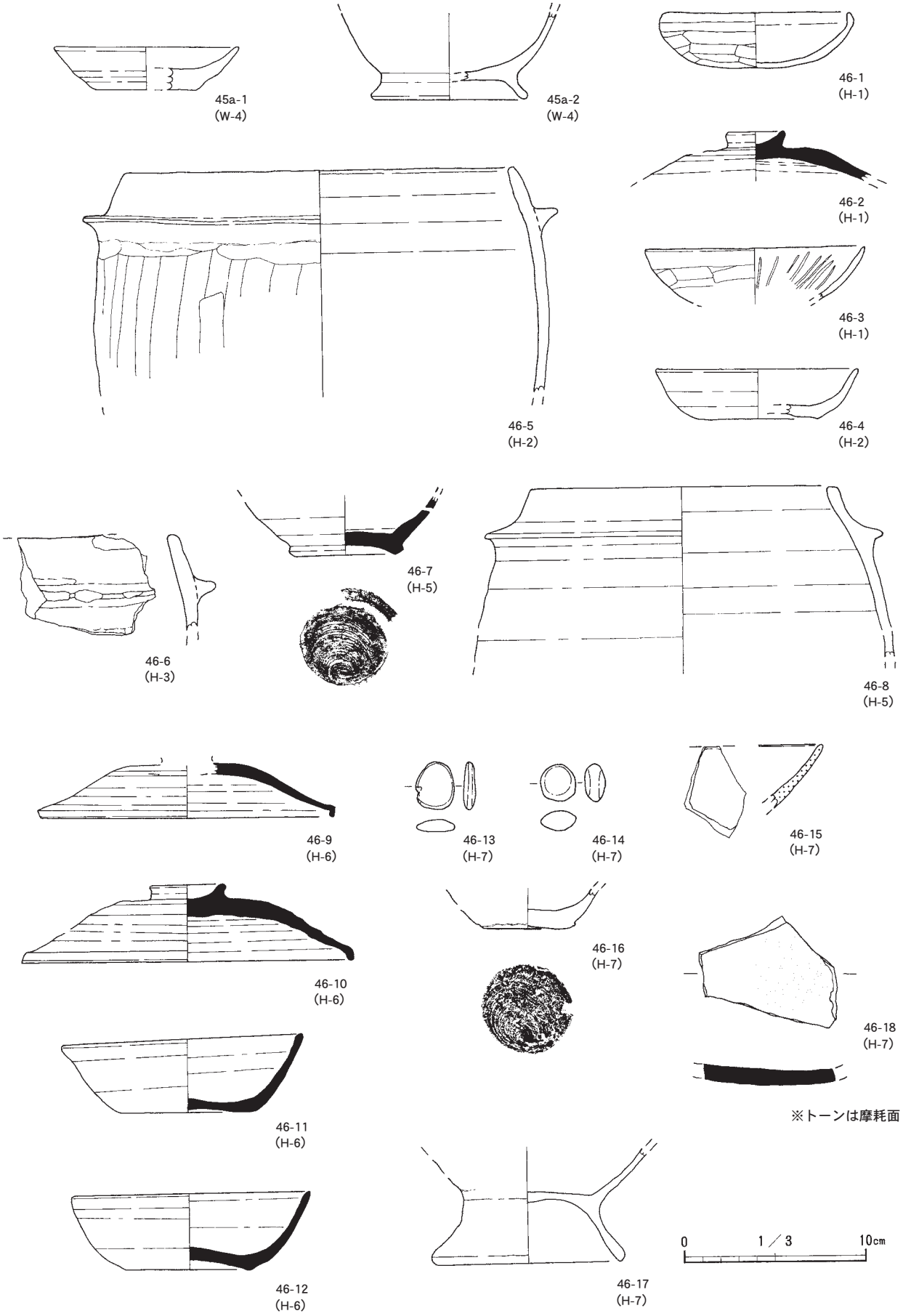


Fig. 24　遺物実測図（45ａ・ｂトレンチ、46トレンチ①）

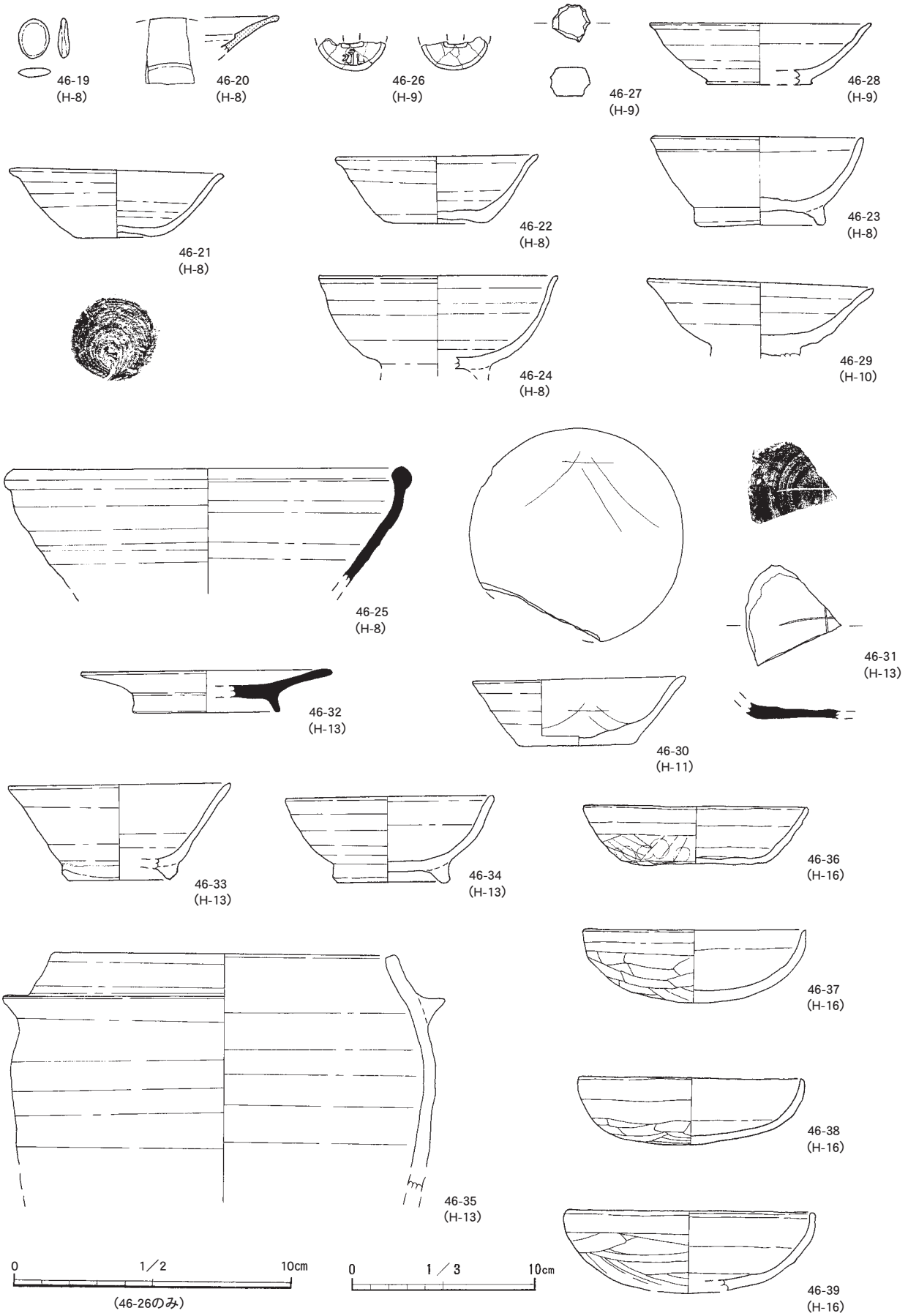


Fig. 25　遺物実測図（46トレンチ②）

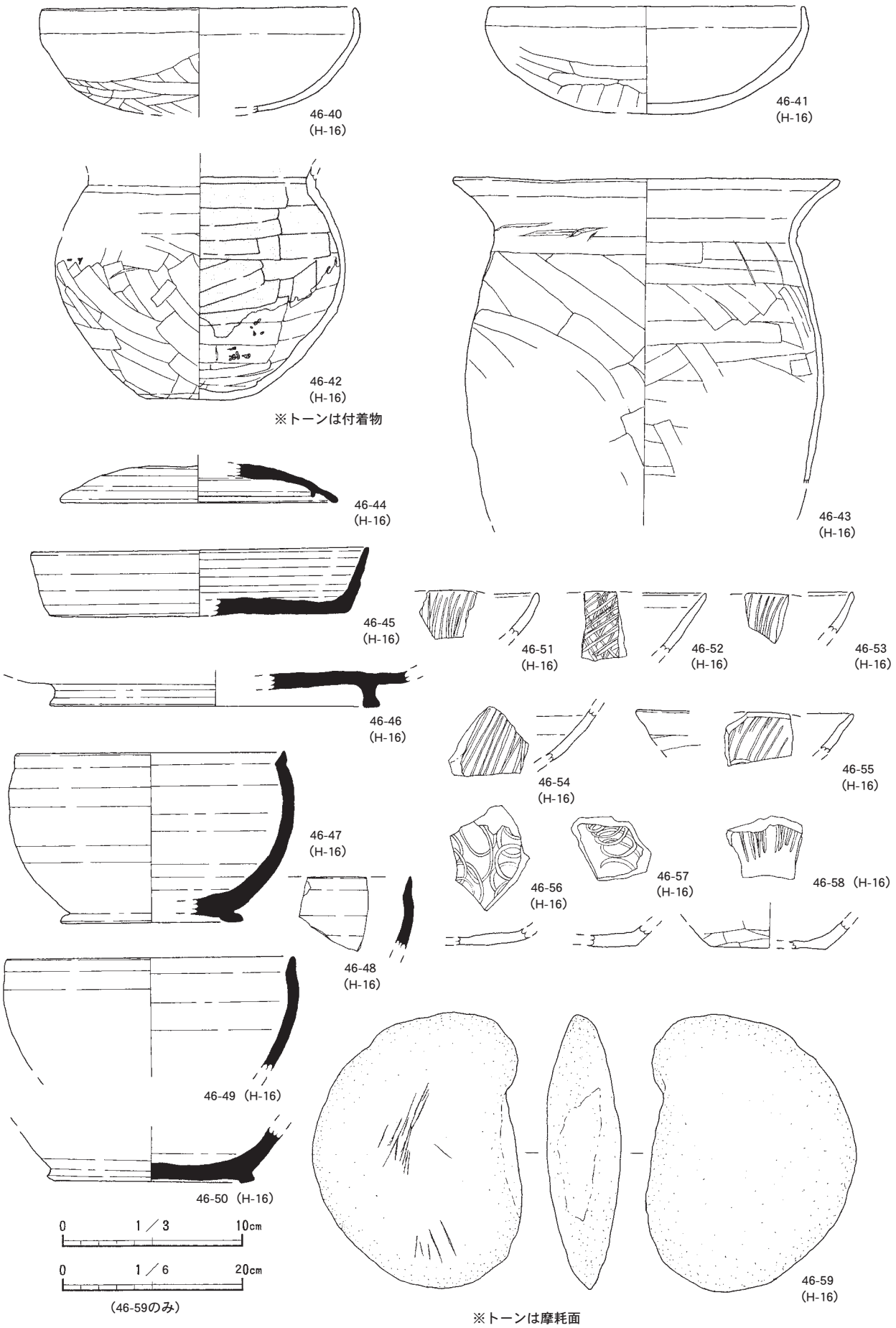


Fig. 26　遺物実測図（46トレンチ③）

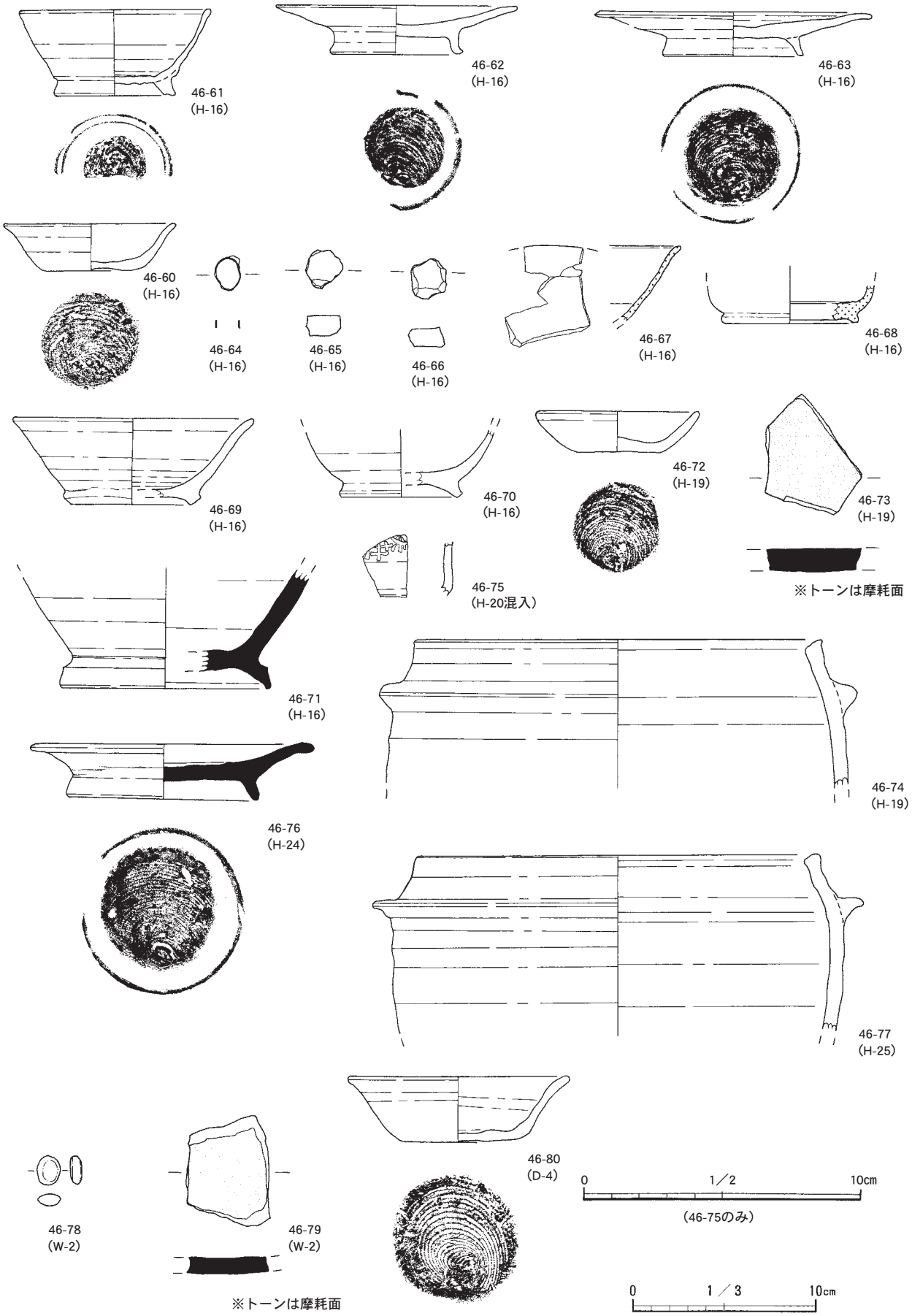


Fig. 27　遺物実測図（46トレンチ④）

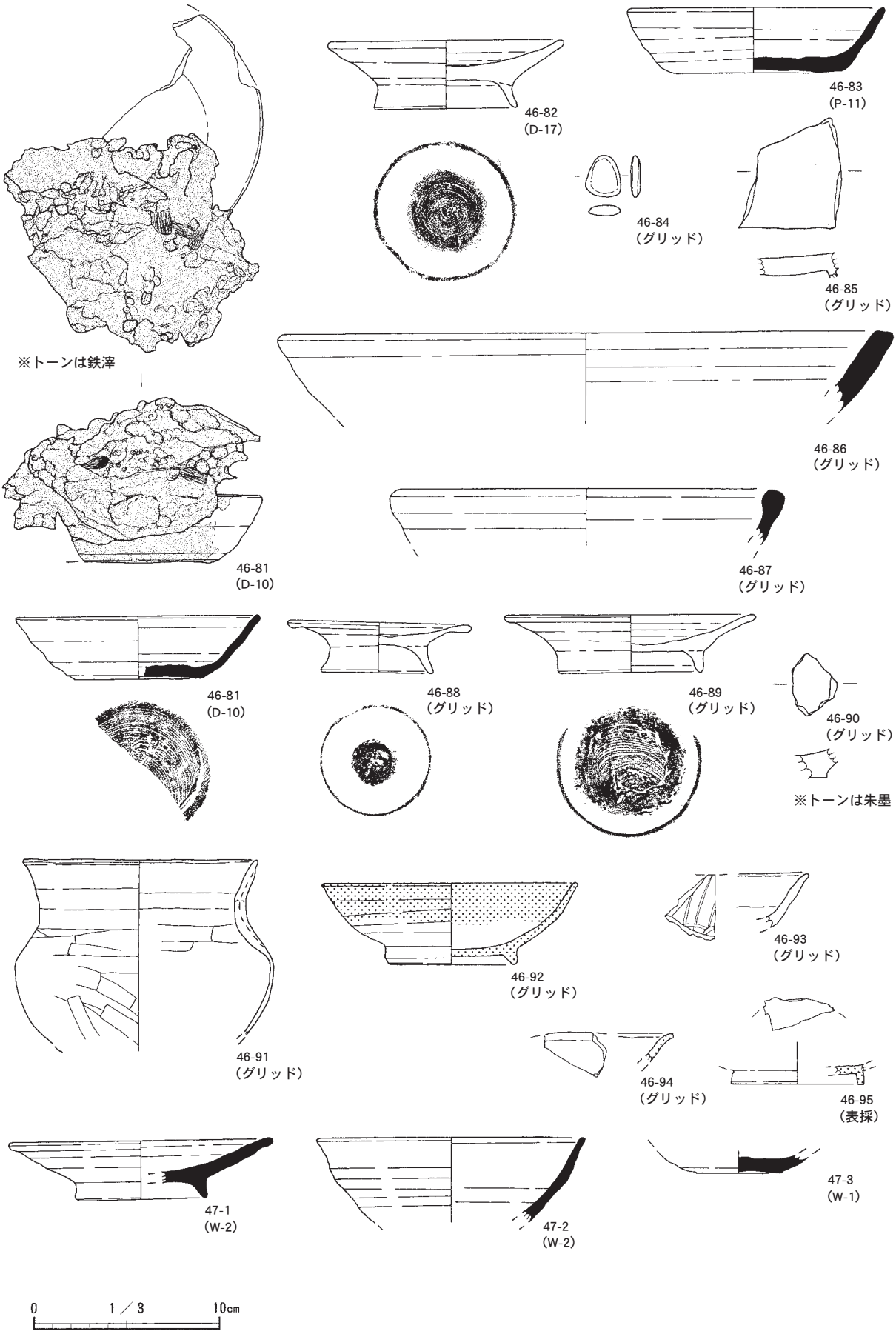


Fig. 28　遺物実測図（46トレンチ⑤、47トレンチ）

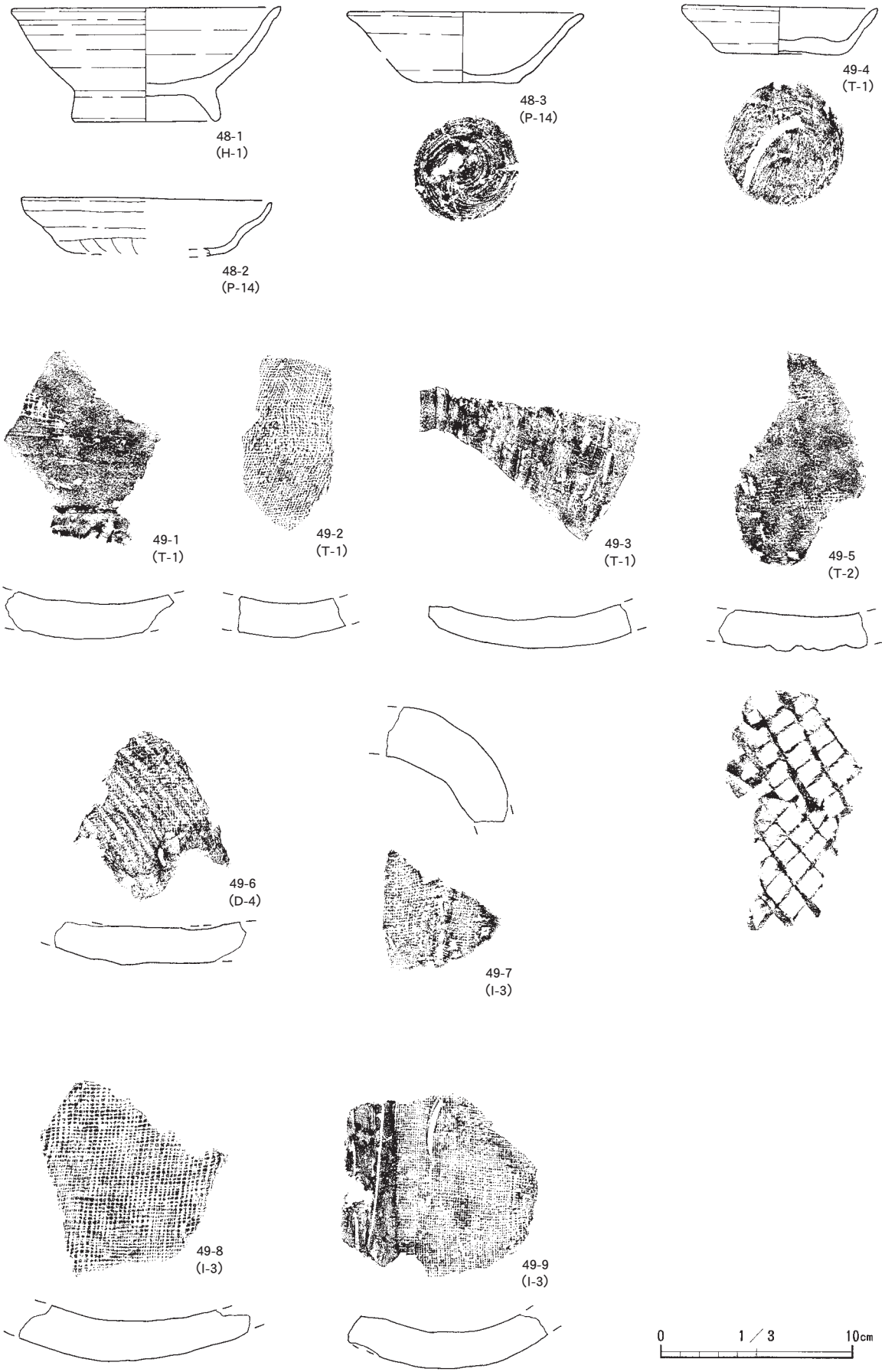


Fig. 29　遺物実測図（48トレンチ、49トレンチ①）

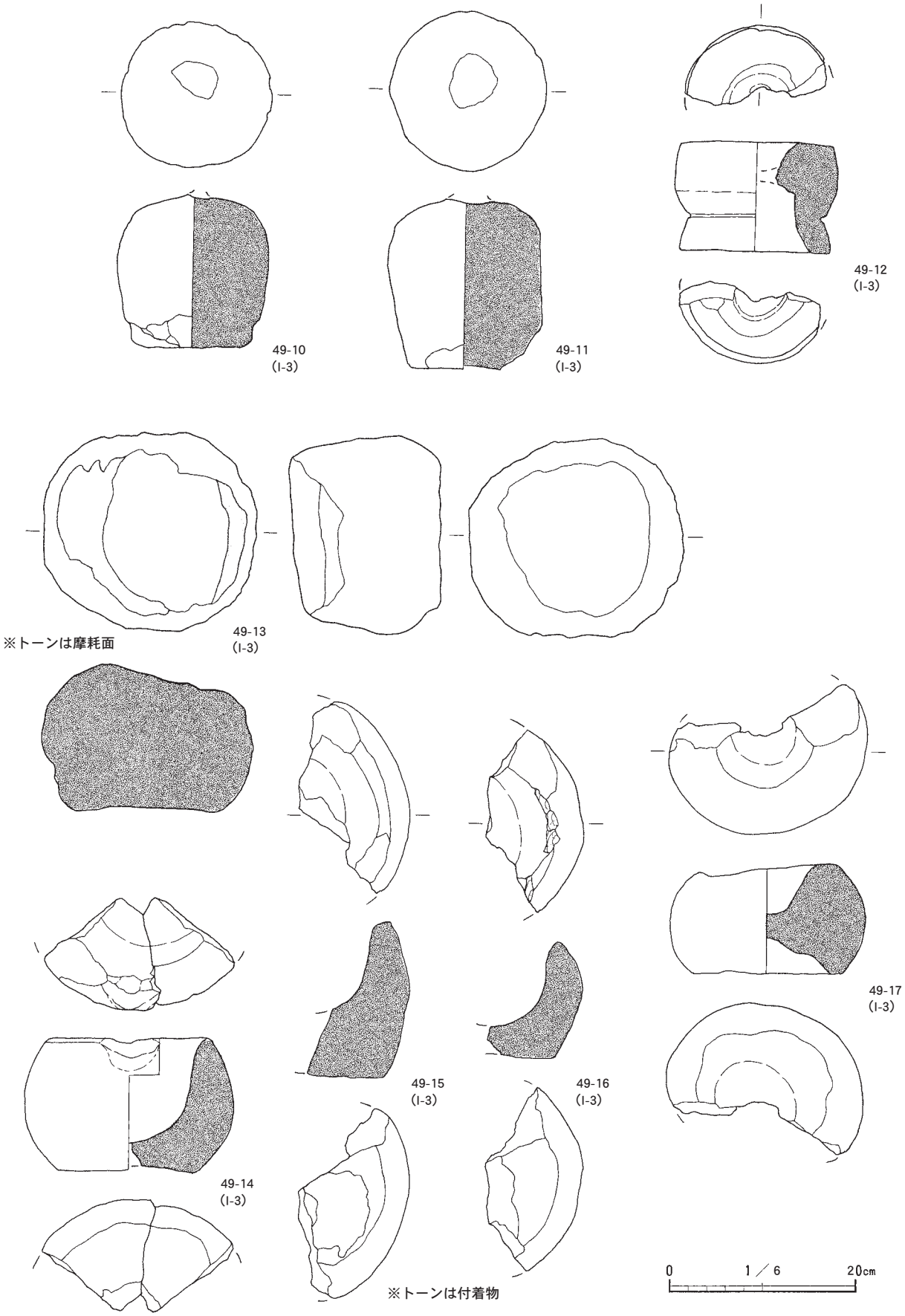


Fig. 30　遺物実測図（49トレンチ②）

Tab. 3　井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表

45a・45bトレンチ

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
D—1	X27　Y503	(100.0)	(35.0)	30.0	楕円形	なし。	
D—2	X27　Y503	(103.0)	(35.0)	30.0	楕円形	なし。	
D—3	X24　Y503	100.0	(98.0)	—	円形？	なし。	井戸状。古代。

46トレンチ

1号住居跡

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
P_1	南東隅	(35.0)	30.0	15.0	円形	なし。	
P_2	南東隅	67.0	60.0	13.0	方形	なし。	貯蔵穴

7号住居跡

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
P_1	南東隅	35.0	35.0	未計測	円形	なし。	底面に薄い灰層。

16号住居跡

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
P_1	南東隅	55.0	40.0	12.5	楕円形	土師器坏・甕	貯蔵穴。
P_2	南東隅	15.0	12.0	13.5	円形	なし。	

21号住居跡

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
P_1	南東隅	65.0	40.0	23.5	楕円形	なし。	貯蔵穴。

1号ピット列

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
P_1	X207　Y352	40.0	(40.0)	35.0	円形	酸化焔焼成須恵器（坏）破片。	中世。
P_2	X207　Y352	35.0	35.0	30.5	円形	土師器・須恵器（坏）破片。	中世。
P_3	X208　Y352	35.0	30.0	50.0	円形	土師器・須恵器小片、灰釉陶器(皿)破片。	中世。
P_4	X209　Y352	35.0	30.0	45.0	円形	土師器、須恵器、酸化焔焼成須恵器(坏)破片。	中世。
P_5	X210　Y351・352	43.0	40.0	—	円形	土師器・須恵器小片。	中世。

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
D—1	X210　Y351	(110.0)	(50.0)	[65.0]	円形	なし。	中世。
D—2	X210　Y352	[190.0]	103.0	45.0	方形	土師器（甕）・須恵器（坏・大甕）・灰釉陶器（段皿）・瓦破片	中世。覆土に灰多量。
D—3	X210　Y352	(80.0)	(75.0)	45.0	楕円形？	土師器・須恵器破片が少量。	中世。
D—4	X209・210　Y352	[90.0]	[55.0]	20.0	楕円形？	須恵器（坏）・酸化焔焼成須恵器（坏）破片。その他に礫多数。	H—10貯蔵穴？
D—5	X210　Y351	(65.0)	(40.0)	[50.0]	円形	なし。	
D—6	X208　Y351	[105.0]	(95.0)	15.0	円形	土師器・須恵器破片が少量。	H—16の竈か？
D—7	X207・208　Y352	100.0	[62.0]	52.0	楕円形	土師器（坏）・須恵器（坏）・暗紋を有する土器片。	古代。
D—8	X210　Y352	81.0	(40.0)	25.0	楕円形	土師器・須恵器（坏）破片が少量。	古代。
D—9	X210　Y351	82.0	58.0	6.0	方形	土師器小片・須恵器（大甕）破片。	
D—10	X210　Y351	[110.0]	—	(25.0)	不明	鉄滓（椀型滓等）・須恵器坏。	
D—11	X206　Y352	[100.0]	(40.0)	42.0	楕円形	土師器（坏）・須恵器（坏・椀・羽釜）・酸化焔焼成須恵器（坏・椀）破片。	古代。
D—12	X210　Y351	(60.0)	85.0	23.5	楕円形？	なし。	H—6の貯蔵穴か？
D—13	X208　Y352	105.0	[65.0]	50.0	楕円形	なし。	
D—14	X207　Y352	105.0	60.0	29.0	楕円形	土師器・須恵器破片が少量。	底面中央に凹み。
D—15	X208　Y352	[90.0]	[80.0]	40.0	円形	なし。	
D—16	X208　Y352	(70.0)	(70.0)	47.5	楕円形	なし。	
D—17	X210　Y352	84.0	64.0	50.0	楕円形	なし。	
P—1	X207　Y352	30.0	30.0	—	円形	なし。	中世。
P—2	X207　Y351	30.0	30.0	22.5	円形	土師器破片が少量。	中世。
P—3	X207　Y352	37.0	20.0	20.0	円形	なし。	中世。
P—4	X208　Y352	15.0	14.0	10.0	円形	土師器・須恵器破片が少量。	中世。

P―5	X208	Y352	18.0	17.0	20.0	円形	土師器・須恵器破片が少量。	中世。
P―6	X208	Y352	45.0	35.0	10.0	円形	土師器・須恵器破片が少量。	中世以後。
P―7	X208・209	Y352	40.0	38.0	25.0	円形	須恵器（坏・大甕）破片。	中世。
P―8	X209	Y352	35.0	35.0	30.0	円形	土師器・須恵器破片が少量。	中世。
P―9	X209	Y351	40.0	33.0	39.5	円形	なし。	
P―10	X207	Y352	66.0	45.0	29.5	楕円形	土師器小片・須恵器(坏)・灰釉陶器小片。	古代。
P―11	X207	Y352	[60.0]	50.0	39.5	円形	なし。	古代。
P―12	X210	Y351	35.0	(20.0)	31.5	円形	なし。	
P―13	X210	Y351	30.0	30.0	8.0	円形	土師器・須恵器破片が少量。	
P―14	X210	Y351	45.5	45.0	16.5	円形	土師器・須恵器破片が少量。	
P―15	X208	Y352	[40.0]	[35.0]	39.0	円形	土師器・須恵器破片が少量。	古代。
P―16	X210	Y351	25.0	25.0	18.5	円形	土師器破片・須恵器（坏）破片。	古代。
P―17	X210	Y351	35.0	35.0	17.5	円形	土師器（甕）・須恵器（坏・羽釜）・土師質土器（坏）。	古代。
P―18	X210	Y351	25.0	25.0	―	円形	なし。	古代。
P―19	X210	Y352	55.0	―	38.5	円形	土師器・須恵器破片が少量。	古代。
O―1	X208・209	Y351・352	[170.0]	[170.0]	45.0	円形？	なし。	古代。
O―2	X210	Y352	―	―	72.0	不定形	なし。	古代。

47トレンチ

遺構名	位　置		長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
Ⅰ―1	X224	Y234	(85.0)	(34.0)	―	円形	土師器（甕）・須恵器（甕）・土師質土器（坏、椀）・黒色土器（椀）・灰釉陶器（椀）・瓦破片	古代(10世紀後半頃廃絶)
D―1	X224	Y235	95.0	(50.0)	28.0	方形	土師器（坏・甕）破片など少量。	近世以後
D―2	X224	Y235,236	100.0	55.0	17.0	方形	軟質土器、陶磁器破片など少量。	近世以後
D―3	X224	Y236	65.0	(55.0)	13.5	円形	土師器（甕）破片など若干。	近世以後
D―4	X224	Y236	105.0	(100.0)	61.0	円形	土師器（坏）、須恵器（高坏）、陶磁器破片など少量。	近世以後
D―5	X224	Y236	(110.0)	60.0	47.0	方形	土師器（坏）、陶磁器破片など少量。	近世以後
P―1	X224	Y235	25.0	25.0	17.5	方形	土師器（坏）破片など若干。	近世以後
P―2	X224	Y235	15.0	(10.0)	50.0	円形	なし。	近世以後
P―3	X224	Y235	22.0	22.0	22.5	方形	なし。	近世以後
P―4	X224	Y235	(35.0)	(20.0)	25.0	円形？	なし。	近世以後
P―5	X224	Y235	12.0	12.0	32.0	方形	なし。	近世以後
P―6	X224	Y236	[35.0]	(15.0)	42.0	円形	なし。	近世以後

48レンチ
２号掘立柱建物跡

遺構名	位　置		東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状沈着	その他の沈着	備考（出土遺物など）
P_1	X305	Y303	80.0	(59.0)	21.5	方形	―	―	―	遺物なし。
P_2	X305	Y303	59.0	65.0	17.5	楕円形	―	○	―	遺物なし。

４号掘立柱建物跡

遺構名	位　置		東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状沈着	その他の沈着	備考（出土遺物など）
P_1	X305	Y303	120.0	[135.0]	27.0	方形	○	○	―	柱の当たりがやや凹む。遺物なし。
P_2	X305・306	Y303	106.0	110.0	43.0	方形	―	○	―	柱の当たりが凹む。土師器（坏・甕）、須恵器（甕）破片が出土。
P_3	X306	Y303	[120.0]	―	24.0	方形？	○	○	―	遺物なし。
P_4	X307	Y303	110.0	[100.0]	13.0	方形	○	○	―	柱の当たりに重なって扁平な礫２個あり。その他に底面に扁平な礫１個あり。土師器（坏）破片出土。
P_5	X308	Y303	―	―	32.0	方形	―	○	―	柱の当たりが凹む。土師器（坏・甕）破片が出土。
P_6	X308	Y303	―	―	31.5	不明	○	○	―	柱の当たりが凹む。遺物なし。
P_7	X308	Y304	―	―	30.0	不明	―	○	―	柱の当たりが凹む。遺物なし。
P_8	X308	Y304・305	―	―	―	不明	―	―	―	撹乱の影響で未検出。

P 9	X308	Y304・305	100.0	90.0	20.0	方形	—	○	○	柱の当たりが凹む。酸化焔焼成須恵器（坏）破片が出土。
P 10	X307	Y304・305	110.0	88.0	29.0	方形	—	○	白色粘質土	柱の当たりが凹む。土師器（坏・甕）、須恵器（坏）破片が出土。
P 11	X306	Y304・305	120.0	105.0	30.5	方形	—	○	白色粘質土	柱の当たりが凹む。遺物なし。
P 12	X305・306	Y304・305	98.0	94.0	10.0	方形	○	○	—	H27調査で新発見の柱穴
P 13	X305	Y304・305	103.0	115.0	20.5	方形	○	○	—	旧１号掘立柱建物跡Ｐ 8
P 14	X305	Y305	—	—	—	方形？	—	○	○	形状不明。柱の当たりと考えられる痕跡が残る。

５号掘立柱建物跡

遺構名	位	置	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状沈着	その他の沈着	備考（出土遺物など）	
P 1	X307	Y304	75.0	67.0	27.5	方形	—	○	—	なし。	
P 2	X307	Y304	(65.0)	67.0	27.5	方形	○	○	—	なし。	柱の当たりがやや凹む。
P 3	X308	Y304	55.0	(40.0)	26.0	方形	○	○	—	なし。	柱の当たりがやや凹状。
P 4	X307	Y304	80.0	[80.0]	27.0	円形	—	○	—	なし。	柱の当たりが凹状。 柱穴の北側に南北方向の掘り形が伴う。
P 5 a	X307	Y303	[62.0]	70.0	25.0	円形	—	○	—	なし。	柱の当たりがやや凹状。
P 5 b					28.0		—	—	○		
P 6	X307	Y303	55.0	42.0	19.0	円形	—	○	—	なし。	柱の当たりが凹状。 柱穴の東側に東西方向の掘り形が伴う。
P 7	X307	Y303	(25.0)	(28.0)	23.0	円形	—	—	—		柱の当たりがやや凹状。
P 8 a	X308	Y303	60.0	56.0	33.0	方形	—	○	—	なし。	柱の当たりがやや凹状。
P 8 b					28.0		—	○	—	なし。	

土坑・風倒木痕

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
D—1	X305	Y303	[150.0]	105	19.0	楕円形	土師器（坏・甕）、須恵器（甕）、酸化焔焼成須恵器（椀）破片。	
D—2	X306	Y303・304	85.0	67.0	20.5	楕円形	土師器（坏・甕）、埴輪（不明）、須恵器（坏）破片。	
D—3	X307	Y304	8.0	77.0	15.0	円形	土師器（坏・甕）、須恵器（坏）破片。	
O—1	X305・306	Y303	(308.0)	(204.0)	52.0	—	なし。	

ピット

遺構名	位	置	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状沈着	その他の沈着	備考（出土遺物など）
P—1	X305	Y305	24.0	[24.0]	14.0	円形	—	—	—	遺物なし。
P—2	X305	Y305	[65.0]	(40.0)	30.0	円形	—	—	—	遺物なし。撹乱か。
P—3	X305	Y305	[45.0]	[40.0]	23.0	円形	—	—	—	土師器（坏）破片出土。
P—4	X306	Y303	33.0	25.0	20.0	円形	—	—	—	遺物なし。
P—5	X306	Y303	28.0	28.0	18.5	円形	—	—	—	遺物なし。
P—6	X306	Y304	28.0	25.0	6.0	円形	—	—	—	遺物なし。
P—7	X306	Y304	26.0	25.0	9.0	円形	—	—	—	遺物なし。
P—8	X306	Y304	21.0	21.0	16.5	円形	—	—	—	遺物なし。
P—9	X306	Y304	60.0	38.0	15.5	楕円形	—	—	○	P—12・22と並ぶ。遺物なし。
P—10	X306	Y305	40.0	35.0	12.0	円形	—	—	—	須恵器（椀？）破片出土。
P—11	X306	Y304	40.0	32.0	11.0	円形	—	—	—	遺物なし。
P—12	X306	Y304	75.0	60.0	32.0	楕円形	—	—	—	柱の当たりがやや凹状。Ｐ—９・22と並ぶ。
P—13	X306	Y304	43.0	37.0	6.5	円形	—	—	—	遺物なし。
P—14	X307	Y305	50.0	47.0	7.0	円形	—	—	—	遺物なし。
P—15	X307	Y304	78.0	56.0	27.0	円形	—	—	—	二段。覆土に灰を包含。
P—16	X307	Y305	56.0	55.0	70.0	円形	—	—	—	平面は多角形的な円形。他のピットよりも深い。土師器・須恵器小片。
P—17	欠番									５掘柱建物跡Ｐ 5
P—18	X307	Y303・304	62.0	48.0	19.5	楕円形	—	—	—	遺物なし。
P—19	X307	Y304	42.0	(40.0)	12.0	円形	—	—	—	土師器(坏・甕)・須恵器（蓋・坏・甕）破片。

P―20	X304　Y305	60.0	43.0	―	円形	不明	不明	不明	覆土に礫を包含。遺物なし。
P―21	X305　Y306	62.0	46.00	30.0	楕円形	―	○	―	遺物なし。
P―22	X306　Y307	(80.0)	(70.0)	19.5	楕円形	―	―	―	P―9・12と並ぶ。遺物なし。

1号竪穴状遺構

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
P_1	北東隅遺構内	30.0	24.0	10.5	円形	なし。	
P_2	北東隅遺構外	35.0	28.0	26.5	方形	なし。	
P_3	北東隅遺構外	40.0	30.0	19.0	方形	なし。	

2号竪穴状遺構

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
P 1	北壁中央部	31.0	22.0	38.5	方形	なし。	
P 2	北壁西隅	30.0	24.0	12.0	円形	なし。	
P 3	中央付近	10.0	8.0	14.5	円形	なし。	

井戸跡・土坑・ピット

遺構名	位　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
I―1	X258　Y252	93.0	85.0	―	円形	土師器（甕）破片が若干。	
I―2	X258　Y252	153.0	[160.0]	―	円形	土師質土器(坏)・瓦(平瓦）破片が若干。	
I―3	X250・251　Y260	[85.0]	[85.0]	―	円形	瓦（平瓦）・石製品（臼、石鉢、五輪塔部材、凹石、多孔石）破片。	
D―1	X258　Y252	(160.0)	(130.0)	35.0	円形	土師器（坏）・須恵器（坏・甕）・瓦（平瓦）・陶磁器破片が少量出土。	
D―2	X258　Y252	[125.0]	[80.0]	11.5	楕円形	瓦（平瓦）・軟質土器の破片が出土。	D－8と同一か
D―3	X259　Y252	270.0	115.0	30.0	方形	土師器（坏）・須恵器（甕）・瓦（丸瓦）・陶磁器破片・近世以後の瓦などの破片が少量。	
D―4	X259　Y252	(270.0)	125.0	25.0	方形	土師器（坏）・酸化焔焼成須恵器（坏）・瓦（平瓦・丸瓦）・陶磁器の破片が少量出土。	
D―5	X260　Y250	103.0	[110.0]	52.0	円形	なし。	
D―6	X260　Y250・251	140.0	(80.0)	51.0	方形	須恵器（坏・甕）・軟質土器・陶磁器の破片が少量。	
D―7	X260　Y251・252	(50.0)	(40.0)	33.0	方形	なし。	
D―8	X258　Y252	(175.0)	[125.0]	34.0	楕円形	なし。	D―2と同一か
D―9	X259　Y252	(78.0)	[115.0]	10.0	方形	なし。	
D―10	X260　Y251	[90.0]	(32.0)	8.0	円形	なし。	
D―11	X260　Y251	(60.0)	38.0	18.0	方形	なし。	
P―1	X257　Y252	18.0	12.0	18.0	方形	なし。	
P―2	X257　Y252	30.0	20.0	18.0	方形	なし。	
P―3	X257　Y252	21.0	21.0	23.5	方形	なし。	
P―4	X257　Y252	17.0	17.0	9.5	円形	なし。	
P―5	X257　Y252	20.0	18.0	19.5	方形	なし。	
P―6	X257　Y252	20.0	15.0	8.0	楕円形	なし。	礫の抜けた跡か。
P―7	X257　Y252	20.0	17.0	8.5	楕円形	なし。	礫の抜けた跡か。
P―8	X257　Y252	26.0	(7.0)	29.0	方形	なし。	
P―9	X257　Y252	30.0	25.0	35.5	方形	なし。	
P―10	X258　Y252	37.0	(21.0)	17.0	円形	なし。	
P―11	X257・258　Y252	25.0	22.0	29.0	円形	なし。	
P―12	X258　Y252	35.0	35.0	29.5	方形	瓦（平瓦）破片。	
P―13	X258　Y252	[25.0]	(15.0)	34.0	方形	なし。	
P―14	X258　Y252	40.0	(35.0)	49.5	方形	土師器（甕）破片。	
P―15	X258　Y252	35.0	(22.0)	26.0	方形	なし。	
P―16	X258　Y252	40.0	40.0	30.0	方形	なし。	
P―17	X258　Y252	33.0	33.0	54.0	方形	土師器（坏）破片。	
P―18	X259　Y252	25.0	20.0	24.0	方形	なし。	
P―19	X259　Y252	25.0	[25.0]	36.0	方形	なし。	
P―20	X259　Y252	29.0	27.0	38.0	方形	土師器（甕）・陶磁器破片。	

P—21	X258・259	Y252	26.0	(22.0)	3.5	方形	なし。	
P—22	X259	Y252	33.0	25.0	18.5	方形	酸化焔焼成須恵器（坏）破片。	２基が重複したもの
P—23	X259	Y252	30.0	28.0	45.0	方形	なし。	
P—24	X259	Y252	42.0	38.0	52.0	円形	なし。	
P—25	X259	Y252	45.0	42.0	24.5	円形	なし。	
P—26	X258・259	Y252	14.0	14.0	4.5	方形	なし。	
P—27	X259	Y252	14.0	14.0	15.0	方形	なし。	
P—28	X259	Y252	22.0	(18.0)	—	方形	なし。	
P—29	X259	Y252	44.0	37.0	32.5	円形	なし。	
P—30	X259	Y252	20.0	18.0	16.0	方形	なし。	
P—31	X259	Y252	25.0	25.0	1.5	方形	なし。	
P—32	X259	Y252	35.0	35.0	34.5	方形？	なし。	
P—33	X259	Y252	30.0	28.0	49.5	方形	なし。	
P—34	X259	Y252	30.0	[30.0]	17.5	方形	なし。	
P—35	X259	Y252	15.0	15.0	25.5	円形	なし。	
P—36	X259	Y252	[20.0]	[20.0]	17.0	方形	なし。	
P—37	X259	Y252	30.0	25.0	46.5	方形	なし。	
P—38	X259	Y252	28.0	23.0	21.0	方形	なし。	
P—39	X259	Y252	30.0	30.0	58.5	円形	なし。	
P—40	X260	Y252	20.0	(15.0)	12.0	円形	なし。	
P—41	X260	Y252	25.0	(20.0)	49.5	方形	なし。	
P—42	X260	Y252	35.0	35.0	28.0	方形	なし。	
P—43	X260	Y252	25.0	25.0	19.5	方形	なし。	
P—44	X260	Y252	22.0	20.0	26.5	方形	なし。	
P—45	X260	Y252	30.0	25.0	6.0	方形	なし。	
P—46 a	X260	Y252	30.0	25.0	27.5	方形	なし。	
P—46 b	X260	Y252	20.0	20.0	22.0	方形	なし。	
P—47	X260	Y252	30.0	20.0	43.0	方形	土師器（甕）破片。	
P—48 a	X260	Y252	25.0	20.0	32.5	方形	なし。	
P—48 b	X260	Y252	30.0	25.0	32.0	方形	なし。	
P—48 c	X260	Y252	22.0	20.0	24.5	方形	なし。	
P—49	X258	Y252	20.0	20.0	28.5	方形	なし。	
P—50	X259	Y252	70.0	52.0	22.5	方形	なし。	複数基の重複
P—51	X259	Y252	25.0	25.0	28.0	方形	なし。	
P—52	X260	Y252	20.0	20.0	14.0	方形	なし。	
P—53	X260	Y252	30.0	28.0	31.0	方形	なし。	
P—54	X260	Y252	22.0	22.0	9.0	方形	なし。	
P—55	X260	Y252	20.0	20.0	17.0	方形	なし。	
P—56	X260	Y252	18.0	15.0	6.0	方形	なし。	
P—57	X260	Y252	22.0	22.0	6.5	方形	なし。	
P—58	X260	Y252	22.0	15.0	9.0	方形	なし。	
P—59	X260	Y251	[25.0]	(20.0)	10.0	方形	なし。	
P—60	X260	Y252	[30.0]	(20.0)	16.5	方形	なし。	
P—61	X260	Y252	23.0	23.0	6.5	方形	なし。	
P—62	X259	Y252	30.0	25.0	47.0	方形	なし。	
P—63	X260	Y252	30.0	23.0	23.5	方形	なし。	
P—64	X259	Y252	(15.0)	(7.0)	28.5	円形	なし。	
P—65 a	X260	Y252	[30.0]	(18.0)	18.5	円形	なし。	
P—65 b	X260	Y252	[30.0]	(14.0)	19.5	円形	なし。	
P—66	X258	Y252	20.0	(7.0)	26.5	方形	なし。	
P—67	X260	Y251	30.0	25.0	19.0	方形	なし。	
P—68	X257・258	Y252	27.0	23.0	33.0	方形	なし。	
P—69	X258	Y252	25.0	19.0	18.0	方形	なし。	
P—70	X258	Y252	35.0	35.0	26.0	方形	なし。	

P―71	X258	Y252	20.0	20.0	18.0	方形	なし。	
P―72	X258	Y252	25.0	(20.0)	25.5	方形	なし。	
P―73	X259	Y252	35.0	25.0	35.5	方形	なし。	
P―74	X259	Y252	20.0	20.0	28.0	方形	なし。	
P―75	X259	Y252	75.0	(35.0)	25.0	不明	なし。	複数基の重複か？
P―76	X260	Y251	28.0	25.0	19.0	方形	なし。	
P―77	X260	Y251	32.0	(10.0)	14.5	方形	なし。	
P―78	X260	Y251	38.0	(15.0)	38.0	方形	なし。	複数基の重複か？
P―79	X260	Y251	15.0	[15.0]	7.5	方形	なし。	
P―80	X260	Y250	23.0	23.0	11.5	方形	なし。	
P―81	X260	Y250	25.0	20.0	22.5	方形	なし。	
P―82	X260	Y250	(40.0)	(10.0)	13.0	円形	なし。	
P―83a	X260	Y250	36.0	22.0	15.0	方形	なし。	
P―83b	X260	Y250	40.0	30.0	8.0	方形	なし。	
P―84	X258	Y252	28.0	20.0	25.0	方形	なし。	
P―85	X258	Y252	25.0	(15.0)	3.0	方形	なし。	

Tab. 4　遺物観察表

45ａトレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備　考
45a—1	W—4 覆土	須恵器 坏	①[10.0]　②3.3 ③[5.6]	①粗粒　②良好 ③橙　④1/5弱	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未整形。		酸化焔
45a—2	W—4 底部	須恵器 椀	①　—　②(4.7) ③[8.6]	①粗粒　②良好 ③橙　④1/2	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着して回転横なで整形。	1	酸化焔

46トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備　考
46—1	H—1 覆土	土師器 坏	① 10.2　② 3.0 ③　—	①細粒　②良好 ③橙　④4/5	体部外面は篦削りで整形。体部内面および口縁部内外面は横なでで整形。		
46—2	H—1 覆土	須恵器 蓋	①　—　②(2.7) ③　—	①粗粒　②良好 ③灰白　④1/3	つまみは扁平で端が立つ。外面は回転横なでの後に天井部のみ回転篦削りで整形。その後につまみを接着し回転横なで整形。		
46—3	H—1 覆土	土師器 坏	①[12.0]　②(2.9) ③　—	①細粒　②良好 ③橙　④破片	体部外面は篦削りで整形。体部内面および口縁部内外面は横なでで整形の後に放射状の暗紋を施す。		
46—4	H—2 覆土	須恵器 坏	①[11.0]　② 2.7 ③[6.8]	①細粒　②良好 ③浅黄橙　④破片	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り。		酸化焔
46—5	H—2 覆土	土師質 羽釜	①[21.2]　②(12.3) ③　—	①中粒　②良好 ③褐灰　④破片	胴部外面は縦方向の削りで整形後、鍔を接着して口縁部とともに横なでで整形。内面は横撫でで整形。	カマド 1	
46—6	H—3 覆土	土師質 羽釜	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③にぶい褐④破片	胴部外面は縦方向の削りで整形後、鍔を接着して口縁部とともに横なでで整形。内面は横撫でで整形。		
46—7	H—5 覆土	須恵器 坏	①　—　②(3.1) ③[5.6]	①細粒　②良好 ③灰　④1/3	体部内外面は回転横なで整形。底部は回転糸切り未整形のまま高台部を接着して回転横なで整形。		
46—8	H—5 覆土	須恵器 羽釜	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③灰黄褐　④破片	胴部内外面ともに回転横なで整形後、鍔を接着して横なでで整形。		酸化焔
46—9	H—6 覆土	須恵器 蓋	①[16.2]　②(2.9) ③　—	①細粒　②良好 ③灰黄褐　④1/4	体部内外面は回転横なでの後に天井部のみ回転篦削りで整形。		
46—10	H—6 覆土	須恵器 蓋	①[18.0]　② 4.2 ③つまみ4.1	①細粒　②良好 ③灰　④2/3	つまみは扁平で端が立つ。外面は回転横なでの後に天井部のみ回転篦削りで整形。その後につまみを接着し回転横なで整形。		
46—11	H—6 覆土	須恵器 坏	① 13.2　② 4.2 ③ 7.2	①細粒　②良好 ③灰　④ほぼ完形	体部・口縁部内外面は回転横撫で整形。底部は回転篦切り未整形。	5	
46—12	H—6 覆土	須恵器 坏	① 13.0　② 4.3 ③ 7.0	①細粒　②良好 ③灰　④2/3	体部・口縁部内外面は回転横撫で整形。底部は回転篦切り未整形。	6	
46—13	H—7 覆土	石製品 碁石？	長 2.5　幅 2.1 厚 0.6	扁平・楕円形で黒色・緻密な石を素材とする。石材は頁岩か。			
46—14	H—7 覆土	石製品 碁石？	長 1.9　幅 1.9 厚 1.0	比較的扁平・円形で緻密な石を素材とする。石材は砂岩。			
46—15	H—7 覆土	緑釉陶器 椀	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③オリーブ色④破片	体部から口縁部にかけての破片。内外面ともに回転横なでで整形。胎土は灰白色で硬質。	3	
46—16	H—7 覆土	須恵器 坏	①　—　②(2.2) ③ 5.3	①細粒　②良好 ③橙　④底部のみ	体部内外面は回転横なで整形。底部は回転糸切り未整形。		酸化焔
46—17	H—7 覆土	土師器 台付甕	①　—　②(6.2) ③ 10.4	①細粒　②良好 ③にぶい黄褐④脚部	体部内外面は回転横なで整形。底部は高台部を接着して回転横なで整形。	2	
46—18	H—7 覆土	須恵器 転用硯	長(6.3)　幅(7.2) 厚 0.9	①細粒　②良好 ③灰　④破片	須恵器甕の胴部破片を硯に転用したものの破片と推定される。内面に硯としての使用によると考えられる擦痕あり。		
46—19	H—8 覆土	石製品 碁石？	長 2.0　幅 1.6 厚 0.4	扁平・楕円形で黒色・緻密な石を素材とする。石材は頁岩か。			
46—20	H—8 覆土	緑釉陶器 段皿	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③暗オリーブ④破片	体部・口縁部は内外面ともに回転横なでで整形。内面に回転により段を成形する。		
46—21	H—8 床直	須恵器 坏	① 11.6　② 3.8 ③ 4.6	①細粒　②良好 ③にぶい黄橙④完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り未整形。	2	酸化焔
46—22	H—8 床直	須恵器 坏	①[11.0]　② 3.6 ③[5.6]	①細粒　②良好 ③浅黄　④2/3	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り未整形。	4	酸化焔
46—23	H—8 床直	須恵器 椀	① 11.6　② 4.8 ③ 7.1	①中粒　②良好 ③にぶい黄橙④完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り未調整で高台部を接着して回転横なで整形。	3	酸化焔
46—24	H—8 床直	須恵器 椀	①[13.0]　②(5.1) ③　—	①細粒　②良好 ③にぶい黄橙④1/2	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は高台部を接着して回転横なで整形。	1	酸化焔
46—25	H—8 覆土	須恵器 鉢	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③灰　④破片	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形・調整。口縁部は内面に向かって膨らみをもつ。		
46—26	H—9 床直	銅銭	直径(24.0) 厚 1.8	半分程度の破片。腐食著しくもろい。隆平永宝の可能性が高い。 隆平永宝：796（延暦15）年初鋳造。			
46—27	H—9 覆土	土製品	① 1.9　② 2.0 ③ 1.5	①細粒　②良好 ③褐灰　④完形	須恵器甕の胴部の破片を打ち欠いて円形に整形したもの。		
46—28	H—9 覆土	須恵器 坏	①[12.0]　② 3.2 ③[5.8]	①細粒　②良好 ③明黄褐　④1/4	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り未調整。		酸化焔
46—29	H—10 覆土	須恵器 坏	① 12.2　②(4.2) ③　—	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り未調整で脚部を接着して回転横なで整形。	1	酸化焔
46—30	H—11 覆土	須恵器 坏	① 11.6　② 3.7 ③ 6.4	①細粒　②良好 ③にぶい黄橙④破片	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り後に調整を行ったか。内面に刻書あり。	1	酸化焔

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備　考
46—31	H—12 覆土	須恵器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	底部は内面を回転横なでで整形し、十字の刻書あり。回転糸切り未調整。		
46—32	H—13 覆土	須恵器 皿	①[13.6]　②　2.2 ③[8.0]	①細粒　②良好 ③灰白　④1/3	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り未調整で高台部を接着して回転横なで整形。		
46—33	H—13 覆土	須恵器 坏	①[12.0]　②　5.2 ③[8.0]	①細粒　②良好 ③灰黄褐　④1/4	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は高台部を接着して回転横なで整形。	15	酸化焔
46—34	H—13 覆土	土師質 椀	① 11.3　②　4.9 ③　6.4	①細粒　②良好 ③浅黄橙④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部は水平糸切り？後に高台部を接着して回転横なで整形。	2	
46—35	H—13 覆土	須恵器 羽釜	①[18.6]　②(12.8) ③　－	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	胴部内面は回転横なで、胴部外面は回転横なで後に縦方向の篦削りで整形。その後、鍔を接着して横なでで整形。		酸化焔
46—36	H—16 覆土	土師器 坏	①[12.1]　②　3.2 ③[7.9]	①細粒　②良好 ③橙　④1/2	体部・底部外面は篦削りで整形。指頭圧痕あり。体部内面および口縁部内外面は横なでで整形。		
46—37	H—16 覆土	土師器 坏	① 12.0　②　3.9 ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④完形	体部および底部外面は篦削りで整形。体部内面および口縁部内外面は横なでで整形。	56	
46—38	H—16 覆土	土師器 坏	① 12.2　②　3.6 ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④完形	体部および底部外面は篦削りで整形。体部内面および口縁部内外面は横なでで整形。	59	
46—39	H—16 覆土	土師器 坏	①[13.6]　②(4.2) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④1/3	体部および底部外面は篦削りで整形。体部内面および口縁部内外面は横なでで整形。	60	
46—40	H—16 覆土	土師器 坏	①[17.4]　②(5.7) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④1/4	体部および底部外面は篦削りで整形。体部内面および口縁部内外面は横なでで整形。		
46—41	H—16 覆土	土師器 坏	①[17.6]　②(5.9) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④1/3	体部および底部外面は篦削りで整形。体部内面および口縁部内外面は横なでで整形。	57・58	
46—42	H—16 覆土	土師器 小型甕	①　－　②(12.2) ③　6.6	①細粒　②良好 ③橙　④4/5	体部外面下部は斜め方向の篦削り。上部は横方向の篦削り。体部内面は横方向の篦なでで整形。内面に黒色（漆？）の付着物あり。	64	
46—43	H—16 覆土	土師器 甕	①[21.4]　②(16.7) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④1/4	体部外面は斜め方向の篦削り。口縁部は横なでで整形。体部内面は主に横方向の篦なでで整形。	12・42 44・45	
46—44	H—16 覆土	須恵器 蓋	① 15.2　②(2.1) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④2/3	体部内外面は回転横なでの後に天井部を回転篦削りで整形。内面にかえりを回転で作り出す。	10・16 36	
46—45	H—16 覆土	須恵器 盤	①[18.6]　②　3.6 ③[16.4]	①細粒　②良好 ③灰黄　④1/3	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部外面は回転篦削りで整形。底部内面をなでで調整。	23	
46—46	H—16 覆土	須恵器 盤	①　－　②(2.0) ③[18.2]	①細粒　②良好 ③黄灰　④1/4	底部は内面を回転横なでで整形し、外面は回転篦削りで整形の後に高台部を接着の後になでで整形。	33	
46—47	H—16 覆土	須恵器 鉢	①[15.0]　②　9.3 ③[10.0]	①細粒　②良好 ③灰　④1/2	体部・口縁部は内外面ともに回転横なでで整形。底部は高台部を接着の後に回転横なでで整形。	61・62 63	
46—48	H—16 覆土	須恵器 鉢	①　－　②(4.0) ③　－	①細粒　②良好 ③黒褐　④破片	体部・口縁部は内外面ともに回転横なでで整形。		
46—49	H—16 覆土	須恵器 鉢	①[16.0]　②(6.2) ③　－	①細粒　②良好 ③黄灰　④破片	体部・口縁部は内外面ともに回転横なでで整形。		
46—50	H—16 覆土	須恵器 鉢	①　－　②(3.1) ③[11.0]	①細粒　②良好 ③黄灰　④破片	体部・口縁部は内外面ともに回転横なでで整形。底部は高台部を接着の後に回転横なでで整形。		
46—51	H—16 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	体部から口縁部にかけての破片。体部外面は篦削りで整形。体部内面は横なでで整形の後に放射状の暗紋を施す。口縁部内外面は横なでで整形。		
46—52	H—16 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	体部から口縁部にかけての破片。体部外面は篦削りで整形。体部内面は横なでで整形の後に放射状の暗紋を施す。口縁部内外面は横なでで整形。		
46—53	H—16 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	体部から口縁部にかけての破片。体部外面は篦削りで整形。体部内面は横なでで整形の後に放射状の暗紋を施す。口縁部内外面は横なでで整形。		
46—54	H—16 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	体部から口縁部にかけての破片。体部外面は篦削りで整形。体部内面は横なでで整形の後に放射状の暗紋を施す。口縁部内外面は横なでで整形。		
46—55	H—16 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	体部から口縁部にかけての破片。体部外面は篦削りで整形。体部内面は横なでで整形の後に放射状の暗紋を施す。口縁部内外面は横なでで整形。		
46—56	H—16 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部の破片。外面は篦削りで整形。内面はなでで調整の後に螺旋状の暗紋を施す。		
46—57	H—16 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部から体部にかけての破片。外面は篦削りで整形。内面はなでで調整の後に螺旋状の暗紋を施す。		
46—58	H—16 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部から体部にかけての破片。外面は篦削りで整形。内面はなでで調整の後に底部は螺旋状、体部は放射状の暗紋を施す。		
46—59	H—16 覆土	石製品 石皿？	長 30.6　幅 23.4 厚　8.2	扁平な川原石の両面に擦痕あり。片面は砥石として使用したと推定される線状の使用痕あり。		67	
46—60	H—16 覆土	須恵器 坏	①　9.4　②　2.6 ③　5.0	①細粒　②良好 ③浅黄灰　④完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整。	34	酸化焔
46—61	H—16 覆土	須恵器 椀	①[10.4]　②　5.6 ③[6.6]	①細粒　②良好 ③にぶい橙④1/3	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整の後に高台部を接着して回転横なで整形。		酸化焔
46—62	H—16 覆土	須恵器 皿	①[13.0]　②　2.6 ③[7.2]	①細粒　②良好 ③にぶい黄褐④2/3	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整の後に高台部を接着して回転横なで整形。底部外面・高台部以外はみがきにより調整。	1	酸化焔

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備　考
46—63	H—16 覆土	須恵器 皿	①[15.0]　②　2.4 ③　7.6	①細粒　②良好 ③黄灰　④2/3	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整の後に高台部を接着して回転横なで整形。	6	酸化焔
46—64	H—16 覆土	金属製品 器種不明	長径1.3　短径0.9 幅 0.32　厚　0.04	楕円形を呈した環状の金属製品。銀製か。		7	
46—65	H—16 覆土	土製品	長　2.0　幅　1.9 厚　1.1	①細粒　②良好 ③灰　④完形	須恵器甕の胴部の破片を打ち欠いて円形に整形したもの。		
46—66	H—16 覆土	土製品	長　1.9　幅　2.0 厚　1.0	①細粒　②良好 ③灰　④完形	須恵器甕の胴部の破片を打ち欠いて円形に整形したもの。		
46—67	H—16 覆土	緑釉陶器 椀	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③淡黄　④破片	体部から口縁部にかけての破片。内外面ともに回転横なで整形。胎土は淡黄色で比較的軟質。被熱と思われるはじけが表面にある。		
46—68	H—16 床直	緑釉陶器 小壺？	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③浅黄　④破片	底部から体部にかけての破片。内面は回転横なで整形。外面は回転横なで整形の後に高台部を接着し整形。高台は平たく中央が凹む。		
46—69	H—18 覆土	須恵器 坏	①[13.0]　②　4.6 ③[6.8]	①細粒　②良好 ③黄灰　④1/4	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は高台部を接着して回転横なで整形。		酸化焔
46—70	H—18 覆土	土師質 椀	①　－　②(3.6) ③[6.6]	①細粒　②良好 ③浅黄橙　④1/4	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は高台部を接着して回転横なで整形。		酸化焔？
46—71	H—18 覆土	須恵器 長頸壺？	①　－　②(6.5) ③[11.4]	①細粒　②良好 ③灰　④破片	体部内外面ともに回転横なでで整形。底部は高台部を接着して回転横なで整形。		
46—72	H—19 覆土	須恵器 坏	①[8.8]　②　2.2 ③　4.6	①細粒　②良好 ③橙　④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整。		酸化焔
46—73	H—19 覆土	須恵器 転用硯	①(6.3)　②(5.1) ③　1.2	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	須恵器甕の胴部破片を硯に転用したものの破片と推定される。内面が硯としての使用によると考えられる擦痕あり。		
46—74	H—19 覆土	須恵器 羽釜	①　－　②(8.2) ③　－	①細粒　②良好 ③黄灰　④破片	胴部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。外面は整形後、鍔を接着して横なでで整形。		酸化焔
46—75	H—20 覆土	須恵器 坏？	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③暗灰黄　④破片	体部へと立ち上がった部分の破片。内外面ともに回転横なでで整形。外面に横向きで文字が刻書されている。文字は破損部分もあるため不明。		
46—76	H—25 覆土	須恵器 皿	① 13.5　②　2.8 ③　9.2	①細粒　②良好 ③灰白　④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整の後に高台部を接着して回転横なで整形。内面中央部が多少の段をもつ。	1	
46—77	H—26 覆土	須恵器 羽釜	①[19.2]　②(8.5) ③　－	①細粒　②良好 ③にぶい黄橙④破片	胴部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。外面は整形後、鍔を接着して横なでで整形。		酸化焔
46—78	W—2 覆土	石製品 碁石	長　1.5　幅　1.2 厚　0.6	扁平・楕円形で白色・緻密な石を素材とする。石材は石英。			
46—79	W—2 覆土	須恵器 転用硯？	長(5.9)　幅(4.5) 厚　0.9	①細粒　②良好 ③灰　④破片	須恵器甕の胴部破片を硯に転用したものの破片と推定される。内面に硯としての使用によると考えられる擦痕あり。		
46—80	D—4 覆土	須恵器 坏	① 12.0　②　3.8 ③　6.8	①細粒　②良好 ③浅黄橙④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整。	2	酸化焔
46—81	D—10 覆土	須恵器 坏	①[13.0]　②　3.3 ③[7.0]	①細粒　②良好 ③灰白　④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整。 内面に鉄滓が付着。	1	
46—82	D—17 覆土	須恵器 皿	①[12.6]　②　3.6 ③　7.6	①細粒　②良好 ③浅黄橙④口縁部欠	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は高台部を接着して回転横なで整形。	1	酸化焔
46—83	P—11 覆土	須恵器 坏	① 13.8　②　3.5 ③　9.6	①細粒　②良好 ③灰白　④完形	底部内面、体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切りの後に回転篦削りで調整。	1	
46—84	トレンチ 覆土	土製品 碁石？	長　2.1　幅　1.9 厚　0.5	①細粒　②良好 ③浅黄橙　④完形	扁平で角の丸い三角形に近い形状。質から土器片が磨耗により成形されたものと考えられる。		
46—85	グリッド 覆土	黒色土器 盤	①　－　②(1.4) ③　－	①細粒　②良好 ③にぶい黄橙④破片	底部外面は回転篦削りで整形の後に高台部を接着し、回転横なでで整形。内面は整形の後にみがきで調整し黒色処理。		X208, Y352
46—86	グリッド 覆土	須恵器 鉢	①[33.0]　②(4.4) ③　－	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	体部から口縁部にかけて外面は横方向の篦削りで整形。口縁部外面は横なでで調整。体部・口縁部内面は回転横なでで整形。		X208, Y351
46—87	グリッド 覆土	須恵器 鉢	①[21.0]　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	口縁部内外面は回転横なでで整形。		X208, Y351
46—88	グリッド 覆土	須恵器 皿	①[9.8]　②　2.7 ③　6.0	①細粒　②良好 ③橙　④3/4	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は高台部を接着して回転横なで整形。		X208, Y352 酸化焔
46—89	グリッド 覆土	須恵器 皿	①[13.4]　②　3.0 ③[7.8]	①細粒　②良好 ③灰白　④口縁部欠	体部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整の後に高台部を接着して回転横なでで整形。		X208, Y352 酸化焔
46—90	グリッド 覆土	須恵器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	底部内面は回転横なでで整形。外面は回転糸切り未調整。内面に朱墨？が付着。		X208, Y352 酸化焔
46—91	グリッド 覆土	土師器 小型甕	① 12.6　②(9.3) ③　－	①細粒　②良好 ③明赤褐　④1/3	体部外面は上半分は横方向の篦削り・下半分は斜め方向の篦削りで整形。体部内面は斜め方向の篦なでで整形。		X210, Y352
46—92	グリッド 覆土	灰釉陶器 椀	① 13.7　②　4.5 ③　6.8	①細粒　②良好 ③灰白　④完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整の後に高台部を接着して回転横なでで整形。釉薬はどぶ浸け。	1・2	X210, Y352
46—93	トレンチ 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	体部外面は篦削りで整形。口縁部内面・体部内面は横なでで整形。体部内面に放射状、底部内面に螺旋状暗紋を有する。		

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備　考
46—94	トレンチ 覆土	緑釉陶器 椀	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③オリーブ灰④破片	口縁部の破片。内外面を回転横なでで整形。胎土は灰白でやや硬質。		
46—95	トレンチ 覆土	緑釉陶器 椀？	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③灰オリーブ④破片	底部の破片。内外面を回転横なでで整形。整形後に高台部を接着。胎土は灰色で硬質。		

47トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備　考
47—1	W—2 覆土	須恵器 皿	①[14.0]　②　3.1 ③[7.0]	①細粒　②良好 ③黄灰　④破片	体部・口縁部ともに回転横なで整形。底部は高台部を接着して回転横なで整形。	1	
47—2	W—2 覆土	須恵器 坏	①[14.2]　②(4.4) ③　－	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	体部・口縁部ともに回転横なで整形。		
47—3	I—1 覆土	須恵器 坏	①　－　②(3.1) ③　4.5	①細粒　②良好 ③浅黄橙④底部のみ	体部は回転横なで整形。底部は回転糸切り未整形。		

48トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備　考
48—1	H—1 覆土	須恵器 椀	①[14.0]　②　5.9 ③[7.8]	①細粒　②良好 ③灰白　④1/4	体部・口縁部の内外面は回転横なでで整形。底部は回転横なでで整形の後に高台部を接着し回転横なでで整形。	1	酸化焔
48—2	P—19 覆土	土師器 坏	①[13.0]　②(2.8) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	体部・底部外面は篦削りで整形。指頭圧痕あり。体部内面および口縁部内外面は横なでで整形。	3	
48—3	P—19 覆土	須恵器 坏	①[12.3]　②　4.0 ③　5.6	①中粒　②良好 ③にぶい橙　④1/2	体部・口縁部部ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り未調整。	2	酸化焔

49トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備　考
49—1	T—1 覆土	瓦 平瓦	長(8.8) 厚　1.9	①細粒　②良好 ③灰黄褐　④破片	凹面は布目圧痕を横なでですり消して調整。凸面は斜め方向のなでで調整。		
49—2	T—1 覆土	瓦 平瓦	長(9.2) 厚　1.8	①細粒　②良好 ③黒　④破片	凹面は布目圧痕を未調整。凸面は縦方向のなでで調整か。		
49—3	T—1 覆土	瓦 平瓦	長(7.0) 厚　1.5	①細粒　②良好 ③黄灰　④破片	凹面は布目圧痕を横なでですり消して調整。凸面は縦方向のなでの後に格子目のたたきで整形。		
49—4	T—2 覆土	土師質 かわらけ	①　2.4　②　6.2 ③　－	①細粒　②良好 ③明赤褐　④3/4	体部・口縁部部は回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整。		
49—5	T—2 覆土	瓦 丸瓦	長(13.5) 厚　1.8	①細粒　②良好 ③橙　④破片	凹面は布目圧痕を横なでですり消して調整。凸面は格子目のたたきで整形。		
49—6	D—4 覆土	瓦 平瓦	長(10.5) 厚　2.0	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	凹面は布目圧痕を斜め方向のなでですり消して調整。凸面は縄目のたたきで整形の後、なでで調整。		
49—7	I—3 覆土	瓦 丸瓦	長(7.2) 厚　2.8	①細粒　②良好 ③にぶい黄橙　④破片	凹面は布目圧痕を未調整。凸面は縦方向のなでもしくは削りで整形。		
49—8	I—3 覆土	瓦 平瓦	長(10.5) 厚　1.9	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	凹面は布目圧痕を未調整。凸面は縦方向のなでで調整。		
49—9	I—3 覆土	瓦 平瓦	長(12.0) 厚　2.2	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	凹面は布目圧痕を未調整。凸面は縦方向のなでで調整。		
49—10	I—3 覆土	石製品 五輪塔	高 16.5　幅 16.5	角閃石安山岩製。本来一体だったと推定される風輪と空輪先端が欠損。未製品か。			
49—11	I—3 覆土	石製品 五輪塔	高 18.8　幅 16.5	角閃石安山岩製。本来一体だったと推定される風輪と空輪先端が欠損。未製品か。			
49—12	I—3 覆土	石製品 凹石？	口径[8.0]　高 11.9 外径[18.0]	角閃石安山岩製。形状は脚部を持つ臼状。上面の孔が脚の内面に貫通している。			
49—13	トレンチ 覆土	石製品 不明	高 16.0　幅 23.6	黒色で粗粒の安山岩製。そろばん玉状に整形し、部分的に磨耗した面をもつ。石鉢の未製品か。			
49—14	I—3 覆土	石製品 石鉢	口径[24.0]　高 15.0 外径[30.0]	黒色で粗粒の安山岩製。内面・口縁部を研磨し片口が付く。			
49—15	I—3 覆土	石製品 石鉢	口径[20.0]　高 16.7 外径[28.0]	黒色で粗粒の安山岩製。内面・口縁部を研磨する。			
49—16	I—3 覆土	石製品 石鉢	口径[19.0]　高 13.3 外径[27.0]	黒色で粗粒の安山岩製。器体の内外面を研磨する。一部赤化。口縁部からの打撃によるものと推定される連続した剥離面を内面にもつ。			
49—17	I—3 覆土	石製品 凹石	口径 10.0　高 11.6 外径 21.6	角閃石安山岩製。楕円形の礫を素材とする。上下に孔を持ち、孔は貫通する。			

Ⅵ　まとめ

1　元総社小学校校庭について

(1)　２号、４号、５号掘立柱建物跡について

夏休みの恒例となってきた元総社小学校校庭における発掘調査であるが、平成28年度調査の成果の一つは、かつて群馬大学が発掘調査した元総社小校庭遺跡の２号掘立柱建物跡（松島　1986）と断定できる柱穴の一部を再検出したことにより、その位置が再確認できたことである。またもう一点は、話が遡るが、平成27年度調査で元総社小校庭遺跡の１号掘立柱建物を再検出した際に、１号掘立柱建物跡の東の棟持柱（報告書中ではP_8とした柱穴）のさらに東で、新たに柱穴が検出された。この新たに検出された柱穴については、調査区の拡張部において検出されたものであったことから、この柱穴の解明については平成28年度調査の課題とした（前橋市教育員会2017）。そして、平成28年度の発掘調査の結果、この柱穴は新たな掘立柱建物跡（４号掘立柱建物跡）の柱穴であることが判明し、さらには１号掘立柱建物跡の東側の棟持柱としたP_8も、４号掘立柱建物跡の柱穴であることが判明したことである。

まず、２号掘立柱建物跡であるが、群馬大学の調査で検出された遺構は桁行３間、梁行２間の東西棟で、建物の西で柱筋の通らない柵列もしくは庇と考えられる柱穴が３基検出されている（松島　1986）。平成28年度調査で確認できた柱穴は、南東隅の柱穴（本報告書中ではP_2）と、梁行方向で北へ連続するもう一つの柱穴（本報告書中ではP_1）の２基の柱穴のみであるが、検出された柱穴の位置や形状などの特徴から、群馬大学が調査した２号掘立柱建物跡のものと認定した。この２基の柱穴の位置と群馬大学の調査成果から、２号掘立柱建物は正方位を意識して建てられていることが判明した。柱穴の覆土の状態については、今回の調査が再調査のため不明であるが、柱穴を精査し観察した結果、P_2では柱の当たりが確認できたが、P_1では調査区内で検出できた範囲内では柱の当たりは確認できなかった。

４号掘立柱建物跡は、東端部の上面を撹乱もしくは硬化した砂質土により覆われていたため柱穴の確認が困難であった。結果的に南東隅の柱穴は撹乱により検出できなかったが、桁行５間、梁行２間の東西棟であることが判明した。それと同時に１号掘立柱建物跡の東の棟持柱とされていた柱穴（P_8）と、平成27年度調査で新たに検出された柱穴は４号掘立柱建物跡の柱穴の一部であることも判明したことは前述のとおりである。ここで４号掘立柱建物の規模等について触れたいが、柱間については、第５節のとおり桁行の柱間が実測値で最小値2.60mから最大値2.80mを測り、およそ2.7mであることから９尺と考えられる。同様に、梁行の柱間が実測値でほぼ3.00mであることから、10尺と考えられる。これらのことから、４号掘立柱建物は１号掘立柱建物と同規模の建物であることが分かる。しかしながら、４号掘立柱建物跡と１号掘立柱建物跡では柱穴の形状が異なる。４号掘立柱建物の柱穴は、１辺が１m前後の隅丸の方形で、柱が当たる部分のみ深く掘り込まれていた。１号掘立柱建物跡の柱穴は、多少の個体差はあるが４号掘立柱建物の柱穴よりも若干大きい。また、柱穴が４号掘立柱建物よりも深く、穴全体を掘り下げている点も異なる。[註(1)]

５号掘立柱建物跡は、４号掘立柱建物跡と重複して検出されている。確認できている建物の範囲は桁行２間分、梁行３間分であるが、桁行方向についてははさらに東へ広がると推定される。柱間については、桁行の柱間が実測値で2.00m・2.30mと若干の差がある。梁行についても同様で1.45m・1.65m・1.73mと近似した数字にはならない。状況から推測すると、桁行およそ2.1mで７尺、梁行およそ1.5mで５尺となるであろうか。柱穴自体も統一された感に乏しいが、南側の桁行については他の柱と比較しても深くて大きい。また、柱痕は１号・４号掘立柱建物が直径30㎝程度であるのに対し、直径20㎝程度でやや小ぶりであるが柱の当たりを多少掘り窪めている。また、P_5がほぼ同じ位置で柱穴が重複している点や、P_8がベルトを挟んで柱の当たりが一致しない点

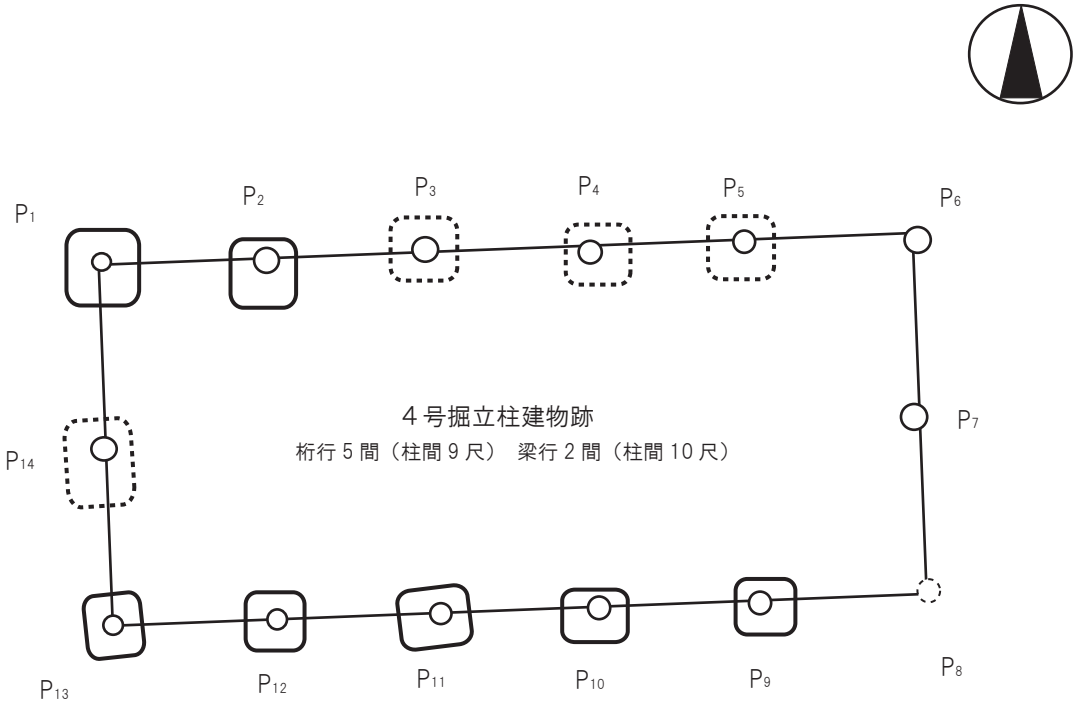


Fig. 31　元総社小学校校庭（48トレンチ）４号掘立柱建物跡の模式図

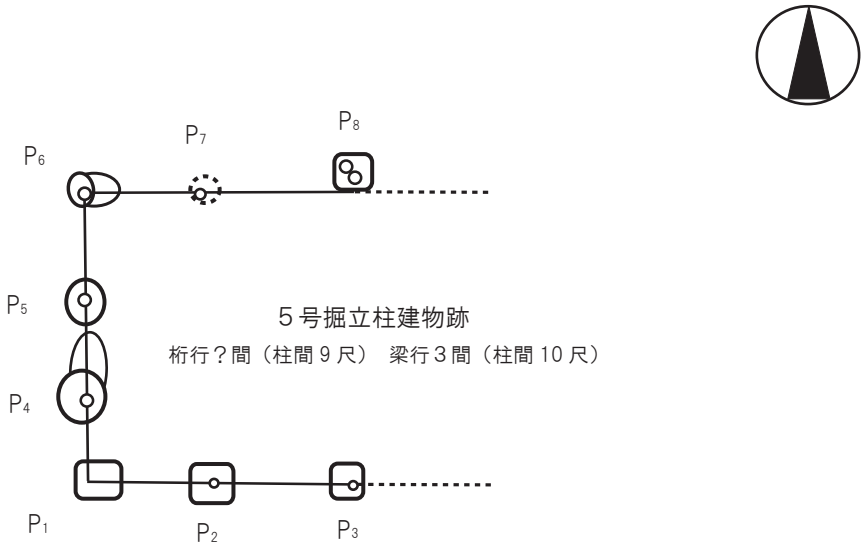


Fig. 32　元総社小学校校庭（48トレンチ）５号掘立柱建物跡の模式図

（柱穴の重複か）などから、建て替えが行われたことも想定できる。

⑵　元総社小学校校庭で検出された各遺構の空間的関係

昭和37年の元総社小校庭遺跡の調査でから平成28年度までの調査まで、元総社小学校の校庭では掘立柱建物５棟、古代の区画溝２条が検出されている。全体的に正方位を意識している点は共通しているが、その検出状態からすべての遺構が同時に存在したわけではないことは容易に想像できる。

建物跡や溝跡の時期的な点についてであるが、溝については覆土から出土した遺物により廃絶（埋没）した時期をある程度は特定できるが、掘立柱建物跡については時期の特定が現状としては難しい。ちなみに、元総社小学校校庭での調査結果を基に歴史的環境を考えると、元総社小学校校庭の最古の遺構は４世紀代の住居跡で、６世紀代になると住居数が増加していることから、古墳時代前期に集落が営まれはじめ、途中廃絶するものの後期に再度集落が営まれたことが考えられる。その集落は７世紀後半の住居を最後に途絶えてしまう。その後、住居が再び営まれ始めるのは10世紀代からと考えられる。21ａトレンチの１号溝跡が７世紀後半の住居跡を壊して掘削されていたことや、３号掘立柱建物跡の柱穴の上に10世紀前半の住居跡が造られていたこと、さらには48トレンチの１号・２号溝跡は４号・５号掘立柱建物よりも新しく、その覆土から出土した遺物から溝は10世紀後半に廃絶したと考えられる。これらのことから、掘立柱建物跡や溝跡は、７世紀後半から10世紀までの間に存在していたことが推測できるであろう。

次に掘立柱建物に関して、その重複関係や位置関係等を整理すると以下のとおりである。

《１号掘立柱建物と４号掘立柱建物》

①１号掘立柱建物と４号掘立柱建物は規模が同じ。

②４号掘立柱建物は１号掘立柱建物から北へ１間分、柱穴の心心の距離で東へ約1.5mずれている。

《２号掘立柱建物と４号掘立柱建物》

①２号掘立柱建物の東の梁と４号掘立柱建物の西の梁は同軸上にあると考えられる。

《４号掘立柱建物と５号掘立柱建物》

①４号掘立柱建物と５号掘立柱建物の新旧関係は、５号掘立柱建物が新しい。

②４号掘立柱建物と５号掘立柱建物のそれぞれの北側の桁の軸は同軸に近い。

《３号掘立柱建物と４号掘立柱建物》

①３号掘立柱建物跡の柱列（桁方向と推定）と、４号掘立柱建物の北側の桁はほぼ同軸に近い。

また、重複以外にも検出されている柱穴の距離から、１号掘立柱建物跡と４号掘立柱建物、１号掘立柱建物と２号掘立柱建物は、それぞれ並存が難しいと考えられる。

上記のことから、暫定的に以下のような変遷を推定した。

Ⅰ期：１号掘立柱建物

Ⅱ期：４号掘立柱建物、（３号掘立柱建物）

Ⅲ期：２号掘立柱建物、５号掘立柱建物

※３号掘立柱建物については、同軸性から４号掘立柱建物との並存を推定した。

なお、30トレンチの１号溝跡については、覆土上部に浅間Ｂ軽石混入土層が堆積している点や、断面形状、出土遺物などから、古くともⅢ期に属すると考えたい。校庭西北西部はかつて校舎が存在したことから遺構の検出が難しく、３号掘立柱建物付近の状況は不明と言わざるを得ない。そうした状況から、校庭西端の21ａトレンチの１号溝跡が浮いた状態となってしまう。元総社小学校校庭の掘立柱建物跡は台地頂上先端部である校庭中央北寄りを中心に検出されている。この成果から台地上に掘立柱建物で構成された施設が存在したとするならば、台地の西側斜面に位置する21ａトレンチの１号溝跡は、その西側の区画溝と考えることができ、時期的にはⅠ期もしくはⅡ期に属するものと考えるのが自然であろう。

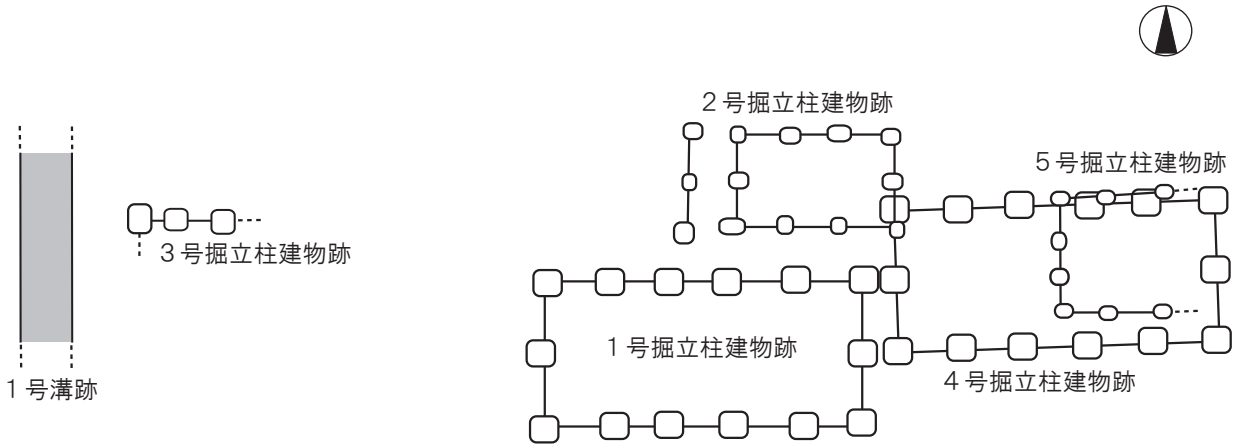


Fig. 33　元総社小学校校庭の遺構検出状態

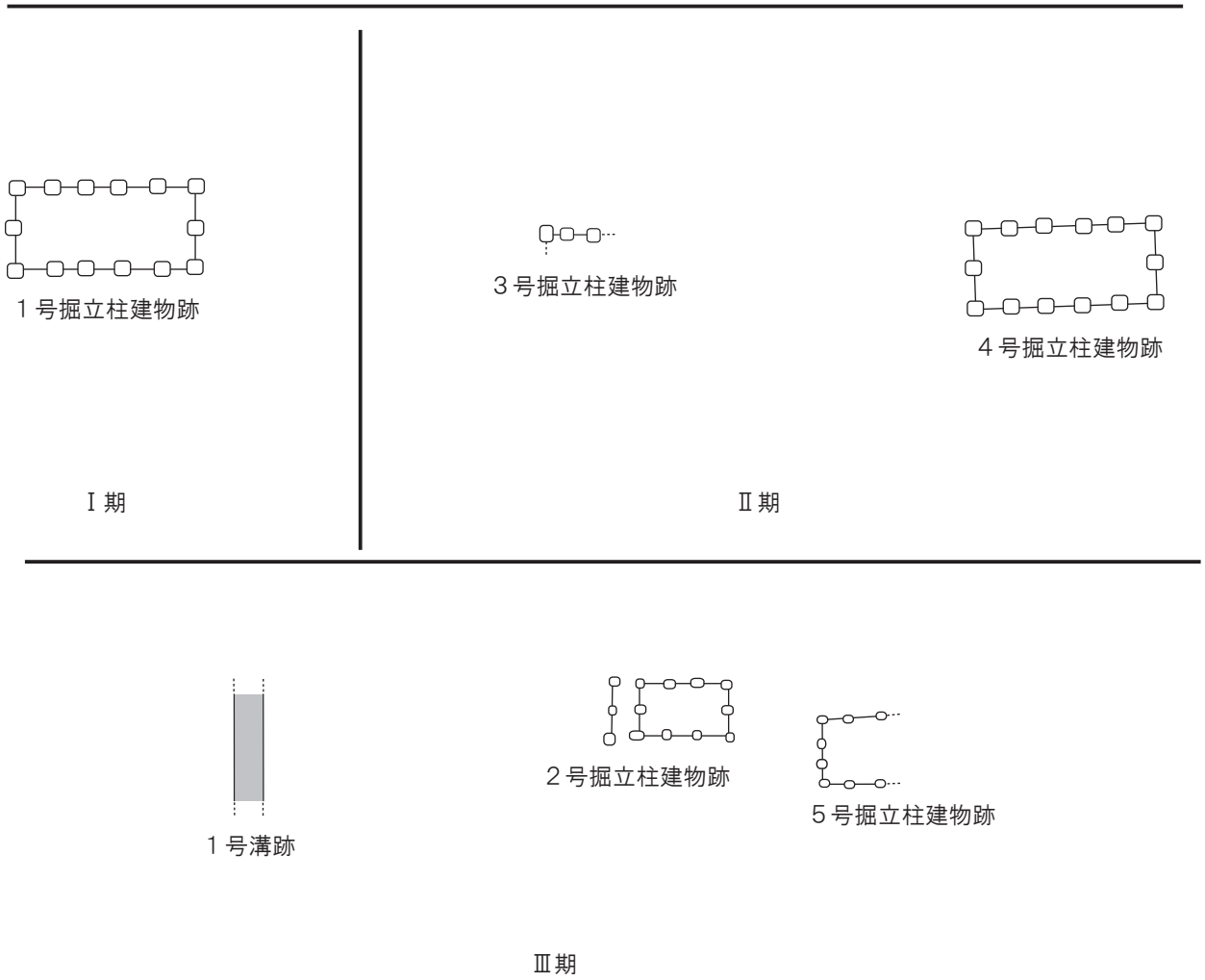


Fig. 34　各建物跡・溝跡の変遷想定図（模式図）

2　国庁推定地Ｂ・Ｃ案周辺について

古代の区画溝

元総社蒼海遺跡群（95）で検出された古代の区画溝（２号・３号溝跡）について、その延伸を確認するために調査を行ったのが47トレンチであるが、元総社蒼海遺跡群（95）で検出された地点から西南西へ約30mの地点で同一の区画溝と考えられる遺構を検出することができた。

検出された区画溝の状態については第５節の記載（47トレンチの２号・３号溝跡）に譲ることとしたいが、特徴としては①断面形状が逆台形。②底面に硬化面が存在する。③硬化面の下層に、より小規模の溝（３号溝跡）が存在することが挙げられ、この３点の特徴は元総社蒼海遺跡群（95）２号・３号溝跡の特徴と一致することから同一の区画溝と断定した。なお、２号溝跡の底面で検出された硬化面については、底面を埋め尽くすように帯状に検出されている。この硬化面は道路として機能した結果、残されたものであると解釈したい。元総社蒼遺跡群では、溝跡の覆土中に硬化面が検出される例を多く見受ける。また、溝についても断面形状が逆台形でしっかりと掘削された状況から区画溝としての性格が想定できるもののほか、断面形状が浅いU字形で、溝というよりも当初から道として造られている可能性を考えずにはいられない遺構も存在する。また、47トレンチ２号・３号溝のように、硬化面の下層がさらに溝状に掘り窪められている例も存在することから、こうした「溝」と「道」の定義と関係について調査事例をふまえながら整理する必要もあろう。

なお、区画溝に話を戻すと、47トレンチから西南西へ約80mの地点においても、宅地造成工事の立ち会いの際に古代の溝と推定される遺構が断面観察で確認された。状況としては、上位は土取りや撹乱により削り取られているが、総社砂層に掘り込まれた小規模な溝が確認されたもので、大きな区画溝（２号溝跡）の底面の硬化面下の小規模な溝（３号溝跡）に該当するものと推定される。このことから、元総社蒼海遺跡群（95）で検出された区画溝は、さらに西南西へ約100m近く延びることが考えられる。

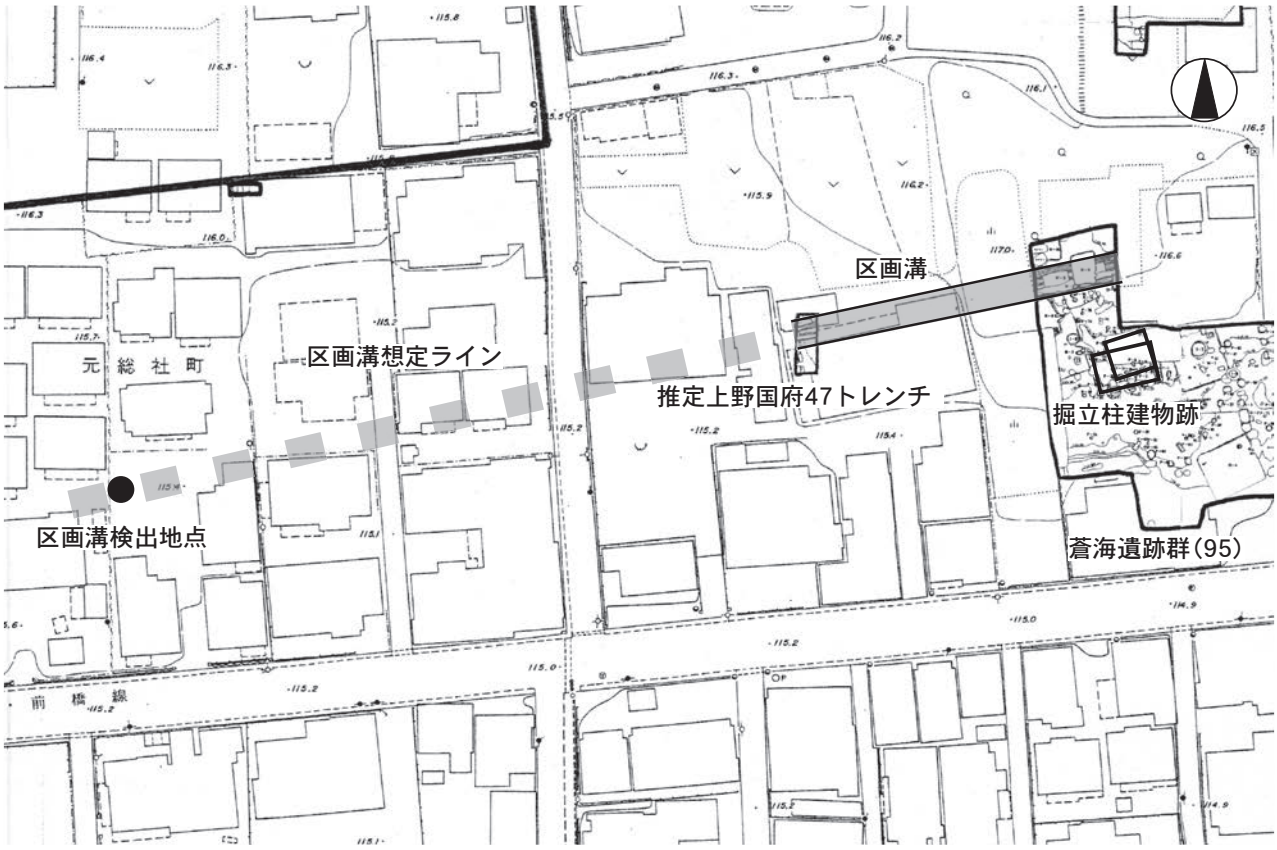


Fig. 35　国庁推定地Ｃ案付近の区画溝

3　推定東山道駅路国府ルートについて

⑴　調査の概観

45ａ・ｂトレンチは推定東山道駅路国府ルートの確認を目的として設定されたものであるが、側溝をともなう古代の道路跡を検出することができた。

推定東山道駅路国府ルートの確認調査は、平成25年度にその名残と考えられる道路の脇の土地で調査を実施しているが道路跡の検出には至らなかった（前橋市教育委員会　2015）。45ａ・ｂトレンチの調査は国府ルートの名残と考えられる地割に沿った地点で道路跡が検出されたことから、今回の調査結果は従来から考えられてきた説を補強するような形となった。

⑵　45ａ・ｂトレンチで検出された道路遺構について

ここで45ａ・ｂトレンチで検出された各遺構について述べたい。このトレンチの調査で合計９条の溝跡が検出されているが、１号・２号・３号・９号溝跡は中世以降に帰属し、古代の道路跡に関係する溝跡は４号・５号・６号・７号・８号溝である。道路跡と考えられる硬化面は、１号道路遺構（上位）と２号道路遺構（下位およびその南側）の２面が確認された。

トレンチ調査時、表土掘削が終了し遺構確認を行った時点で、４号溝跡と５号溝跡が検出され、その間が全面硬化した状態だった。また、５号溝跡の南側にも硬化面が確認され、さらにその南に６号溝跡が検出された。４号・５号・６号溝跡ともに覆土中に浅間Ｂ軽石の純層が確認できたが、４号・５号溝と比較して６号溝の浅間Ｂ軽石の堆積は少量であった。４号溝は１号溝に北半分程度を破壊されているが、４号・５号溝は同規模と推定される。６号・７号・８号溝跡については、６号・８号溝跡は断面形状・走行が近い。７号溝跡は６号溝跡と重複しているが、走行が若干異なるため交差するように重複している。また、断面形状も７号溝跡のみが深めの逆台形を呈している。道路遺構との重複状況としては、８号溝跡が１号道路遺構の道路面下、７号溝跡が２号道路遺構の道路面下からそれぞれ検出されている。こうした点を踏まえて以下のことを推定したい。

①道路はⅡ時期存在する。古い順から２号道路遺構（Ⅰ期）、１号道路遺構（Ⅱ期）と変遷する。

②６号溝跡と８号溝跡は２号道路遺構の側溝と推定される。７号溝跡についても２号道路遺構の側溝の可能性が考えられるが、その場合、６号溝跡の存在とその重複関係、さらには７号溝跡の覆土上部が２号道路遺構の道路面となっていることから、２号道路遺構（Ⅰ期）は南側溝を掘り直して道路の南端を造り直している。

③４号・５号溝跡は１号道路遺構の側溝と推定される。４号・５号溝跡は覆土中部に浅間Ｂ軽石の純層が認められたことや、その下層に粘質土が堆積していたことから、浅間Ｂ軽石が降下した1108年の直前頃には側溝は維持管理されなくなっていたと推定される。なお、浅間Ｂ軽石は南側溝の外側に位置する（６号溝跡）の覆土上部に浅間Ｂ軽石の純層が認められたことから、１号道路遺構が道路として機能していた時期（Ⅱ期）でも、Ⅰ期の側溝が浅く窪みとして残っていたことが想像できる。

上記の状況を整理して、道路の変遷について以下のとおりにまとめた。

・Ⅰａ期：道路面（２号道路遺構）に対して北側溝（８号溝跡）と南側溝（７号溝跡）をもつ道路。

・Ⅰｂ期：北側溝はそのままで、南側溝（７号溝跡）を掘りなおして（６号溝跡）、道路面も南側溝沿いを再整備した。

・Ⅱ期：道路面を北へ若干ずらして新たに上位に造り直し（１号道路遺構）、北側溝（４号溝跡）・南側溝（５号溝跡）ともに新たに掘削する。Ⅰｂ期の道路面と側溝はそのままの状態。

７号溝については６号溝跡と位置的に重複していることから２号道路遺構（Ⅰａ期）の側溝をその性格として推定したが、前述のとおり６号・８号溝跡とは特徴が異なり、断面形状は他の溝よりもしっかりとした台形を呈して深い。場合によっては、側溝はあくまでも６号・８号溝跡で、２号道路遺構には伴わない可能性も否定でき

Fig. 36　推定東山道駅路国府ルートの推定ラインと道路遺構検出遺跡（地点）

Tab. 5　各遺跡（地点）における推定東山道駅路国府ルート

	遺跡名・地点名・遺構名等	形状	路面幅	側溝幅	側溝深	走行	時期	その他の特徴	文献
1	寺ノ内遺跡	両側溝	—	—	—	—	As-B 降下以前		高崎市教育委員会 1979
2	御布呂遺跡　1トレンチ　道状遺構	両側溝	—	—	—	—	As-B 降下以前	道状遺構は高まりが認められる。道路は移動した（南か）可能性が考えられる。	高崎市教育委員会 1979
3	御布呂遺跡　水路区　道状遺構	両側溝	4.6m	1.0m	40cm	—	As-B 降下以前		
4	御布呂遺跡　2トレンチ　道状遺構	両側溝	—	—	—	—	As-B 降下以前		
5	御布呂遺跡　3トレンチ　道状遺構	両側溝	—	—	—	—	As-B 降下以前		
6	御布呂遺跡　4トレンチ　道状遺構	両側溝	4.5m	1.0m	30cm	—	As-B 降下以前		
7	御布呂遺跡　5トレンチ　道状遺構	両側溝	4.8m	1.0m	40～50cm	—	As-B 降下以前		
8	御布呂遺跡　道路区　道状遺構	両側溝？	—	—	—	—	As-B 降下以前		
9	浜川芦田貝戸遺跡　6区　道路遺構	両側溝	8.4～8.8m	0.7～1.7m	40～70cm	—	As-B 降下以前	側溝はそれぞれ３条が重複。As-B降下後に道が南へ移動。	高崎市教育委員会 1994
10	浜川芦田貝戸遺跡　1区　道路遺構	両側溝	—	—	—	—	As-B 降下以前		
11	熊野堂遺跡　道路状遺構	両側溝？	1.6～2ｍ？	0.4～1.8m	40cm	—	As-B 降下前から中世	４面？の路面構築層。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1984
12	西浦南遺跡　道路状遺構	両側溝	4.8m	0.76～1.76m	44～48cm	N—62°—E	As-B 降下以前	路面は２面あり、高まりをもつ。	群馬町教育委員会 1988
13	推定東山道　3トレンチ	両側溝？	未測定	3.0m	1.4m	N—64°—E	As-B 降下以前	南側溝。三段に掘り込まれる。	群馬町教育委員会 1987
14	推定東山道　5トレンチ	両側溝？	未測定	4.4～2.1m	1.16～0.75m	N—75°—E	As-B 降下以前	南側溝。溝は５期あり。路面も２時期あり？	
15	推定東山道　7トレンチ	両側溝？	—	4.75m	1.4m	N—138°—E	As-B 降下以前	南側溝。緩やかに回り込む。	
16	推定東山道　8トレンチ	両側溝？	—	—	—	—	As-B 降下以前	南側溝。緩やかに回り込む。	
17	推定東山道　9トレンチ	両側溝？	—	2.6m	1.7m	—	As-B 降下以前	南側溝が旧天王川氾濫原へと接続する地点。	
18	菅谷石塚遺跡　01号道路	両側溝	5.7～7.0m	—	—	N—70°—E	As-B 降下以前後９世紀代には存在？	北側側溝は２時期あり、As-B 降下時点で第一次側溝は埋没。路面も２時期あるが、第二次路面は As-B 降下以後の可能性あり。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1984
19	正観寺遺跡	両側溝	—	—	—	—	As-B 降下以前後		高崎市教育委員会 1982
20	推定東山道　11トレンチ	両側溝？	—	3.56m	1.1m	N—62°—E	As-B 降下以前	北側溝。１号住居跡を壊して側溝を掘削。	群馬町教育委員会 1987
21	推定上野国府45トレンチ２号道路遺構	両側溝	6.5m	1.6m	46cm	N—65°—E	As-B 降下以前	Ⅰ期	本報告書
22	推定上野国府45トレンチ１号道路遺構	両側溝	4.4m	2.7m	40cm	N—63°—E	As-B 降下以前	Ⅱ期	本報告書
23	鳥羽遺跡　A区　A１号道路状遺構	両側溝？	1.8m	0.4～１m	10cm	N—78°—E	As-B 降下以前		(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992
24	鳥羽遺跡　A区　A２号道路状遺構	両側溝？	2.5m	0.4m	10cm	N—78°—E	As-B 降下以後	A１号道路状遺構の南に隣接	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992

※表中の—は、報告書中で数値が未記載。

ない。Ⅰ期以前の道路遺構の側溝の可能性も指摘できるかもしれないが、２号道路遺構の下層では道路遺構は確認されていない。45ｂトレンチ６号・７号溝跡の南でも道路遺構と断定できる遺構は検出されなかったことから、現在のところその可能性は低いと考えられる。

なお、肝心な道路の時期に関する問題であるが、第５章にも記載のとおり、４号・５号・６号溝跡で認められた浅間Ｂ軽石層の堆積以外で、遺構の時期の決定根拠となるようなものの検出はない。強いて言うならば、１号道路遺構については、４号溝で、溝の底部や覆土から遺物が少量出土している。これらの要素から推測すると、11世紀前半頃は道路は機能していたと推定される。その場合、２号道路遺構はそれ以前の時期を想定しなくてはならないが、２号道路遺構に関しても土師器・須恵器の小片が極少量出土しているのみなので時期の特定は難しい。その様相から10世紀代は道路は存在していたと推測される。

この東山道駅路国府ルートと推定されている古代の道路は、中世も道路として使用されたと考えられており、この地割が中世になっても意識されていたようで、金尾城の堀がこの道路に沿うように掘削されている（山崎1979）。発掘調査でも１号溝跡（金尾城の堀跡）は１号道路遺構に沿うようにして検出されている。

⑶ 推定東山道駅路国府ルートの既調査地点との比較

東山道駅路国府ルートに関連すると推定される古代の道路跡は、高崎市域を中心に10遺跡24地点で検出されており（Tab.５）、上野国府等範囲内容確認調査45ａ・ｂトレンの関越自動車道測道を挟んだ東に隣接する鳥羽遺跡Ａ地区の調査でも、浅間Ｂ軽石降下前後の道路跡が２条検出されている。これらの遺跡（地点）は、東山道駅路国府ルートと推定される地割の上もしくはそれに隣接した場所で確認されている。

これら検出されている道路遺構の特徴としては、①道路面の幅は４ｍ前後の規模をもつ。②道路面の両側に側溝をもつ。③道路は度々造り変えられている。同一地点を通過する場合もあるが、隣接地へ付け替えられる事例も存在する。④道路はＮ－65°－Ｗ前後の走行をもつ。⑤道路が存続していた時期に浅間Ｂ軽石が降下している。を挙げられる。上野国府等範囲内容確認調査45ａ・45ｂトレンチで検出された１号・２号道路遺構についても特徴がこれらと共通している。検出した地点から考えても、東山道駅路国府ルートと推定される古代の道路とすることができるであろう。

一つ、頭に浮かんだ疑問として記しておきたいのは、道路遺構の時期的な問題である。45ａ・ｂトレンチの調査で、Ⅱ期の道路遺構に伴う側溝に浅間Ｂ軽石が堆積していたことから、12世紀初頭までは道路として機能していたと考えられ、その機能は11世紀代に遡っても問題はないと思われる。そうなるとⅠ期の道路はそれ以前に位置付けされるので、時期的な下限については大まかではあるが11世紀代と考えられる。その上限については特定できる根拠がないので判断は難しいが、Ⅰ期南側溝が浅間Ｂ軽石降下時点で埋没しきらずに僅かにくぼむ状態であったと推定されることから、Ⅰ期道路の上限はさほど古くはならず10世紀代を大きく遡らないと考えるのが妥当であろうか。

推定東山道駅路国府ルートは旧群馬町教育委員会による推定東山道11トレンチの調査結果（群馬町教育委員会1987）から、古くとも９世紀後半に造られたとされている。上野国内では国府ルートに先行する東山道駅路として「牛堀・矢ノ原ルート」の存在が知られている。その時期は７世紀後半から８世紀後半までとされている。国府ルートとされる道路遺構については、道路面を上書きするように複数の道路面が検出された地点が存在し、はたまた、隣へずらすように道路面を造り変えていると考えられる例も存在する。こうして造り変えられる道路面のうち、最古の道路面の時期が９世紀後半よりも古くなる可能性はないのだろうか。これまでに検出されている遺構の再検討や、今後、東山道駅路に関連する道路遺構の調査により、こうした疑問は解明されていくのであろうが、上野国府の解明とあわせて非常に興味深い。

4　おわりに

平成28年度調査の結果をうけて、今後の課題として以下の点にふれておきたい。

元総社小学校校庭のこと

元総社小学校校庭における国府関連施設の調査については、新たに２棟の掘立柱建物跡を検出することができた。これまでの調査成果と合わせて考えると、元総社小学校の校庭にはこの他にも掘立柱建物跡や溝跡などの遺構が存在する可能性が高くなってきた。それとあわせて、これら掘立柱建物跡や溝跡が構成する施設の性格や、その範囲はどこまでなのかという課題も解決しなければならない。

校庭の西では、平成25年度に調査した21a トレンチで区画溝が検出されている。それより先は西へ向かって傾斜していることから、現在、総社神社の参道の延長となっている南北方向の道路の付近は谷が存在していると推定される。その地形や現段階で検出されている遺構の分布から推測すると、施設の西限は21a トレンチ付近と考えるのが妥当かもしれない。北限については、元総社小学校の北側においては、過去に区画整理事業にともない発掘調査が行われたが（元総社明神遺跡：前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1992・1994・1997）、その調査範囲内からは掘立柱建物跡や溝跡は検出されていない。その成果を参考にするならば、施設の範囲は元総社小学校の敷地の北へは延びておらず、校舎付近が北限であったと考えられる。南限については、平成25・27年度調査の結果、校庭南端付近は台地の裾部付近と考えられ、施設の南限はそのやや北側、現在でいうところの校庭中央付近にあたる可能性が考えられる。最後に、東限については、現状、校庭の東には体育館が建てられている。体育館付近から東はかつて段丘状に下がり牛池川の流路へと続いていたことが、古写真や河川改修以前の状況から考えられる。一つの考え方として、体育館が建つあたりまでが台地の東端とするならば、21a トレンチで検出された区画溝的なものが体育館までの間にも存在する可能性がある。平成28年度に調査を実施した地点から体育館までの間で、さらなる掘立柱建物跡や、溝跡等の区画施設の確認が必要であろう。また、あわせて元総社小学校校庭にかつて存在した施設の性格についても検討しなければならない。

東山道駅路国府ルートのこと

東山道駅路国府ルートの調査については、平成28年度調査で、推定ルート上で古代の道路跡を検出することができた。鳥羽遺跡Ａ区で検出された道路遺構とあわせて、現時点で最東端の検出地点となりうるであろうか。東山道駅路国府ルートの推定ルートとされている地割は、現状では元総社町の釈迦尊寺の南付近までは細々と残存している。平成25年度に釈迦尊寺南方の推定ルート沿いで調査を行ったが道路遺構の検出には至らなかったことについては既に述べた（第１節参照。前橋市教育委員会　2015）。鳥羽遺跡Ａ区から染谷川までの間は、現在工場の敷地となっており、古代の道路遺構の確認調査は難しい状況にある。染谷川以東での推定ルート沿いでの調査は、前述の平成25年度調査の２地点で行ったのみで、工場の敷地を抜けて、染谷川を渡河する南栄橋付近での調査は行っていないことから、45a・ｂトレンチと鳥羽遺跡Ａ区のある地点から、順に検出地点を東へ進めていくように、推定ルート沿いで道路遺構の調査を進め、確実な道路遺構を西から順に押さえていければ、国府ルートの解明へと繋がるのではないかと思っている。

推定ルートのうち、染谷川と牛池川の間は推定ルートに沿って用水路の「芦田堰」が流れているが、染谷川を渡河してすぐの辺り（左岸）は、染谷川の旧流路と考えられる低地内を推定ルートの方位を維持したまま芦田堰とその堤（道路）が続いている。このような低地内を通る堤上の道路についてもう少し想像を膨らませるとするならば、伊勢崎市大道西遺跡の発掘成果が興味深い。この遺跡では、版築による強固な盛土で谷を渡し、その上面を道路とする構造の道路遺構が検出されている。なお、この道路遺構は昭和50年代の圃場整備により廃道となるまで古代からほぼ継続的に道路として使用されてきた可能性が高いという（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか　2011）。こうした道路遺構の検出事例があるとするならば、上野国府に関しても、国府域を通過する

道路を敷設するにあたって、染谷川の低地を直線的に通過させるために、盛土によって道路を造った可能性は考えられないだろうか。ここで問題となるのは、芦田堰が元々存在していた道路に沿って開削されたものなのか。それとも、芦田堰の開削によって現在の推定ルートと考えられる道路がその堤上に造られたのかという点であり、何らかの方法でその検証が必要となろう。なお、東山道駅路国府ルートに関しては、高崎市内でかつて旧群馬町教育委員会が実施した推定東山道７トレンチの調査では、天王川を渡河する際に、道路を川に直行させずにやや迂回させてから渡河している事例も確認されている（群馬町教育委員会　1987）。染谷川も同様の方法で渡河している可能性もある。いずれにしても、現状で発掘調査が比較的容易な条件にある染谷川左岸での調査が必要と思われる。

平成28年度調査は第２期５か年の初年であるが、元総社小学校校庭で新たに掘立柱建物が検出できたことや、推定東山道駅路国府ルートの調査では推定ルート上で古代の道路遺構を検出することができた。これらの成果は上野国府の国庁の発見には至らないものの、これまでの成果をさらに大きく上書きできる調査成果であったと感じられた。こうした調査の成果を蓄積し、上野国府の解明に努めたい。

最後ではありますが、本事業を遂行する過程で、調査地の地権者の方をはじめとして地元の元総社町のお住まいの方々、特に平成28年度調査では45a・bトレンチの調査の関係で鳥羽町にお住まいの方々からも協力・声援をいただきました。特に、かつての元総社や鳥羽の様子についての話は、地縁のない私にとっては非常に参考になる情報となります。そうした情報を地元の方々からご教示いただけることは非常にありがたく、深く感謝申し上げます。また、関係者のみなさんの助力につきまして末筆ではりますが大変厚く御礼申し上げます。

註

（1）　元総社小学校校庭は深く削平されているため本来あるべき土層堆積ではないので、あくまでも発掘調査時の遺構確認面のレベルでの比較を前提としている。

【主要参考文献】

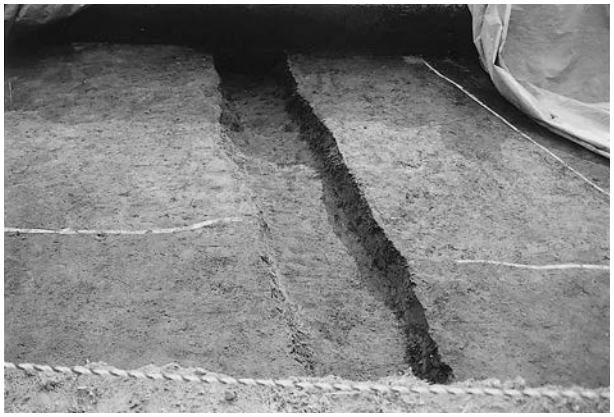
尾崎喜左雄　1963　「群馬県前橋市元総社小学校庭遺跡（第２次）」『日本考古学年報』16　日本考古学協会
金坂清則　1978　「東山道　上野国」『古代日本の交通路Ⅱ』藤岡謙二郎編
群馬県　1991　『群馬県史』通史編２
群馬県伊勢崎土木事務所・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　2011　『大道西遺跡』
群馬県教育委員会　1983　『東山道』群馬県歴史の道調査報告書第16集
群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992　『鳥羽遺跡　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区』
群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団　1984　『熊野堂遺跡（1）』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第３集
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996　『元総社寺田遺跡』Ⅲ
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001　『小八木志志貝戸遺跡群２　小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡、菅谷石塚遺跡』Ⅱ　古墳時代編
群馬県立歴史博物館　2001　『古代のみち－たんけん！東山道駅路－』群馬県立歴史博物館第70回企画展図録
群馬町誌編纂委員会　2001　『群馬町誌　通史編　上』
群馬町誌編纂委員会　2001　『群馬町誌　資料編Ⅰ　原始古代・中世』
群馬町教育委員会　1980　『菅谷遺跡発掘調査報告』
群馬町教育委員会　1987　『推定東山道－群馬町中泉・福島・菅谷地区を中心とする遺構確認調査報告－』
群馬町教育委員会　1988　『西浦南遺跡－群馬都市計画事業南部土地区画整理事業に伴う発掘調査の概要－』
小宮俊久　2013　「上野国の東山道駅路の現状と課題」『白門考古論叢』Ⅲ　中央大学考古学研究会
坂井　隆　1989　「東山道・あずま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴」『研究紀要』6　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂爪久純　2001　「東山道を掘る－上野国の事例を中心に－」『古代のみち－たんけん！東山道駅路－』収録
高崎市市史編さん委員会　2000　『新編　高崎市史　資料編２　原始古代Ⅱ』高崎市
高崎市教育委員会　1979　『矢島遺跡・御布呂遺跡－圃場整備事業に伴う浜川遺跡群の調査報告（1）－』

高崎市教育委員会　1982　『正観寺遺跡群（Ⅳ）』正観寺町諏訪巡り・村北・八本木地区の調査略報
高崎市教育委員会　1994　『浜川芦田貝戸遺跡Ⅲ』－高崎市総合水泳場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査－
文化庁文化財部記念物課監修　2010　『発掘調査のてびき　集落遺跡発掘編』同成社
文化庁文化財部記念物課監修　2013　『発掘調査のてびき　各種遺跡調査編』同成社
前橋市教育委員会　2013　『推定上野国府～平成23年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅰ
前橋市教育委員会　2013　『推定上野国府～平成24年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅱ
前橋市教育委員会　2015　『推定上野国府～平成25年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅲ
前橋市教育委員会　2016　『推定上野国府～平成26年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅳ
前橋市教育委員会　2017　『推定上野国府～平成27年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅴ
前橋市教育委員会　2013　『元総社蒼海遺跡群（44）、元総社蒼海遺跡群（45）』
前橋市教育委員会　2015　『元総社蒼海遺跡群（91）、元総社蒼海遺跡群（95）、元総社蒼海遺跡群（102）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1992　『元総社明神遺跡Ⅹ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1994　『元総社明神遺跡Ⅻ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1997　『元総社明神遺跡ⅩⅢ』
松島榮治　1986　「元総社小校庭遺跡」『群馬県史』資料編２　群馬県
山崎　一　1979　『群馬県古城塁址の研究　補遺編　上巻』群馬県文化事業振興会

写　真　図　版

１　45ｂトレンチ全景（南から）

２　45ａトレンチ遺構検出状態（南から）



３　45ａトレンチ２号溝跡全景（東から）

４　45ａトレンチ３号溝跡全景（南から）

５　45ａトレンチ１号・４号溝跡全景（東から）

１　45ａトレンチ５号溝跡全景（東から）

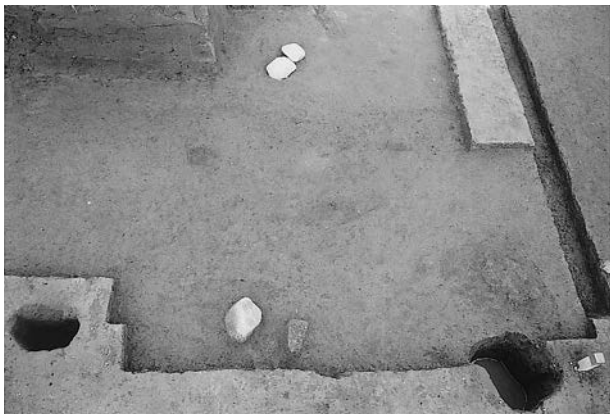
２　45ａトレンチ６・７号溝跡全景（南西から）

３　45ａトレンチ８号溝跡全景（東から）

４　46トレンチ全景（西から）

５　46トレンチ１号住居跡全景（南東から）

６　46トレンチ２号・３号住居跡全景（西から）



１　46トレンチ５号住居跡全景（南から）

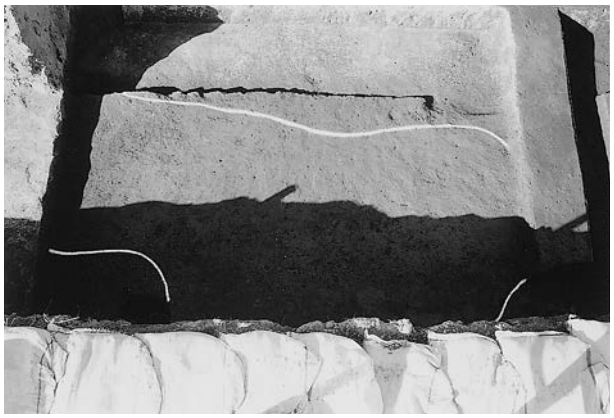
２　46トレンチ６号住居跡全景（西から）

３　46トレンチ７号住居跡全景（西から）

４　46トレンチ８号住居跡全景（南から）

５　46トレンチ９号住居跡全景（西から）

６　46トレンチ10号・11号住居跡全景（南から）



７　46トレンチ12号住居跡全景（南から）

８　46トレンチ13号住居跡全景（西から）

１　46トレンチ14号・15号住居跡全景（西から）

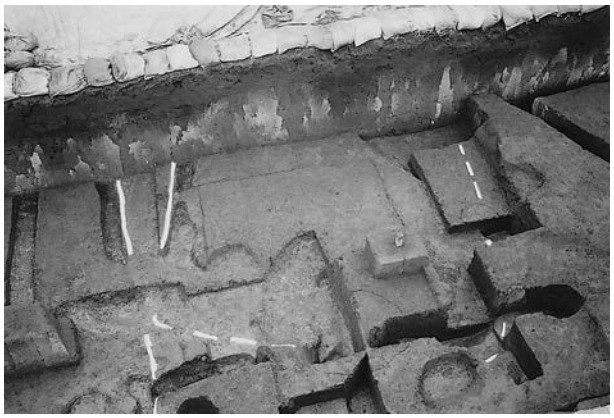
２　46トレンチ16号住居跡全景（西から）

３　46トレンチ17号住居跡全景（西から）

４　46トレンチ18号住居跡全景（東から）

５　46トレンチ19号住居跡全景（東から）

６　46トレンチ20号住居跡全景（南西から）



７　46トレンチ21号住居跡全景（東から）

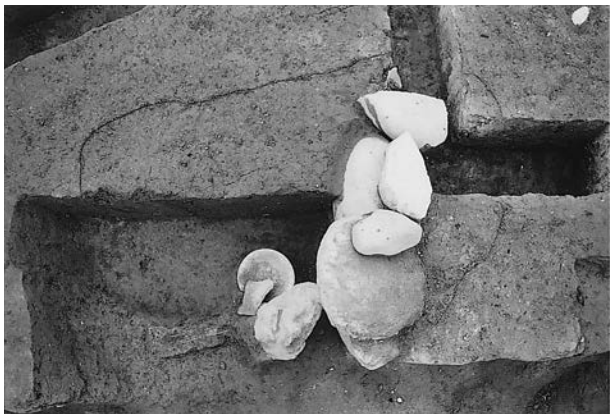
８　46トレンチ23号住居跡全景（南から）

１　46トレンチ１号溝跡全景（東から）

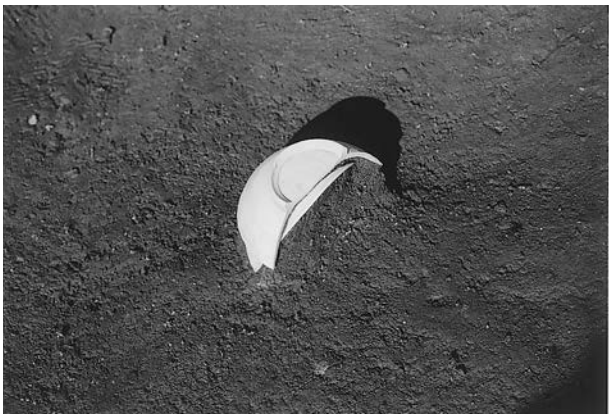
２　46トレンチ２号溝跡全景（溝から）

３　46トレンチ１号ピット列全景（東から）

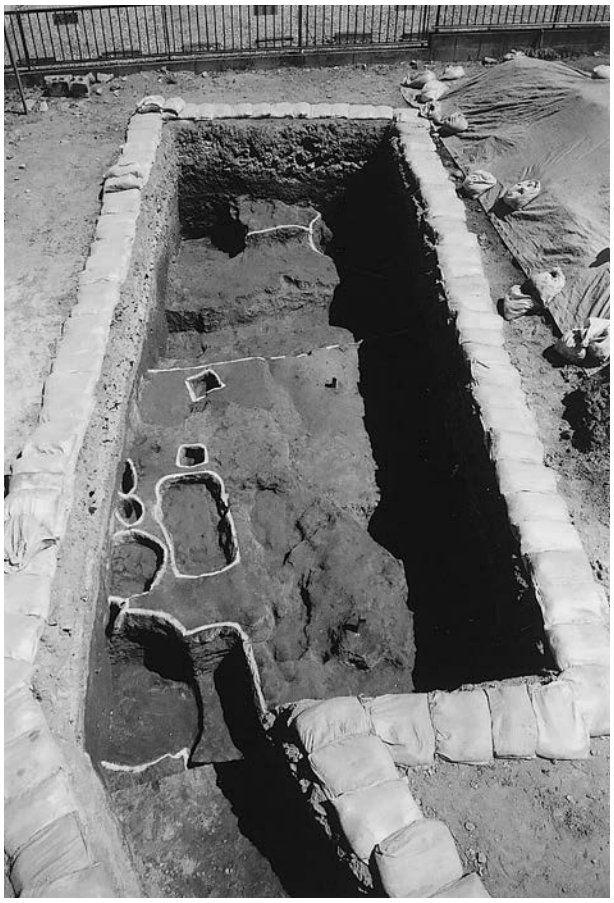
４　46トレンチ２号土坑全景（南から）



５　46トレンチ４号土坑全景（東から）



６　46トレンチ灰釉陶器出土状態（南から）



１　47トレンチ全景（南から）

２　47トレンチ２号溝跡硬化面検出状態（西から）

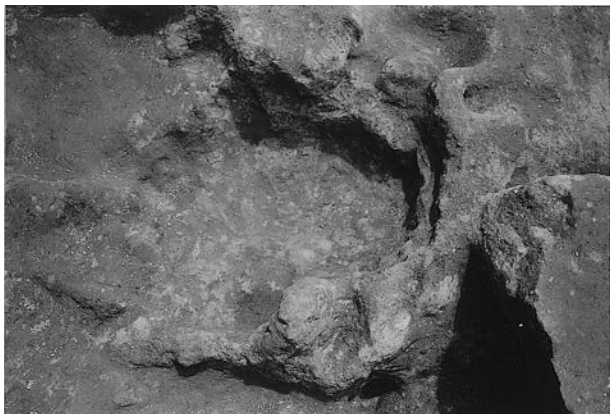
３　47トレンチ１号井戸跡全景（北から）

４　48トレンチ２号住居跡全景（南から）

５　48トレンチ３号・４号住居跡、１号溝跡全景（南から）

６　48トレンチ２号溝跡全景（南から）

１　48トレンチ２号掘立柱建物跡検出状態（西から）



２　48トレンチ２号掘立柱建物跡Ｐ$_{2}$検出状態（西から）

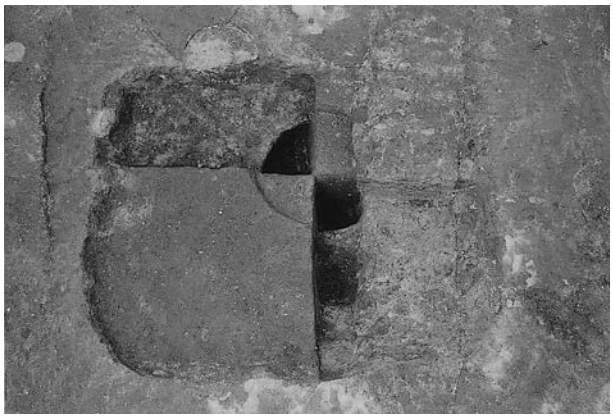
３　48トレンチ２号掘立柱建物跡Ｐ$_{1}$検出状態（西から）

４　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_{4}$検出状態（北から）

５　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_{6}$検出状態（北から）

６　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_{7}$検出状態（北から）

７　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_{9}$検出状態（東から）



８　48トレンチ４号掘立柱建物跡Ｐ$_{10}$検出状態（南から）

１　48トレンチ５号掘立柱建物跡全景（南から）

２　49トレンチ全景（南東から）

３　49トレンチ遺構掘り下げ状況（西から）

４　49トレンチ２号竪穴状遺構全景（南から）

５　調査風景（49トレンチ）

45a–2

46–1

46–10

46–11

46–12

46–17

46–21

46–23

46–25

46–26

46–30

46–34

46–36

46–37

46–38

46-45

46-47

46-60

46-61

46-62

46-63

46-64

46-72

46-75

46-76

46-80

46-81

46-83

46-88

46-92

48–1

48–3

49–4

49–10

49–12

49–13

49–14

49–15

49–17

抄　録

フリガナ	スイテイコウズケコクフ
書名	推定上野国府
副書名	平成28年度発掘調査報告書
シリーズ名	上野国府等範囲内容確認調査報告書
シリーズ番号	6
編著者名	阿久澤智和・並木史一
編集機関	前橋市教育委員会
編集機関所在地	〒371-0853　群馬県前橋市総社町三丁目11-4
発行年月日	20180320

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
スイテイコウズケコク フ 推定上野国府	マエバシ シ トリ バ マチ 前橋市鳥羽町 543-1ほか	10201	28A147	36°22′44″ ～ 36°23′19″	139°１′35″ ～ 139°２′21″	20160527 ～ 20161220	422㎡	範囲内容確認調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
推定上野国府	集落	古墳時代	住居跡１	土師器	推定東山道駅路国府ルートと推定される古代の道路跡を検出。
	官衙、集落 道路遺構	奈良、平安時代	住居跡29、掘立柱建物跡３、溝跡10、道路遺構２・落ち込み２、土坑21、ピット	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器	
	城館、集落	中世・近世	溝跡１、井戸跡３、竪穴状遺構３、土坑、ピット	陶磁器	

上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅵ

推定上野国府　平成28年度調査報告

2018年３月19日　印刷
2018年３月20日　発行

編集・発行／前橋市教育委員会文化財保護課
印刷／朝日印刷工業株式会社